

平成21年度発掘調査報告書

武道V遺跡	矢盛遺跡 第26次調査
落合2区I遺跡	大宮北遺跡 第15次調査
立花館遺跡	高屋敷II遺跡
平根原I遺跡	八幡遺跡
矢盛遺跡 第25次調査	ほか調査概報(34遺跡37調査)

2010

(財)岩手県文化振興事業団

平成21年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、平成21年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。全県下で41遺跡46件、約15万m²が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました委託者をはじめ、地元の各市町村教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年3月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 武田牧雄

目 次

平成21年度の調査結果について…………… 1

I 発掘調査報告

(1) 武道V遺跡（盛岡市）……………	5	(6) 欠盛遺跡第26次調査（盛岡市）………	55
(2) 落合2区I遺跡（花巻市）……………	21	(7) 大宮北遺跡第15次調査（盛岡市）………	59
(3) 立花館遺跡（北上市）……………	37	(8) 高屋敷II遺跡（住田町）……………	73
(4) 平根原I遺跡（奥州市）……………	47	(9) 八幡遺跡（奥州市）……………	95
(5) 矢盛遺跡第25次調査（盛岡市）………	51		

II 発掘調査概報

(10) 滝ノ沢遺跡……………	115	(28) 飯岡才川遺跡第16次調査……………	133
(11) 芦田沢田IV遺跡……………	116	(29) 佐原II遺跡……………	134
(12) 川日A遺跡第5次補足調査……………	117	(30) 小屋野遺跡……………	135
(13) 向III遺跡……………	118	(31) 鶴ノ木南台地遺跡……………	136
(14) 新田II遺跡……………	119	(32) 境遺跡……………	137
(15) 下嵐江I・II遺跡……………	120	(33) 五輪堂遺跡……………	138
(16) 大平野II遺跡……………	121	(34) 子飼沢I遺跡……………	139
(17) 金浜I遺跡……………	122	(35) 子飼沢II遺跡……………	140
(18) 八木沢野来遺跡第3次調査……………	123	(36) 南日詰小路口I遺跡……………	141
(19) 八木沢駒込I遺跡……………	124	(37) 南日詰小路口II遺跡……………	142
(20) 八木沢駒込II遺跡……………	125	(38) 水尻遺跡……………	143
(21) 細谷地遺跡第24次調査……………	126	(39) 古城方八丁遺跡……………	144
(22) 細谷地遺跡第25次調査……………	127	(40) 四反田I遺跡……………	145
(23) 向中野館遺跡第12次調査……………	128	(41) 四反田II遺跡……………	146
(24) 向中野館遺跡第13次調査……………	129	(42) 西部遺跡……………	147
(25) 矢盛遺跡第23次調査……………	130	(43) 舟渡I・II遺跡……………	148
(26) 矢盛遺跡第24次調査……………	131	(44) 野沢II遺跡……………	149
(27) 台太郎遺跡第66次調査……………	132		

平成21年度の発掘調査成果について

平成21年度の発掘調査事業は39遺跡44件150,979m²で開始したが、年度途中での追加を含めて最終的には41遺跡46件151,128m²の調査に着手した。本調査以外では、農業基盤整備事業等に関する試掘確認調査を実施している。

後期旧石器時代では前年度から継続になる奥州市下嵐江I・II遺跡（15）と水尻遺跡（38）を調査した。下嵐江I・II遺跡では石器集中区が10箇所確認され、7,859点の旧石器が出土している。水尻遺跡からは石器集中区4箇所が確認され、彫刻刀形石器やスクレーパーなど305点の遺物が出土している。

縄文時代では盛岡市芋田沢田IV遺跡（11）、川日A遺跡（12）、小屋野遺跡（30）、北上市淹ノ沢遺跡（10）、遠野市新田II遺跡（14）、奥州市鶴ノ木南台地遺跡（31）、宮古市八木沢野来遺跡（18）などを調査した。芋田沢田IV遺跡では中期～後期初頭と早期の住居跡32棟などからなる集落跡や円環が二重に回りダルマの形状をした配石造構などが検出された。川日A遺跡は4年目の調査となり、これまでに55基の配石造構や16基の埋設土器などが検出され、縄文時代後期を主体とした祭祀遺跡と考えられる。多量の遺物が含まれていて、これまで出土した遺物は土器732箱（10トン強）、石器444箱、土偶約700点、各種土製品、石製品3,000点などである。淹ノ沢遺跡は縄文時代前期末から中期初頭の遺物包含層を調査し、土器228箱、石器298箱など多量の遺物が出土した。鶴ノ木南台地遺跡も後晩期の遺物包含層が検出され、そのほか竪穴住居跡1棟もある。新田II遺跡は前期の大型竪穴住居群が検出された国指定史跡鐵織新田遺跡の北東の一帯低い段丘面に広がり、中期の竪穴住居跡26棟、掘立柱建物跡4棟などが検出され、中期の集落の中心域だったと考えられる。

弥生時代では、北上市境遺跡（32）、舟渡I・II遺跡（43）、野沢II遺跡（44）、宮古市佐原II遺跡（29）がある。4年目の調査になる境遺跡からは住居跡や土坑が検出されている。舟渡I・II遺跡からは土坑3基、野沢II遺跡からは竪穴住居跡1棟、佐原II遺跡からも竪穴住居跡1棟が検出されている。

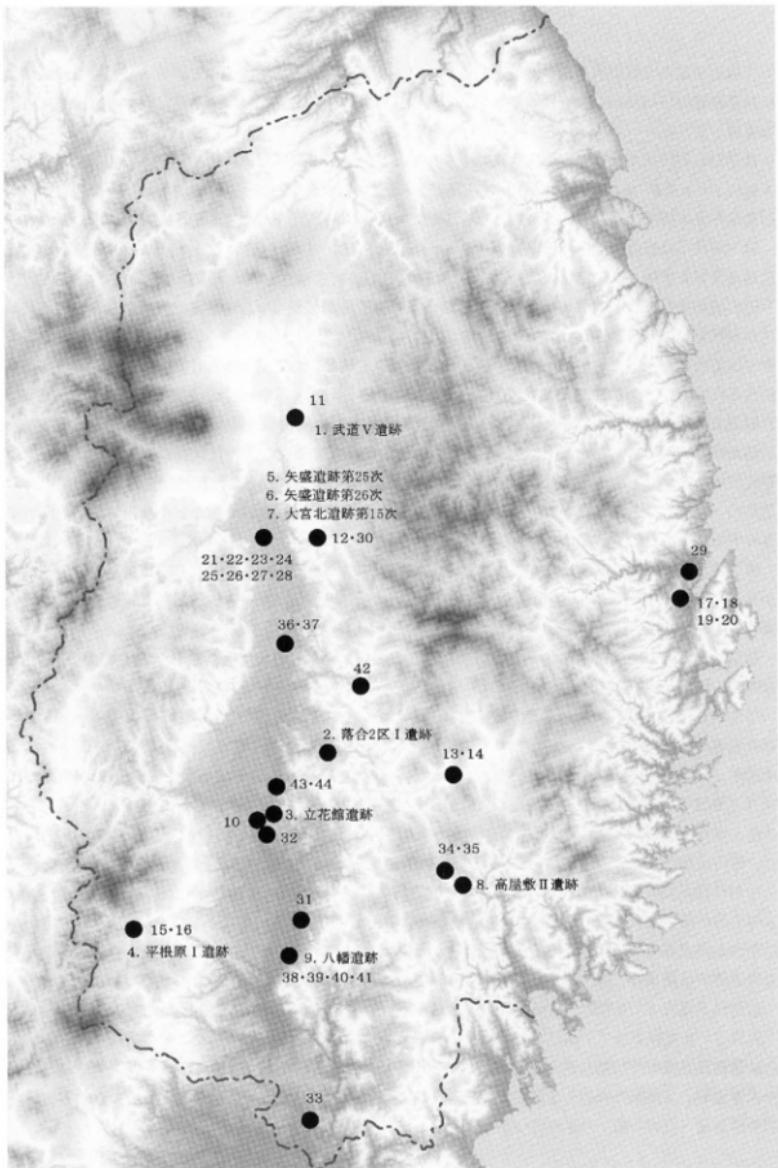
奈良時代は向中野館遺跡（23）、台太郎遺跡（27）がある。いずれも盛岡南新都市上地区西整理事業（盛南開発）に伴う継続調査で、集落を構成していた竪穴住居等が検出されている。

平安時代は縄文時代同様に多くの遺跡で調査されている。紫波町南日詰小路口I・II遺跡（36・37）、細谷地遺跡（22）、向中野館遺跡（24）、飯岡才川遺跡（28）、奥州市古城方八丁遺跡（39）、鶴ノ木南台地遺跡、舟渡I・II遺跡、野沢II遺跡などがある。南日詰小路口II遺跡からは竪穴住居跡3棟が検出され、細谷地遺跡など盛南開発の継続遺跡からは竪穴住居跡や建物跡が検出されている。古城方八丁遺跡でも3棟、南日詰小路口II遺跡では3棟、舟渡I・II遺跡からは5棟の竪穴住居跡などが検出されている。また、宮古市金浜I遺跡（17）からは1棟の竪穴住居跡から多数の支脚や製塙土器が出土している。

中世は樋爪氏の関連する居館と推定される紫波町南日詰小路口I・II遺跡が注目され、掘立柱建物跡3棟や井戸跡が検出され、井戸跡から12世紀の遺物が出土している。そのほか遺物がはっきり伴わなかつたが台太郎遺跡からは中世から近世にかけての建物跡72棟、竪穴建物跡3棟などが検出されている。細谷地遺跡では建物跡1棟、向中野館遺跡では昨年の調査から継続する堀の一部が確認された。

近世は下嵐江I・II遺跡、住田町子飼沢I・II遺跡（34・35）、花巻市落合2区I遺跡（2）等がある。下嵐江I・II遺跡では「下嵐江の番所跡」とみられる建物跡数棟が確認された。矢盛遺跡（25・26）からは建物跡21棟や井戸跡5基・墓24基などが検出された。子飼沢I・II遺跡では地下構造を持つ製鉄炉や大鍛冶炉、3箇所の煙出しを持つ木炭窯等が調査された。落合2区I遺跡では花巻城の石垣を築いた際の採石場（石切り場）の跡が見つかった。

（調査第一課長 佐々木清文）



国土地理院発行の数値データを用いて作図

報告遺跡位置図

I 発掘調査報告

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(1) 武道V遺跡

所 在 地	盛岡市玉山区芋田字武道58-15ほか	遺跡コード・略号	KE57-1125・TBDE-09
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	3.741m ²
事 業 名	一般国道4号渋民バイパス建設事業	調査終了面積	3.741m ²
発掘調査期間	平成21年4月9日～5月15日	調査担当者	羽柴直人・本多準一郎・田中美穂

1 調査に至る経過

「武道V遺跡」は渋民バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道4号は、東京都中央区日本橋を起点として、青森県青森市に到る国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。国道4号渋民バイパスは盛岡市玉山区渋民と同区馬場の間、約5.6kmの区間で計画されている。現国道は、ほぼ区の中心を南北に縦断し、全幅員8～12mと狭く、両側に歩道がない状態であり、近年の自動車交通の増大と車両の大型化に伴い、増加する交通需要に対応し、通過交通の分離による交通の円滑化、交通安全の確保及び沿道環境の改善を図ることを目的に昭和61年度に事業着手、平成8年から工事着手、平成16年度に一部供用し事業を進めている。

「武道V遺跡」については、過年度において岩手県教育委員会および盛岡市教育委員会が分布調査を実施し確認され、平成20年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受諾事業とすることとした。

これにより、平成21年4月1日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受諾事業を締結し、「武道V遺跡」の発掘調査に着手した。

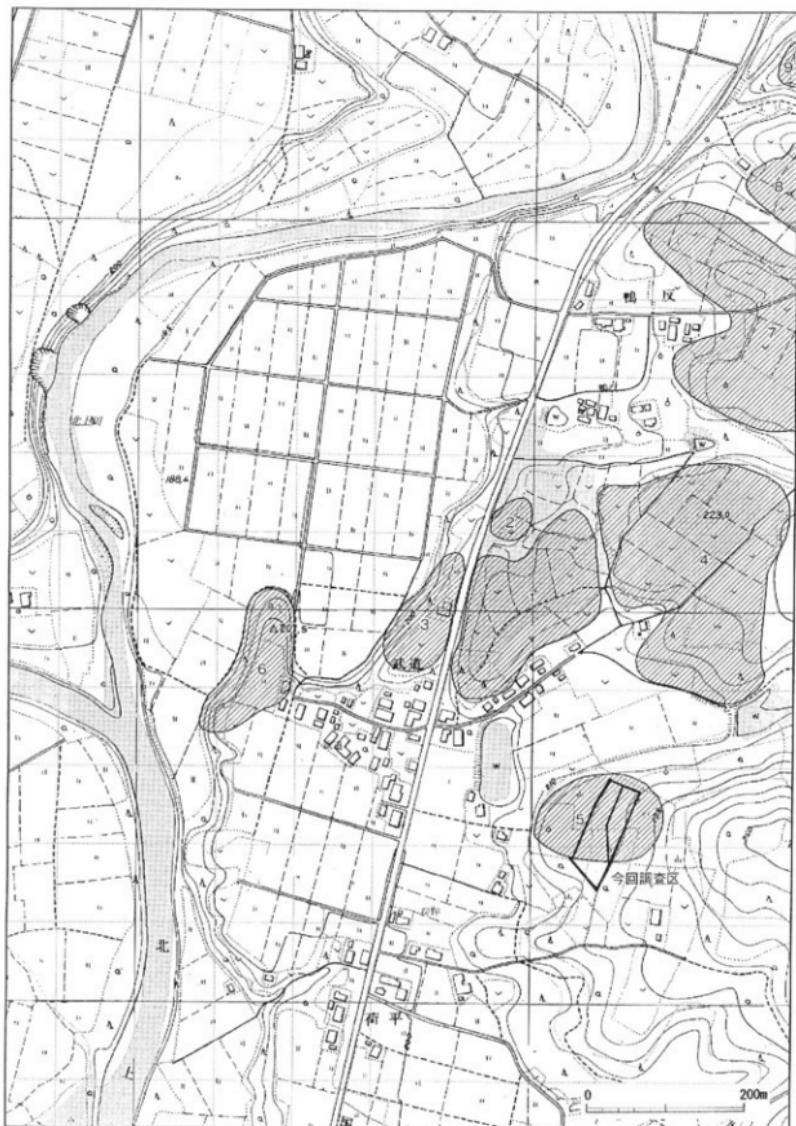
(国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)



第1図 遺跡位置図

1 : 25,000 渋民

(1) 武道V遺跡



岩手県遺跡情報検索システムから引用・改変

第2図 遺跡の立地、周辺の遺跡

2 遺跡の位置と立地、及び周辺の遺跡（第1・2図）

武道V遺跡はいわて銀河鉄道好摩駅の南東約2.1km、盛岡市玉山区茅田字武道に所在している。遺跡の西側には北上川が南流し、北上川の東岸には武道集落が位置する砂礫段丘が形成され、さらにその東には姫神山を主峰とする小起伏山地が広がる。遺跡はこの小起伏山地の西端縁辺部に立地する。遺跡の北西側には砂礫段丘面が谷状に奥深く入り込み、また、南東側にも砂礫段丘面が小規模ながら入り込み谷が形成されており、遺跡の乗る小起伏山地は西側に張り出す岬状の丘陵地形を呈している。そして遺跡の東側には標高250mの急峻な高地を背負っている。調査範囲からは西側への展望が開け、北上川や岩手山を望むことができる。

調査範囲の標高は213.5～219.5mで、調査区域の中央部の標高が高く、北側、南側ではそれぞれ標高を減ずる。調査区域中央部が丘陵の尾根に、南側、北側は丘陵端部の斜面部に相当する。

調査範囲は中央から北側が牧草地、南側が山林として利用され、牧草地と山林の境界部には農作業用の通路が調査区を横断していた。農作業用通路については、地権者の通行確保の必要があり、関係機関との協議の上、周辺の遺構分布から、遺構の存在の可能性は低いと判断し、表土除去をおこなわなかった。

周辺の遺跡は第2図に位置を示し、第1表に概要を示した。表中に記した7の「亘久保V遺跡」は高橋・武田1982の文献中の「武道遺跡」出土の上器に相当すると推測されるが、詳細は不明である。また「亘久保V遺跡」は2005・2006年に渋民バイパス建設工事に係る発掘調査が盛岡市教育委員会によりおこなわれており（盛岡教育委2008）、縄文早期の貝殻文土器や縄文中期の住居跡が検出されている。4の八幡館は沖積低地に突出する段丘で構成されており、現在は八幡宮が祀られている。源義家、義経に関わる伝承や玉山氏の一族渋民助市秀明の居館との説があるが、詳細は不明である。採集された陶器、磁器の内容も明らかではない。また、第2図の範囲からはわずかに外れるが、8の「亘久保IV遺跡」の東側に「亘久保III遺跡」が所在する。平成20年に渋民バイパス建設工事に係る発掘調査（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2009「平成20年度発掘調査報告書 亘久保III遺跡」第546集）がおこなわれ、縄文時代早期の貝殻文土器などが出土している。

第1表 周辺の遺跡

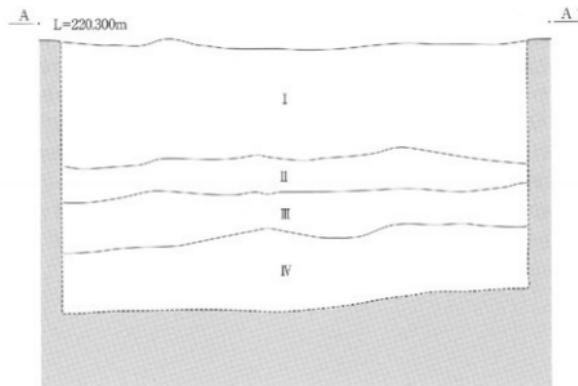
No	遺跡名	よみがな	種別	時代	遺構・遺物	所在地	文献等
1	武道I	ぶどうI	散布地	縄文 平安	縄文土器 平安土器	盛岡市玉山区 茅田字武道	
2	武道II	ぶどうII	散布地	縄文	縄文土器	盛岡市玉山区 茅田字武道	
3	武道III	ぶどうIII	散布地	縄文	縄文土器	盛岡市玉山区 茅田字武道	
4	武道IV	ぶどうIV	狩り場 集落	縄文 平安	縄文土器(晚期) 陶片 土器 須恵器 堅穴住居	盛岡市玉山区 茅田字武道	蛇岩根文2007「平成18年度発掘調査報告書 武道V遺跡2次調査」第505集
5	武道V	ぶどうV	散布地 狩り場	縄文	縄文土器(晩期) 陶片	盛岡市玉山区 茅田字武道	本著報告
6	八幡館	はちまんたて	城館跡	中世	跡 遺跡 陶器	盛岡市玉山区 茅田字下武道	本堂寿一他編1980「日本城郭大系2青森・岩手・秋田」新人物往来社 239頁
7	亘久保V	ひるくぼV	散布地	縄文 弥生	縄文土器 後北式土器	盛岡市玉山区 茅田 字亘保・武道	高橋昭治・武田良夫1982「手原山における後北式文化」『北東古代文化』第13号 盛岡市教育委員会2008「亘久保V遺跡」
8	亘久保VI	ひるくぼVI	散布地	縄文	縄文土器	玉山区茅田 字亘保・武道	
9	亘久保II	ひるくぼII	散布地	縄文	縄文土器	盛岡市玉山区 茅田字亘保	

3 基本層序（第3図、写真図版2）

基本層序を調査区中央の東端で観察した。土層の厚さは調査範囲各地点で異なる場合もあるが、層序は調査範囲全域で共通である。

I層	10Y R 2/1 黒色土	草根多量混入	牧草地造成時に動いた土	層厚20~60cm
II層	10Y R 3/2 黒褐色土	10Y R 4/4 褐色土少量混入		層厚50~120cm
III層	10Y R 4/4 褐色土	浮石少量混入	10Y R 3/2 黒褐色土少量混入	層厚10~20cm
IV層	10Y R 6/8 明黄褐色土	下部に行くほど浮石多量混入		層厚不明

I層は牧草地を造成する際に動かされた土であり、ビニール屑などが混入していた。遺構検出はIII層上面で、陥し穴状遺構の検出が可能であった。また、その下位の第III層及びIV層中からは、試掘調査の際に縄文早期等の遺物は全く検出されておらず、当該期の遺構遺物は存在しないと判断され、第IV層上面までの土層除去は基本的にはおこなっていない。

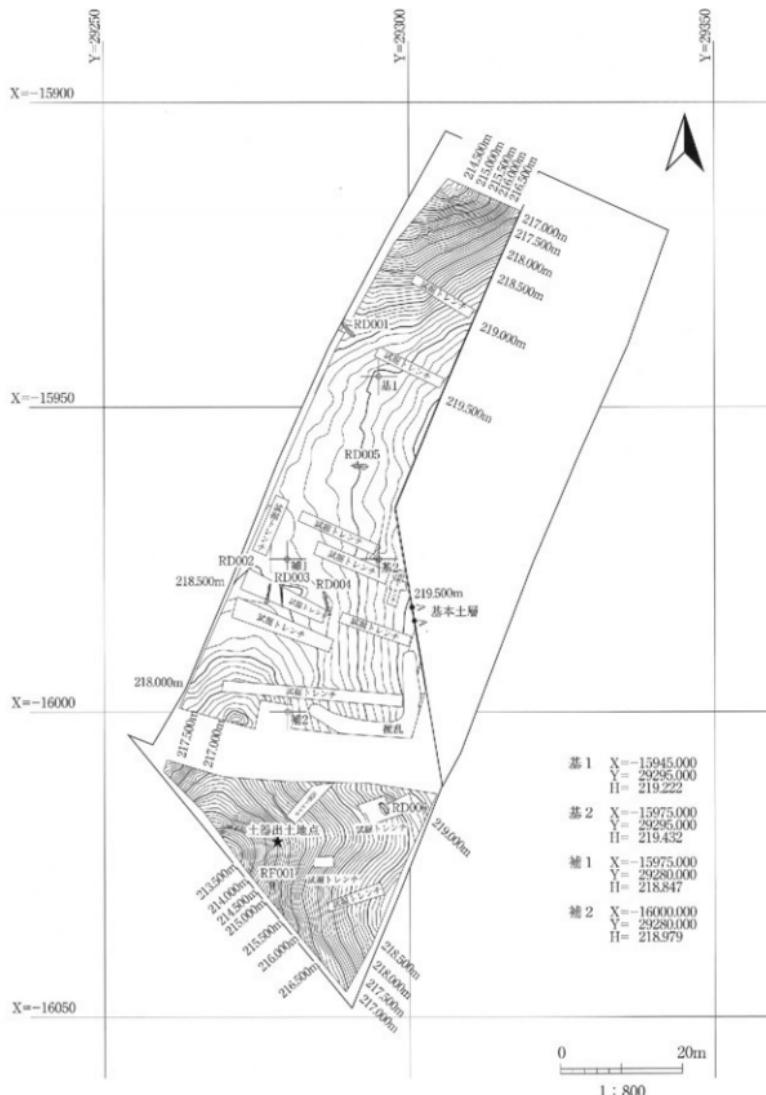


第3図 基本土層

4 調査の概要

野外調査は平成21年4月9日から5月15日までおこなった。実質の稼働日数は23日間である。調査対象面積は3,741m²である。調査区域内の出土遺物、検出遺構は寡少な状況であったが、表土及び、牧草地の造成土の堆積が厚く、重機による表土除去は調査終了直前までの時間を作った。よって表土除去、遺構検出、遺構精査、遺構実測の作業を並行して行う調査状況になってしまった。

検出された遺構は、陥し穴状遺構6基、焼土遺構1基である。盛岡市教育委員会の指定により、陥し穴状遺構は「R D」、焼土遺構は「R F」の記号を用いて表示する。出土遺物は縄文土器深鉢の口縁～体部片が1片出土している。出土遺物はこの縄文土器以外には全く出土していない。



第4図 遺構配置図

(1) 武道V遺跡

(1) 遺構

<陥し穴状遺構>

R D001陥し穴状遺構（第5図、写真図版3）

【位置】 調査区北側 X = -15.938m、Y = 29.292m付近に位置する。検出面はⅢ層上面で、黒色のプランとして検出した。重複関係はない。

【形態】 平面形は、北西—南東方向に長い溝状を呈するが、北西側は調査区外にのびているため未調査である。平面規模は、検出できた範囲で296×54cm、深さは104cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。南東壁側はややオーバーハングしている。底面は、ほぼ平坦である。

【堆積土】 周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

【出土遺物】 出土遺物はない。

【性格と時期】 出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

R D002陥し穴状遺構（第5図、写真図版3）

【位置】 調査区中央部 X = -15.982m、Y = 29.278m付近に位置する。検出面はⅢ層上面であるが、試掘トレンチにかかる部分の検出はⅣ層上面である。黒褐色のプランとして検出した。重複関係はない。

【形態】 平面形は、南北方向に長い溝状を呈する。平面規模は、332×34cm、深さは131cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。底面は、若干起伏はあるがほぼ平坦である。

【堆積土】 周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

【出土遺物】 出土遺物はない。

【性格と時期】 出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

R D003陥し穴状遺構（第5図、写真図版3・4）

【位置】 調査区中央部 X = -15.980m、Y = 29.280m付近に位置する。検出面はⅢ層上面であるが、試掘トレンチにかかる部分の検出はⅣ層上面である。暗褐色のプランとして検出した。重複関係はない。

【形態】 平面形は、南北方向に長い溝状を呈する。平面規模は、366×28cm、深さは126cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。底面は、ほぼ平坦である。

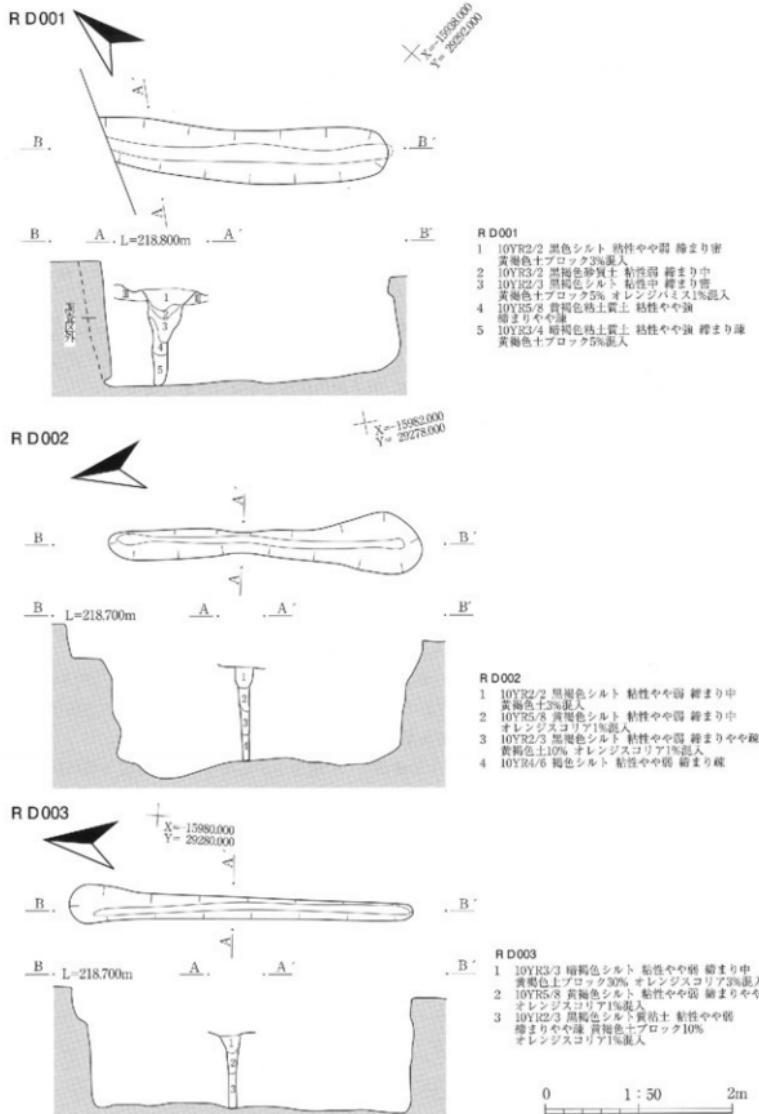
【堆積土】 周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

【出土遺物】 出土遺物はない。

【性格と時期】 出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

R D004陥し穴状遺構（第6図、写真図版4）

【位置】 調査区中央部 X = -15.984m、Y = 29.288m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。黒褐色のプランとして検出した。重複関係はない。



第5図 RD001~003

(1) 武道V遺跡

〔形態〕 平面形は、南北方向に長い溝状を呈する。平面規模は、392×48cm、深さは102cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。南北壁はややオーバーハングしている。底面は、ほぼ平坦である。堆積土は、周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔性格と時期〕 出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

R D005陥し穴状遺構（第6図、写真図版4）

〔位置〕 調査区中央部X = -15,960m、Y = 29,294m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。黒色のプランとして検出した。重複関係はない。

〔形態〕 平面形は、東西方向に長い丸みを帯びた溝状を呈する。平面規模は、236×58cm、深さは147cmである。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がり、上部に向かって開きながら立ち上がる。

東西壁は大きくオーバーハングしている。底面は、若干起伏はあるがほぼ平坦である。

〔堆積土〕 堆積状況は、周辺から流れ込んだと思われる土と壁面の崩落土からなり、自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔性格と時期〕 出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

R D006陥し穴状遺構（第6図、写真図版4）

〔位置〕 調査区中央部X = -16,015m、Y = 29,295m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。黒色のプランとして検出した。重複関係はない。

〔形態〕 平面形は、北西—南東方向に長い丸みを帯びた形状を呈する。平面規模は、223×122cm、深さは139cmである。壁面は底面から中央部までほぼ垂直に立ち上がったあと、外傾して開口部にいたる。底面は、若干起伏はあるがほぼ平坦である。

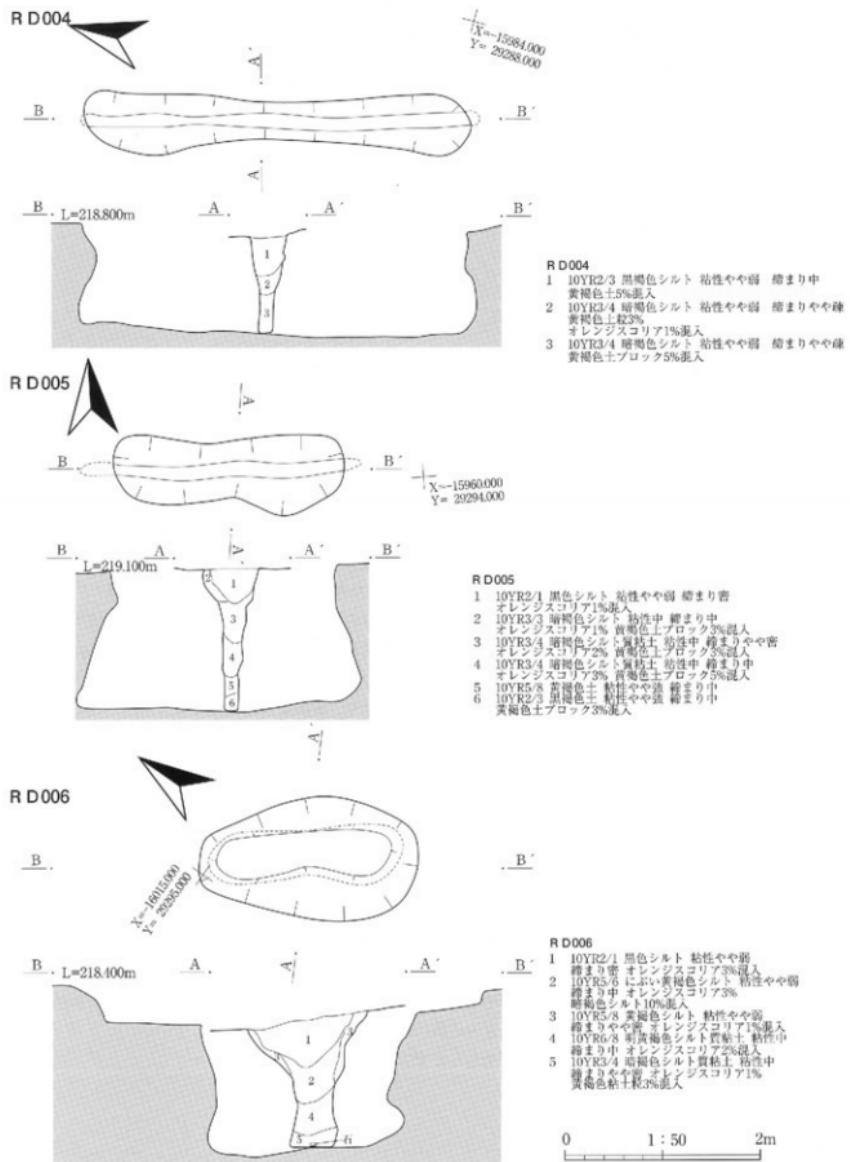
〔堆積土〕 周辺から流れ込んだと思われる土と壁面からの崩落土からなり、自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

〔性格と時期〕 出土遺物がなく詳細は不明であるが、検出面及び遺構の形態から縄文時代の陥し穴と考えられる。

第2表 陥し穴状遺構観察表

遺構名	調査区内の位置	規模(cm)			主軸方向	堆積土	時期ほか
		長軸	短軸	深さ			
R D001	北側	(296)	54	104	N - 42° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
R D002	中央部	332	34	131	N - 10° - E	自然堆積	縄文時代と推測される
R D003	中央部	366	28	126	N - 6° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
R D004	中央部	392	48	102	N - 17° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
R D005	中央部	236	58	147	N - 87° - W	自然堆積	縄文時代と推測される
R D006	南側	223	122	139	N - 36° - W	自然堆積	縄文時代と推測される



第6図 RD004～006

(1) 武道V遺跡

<焼土遺構>

R F001焼土遺構（第7図、写真図版5）

【位置】 調査区中央部X = -16,028m、Y = 29,278m付近に位置する。検出面はⅢ層上面である。重複関係はない。

【形態】 焼土は赤褐色で、74×48cmの不整形で検出された。焼土の厚さは、12cmほどである。現地性のものと思われる。

【出土遺物】 出土遺物はない。

【性格と時期】 出土遺物がなく詳細は不明である。検出面から推測して、縄文時代よりも新しい時期に属する可能性が高い。

(2) 出土遺物（第7図、写真図版5）

縄文土器片が1片出土している。出土位置は調査区南側中央付近（第4図参照）で、基本土層のⅡ層中からの出土である。重機での表土除去中に出土したため、一部欠損させてしまったが、本来は単一の破片と判断される。15×26cm程の大形破片で、口縁部から体部上半までの部位である。単独での出土で土器埋設遺構の可能性を検討したが、その状況は見出せなかった。また、周辺に直接関連する遺構や、共伴する遺物の出土は皆無であった。

器種は深鉢である。口径は反転実測で32.0cmと求められた。器高は17.9cm分が残存している。器壁は6~7mmとかなり薄い。外面には単節LR縄文が全面に施されている。内面には箒状の工具による器面調整が横位に施されている。外面の色調は10YR6/6明黄褐色をベースに10YR3/3暗褐色のむらが部分的にみられる。内面の色調は75YR5/8明褐色である。口唇～口縁部の断面形は、口唇部が平らな角張った形態である。外面には成形の際の輪積みの継目がみられるが、継ぎの調整は下部から上へ向けての調整である。また、外面の体部上半には炭化物が付着し、口縁部には吹きこぼれ痕と推測される液の付着痕跡がみられ、実際に煮沸に使用した土器と判断できる。

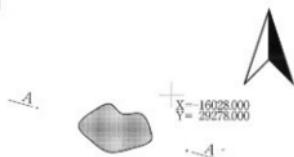
縄文文施のみの深鉢で、共伴する時期特定可能の土器もなく、詳細な時期特定は難しいが、口縁部断面形の形状、継目の調整方向、また器壁の薄さなどを考慮すると、縄文晚期初頭～前葉の可能性が高いとの所見を複数の当埋文センター調査員から得た。あえて形式に当てはめると、大洞B式ないし大洞BC式に相当する可能性が高い。

5 まとめ

武道V遺跡の今回の調査範囲では、縄文時代に属する陥し穴状遺構が6基検出され、縄文時代のある時期には狩り場であったことが明らかになった。陥し穴状遺構の形態、軸方向は多様であり、単独の時期ではなく、複数以上の時期にわたる構築が推測される。この中でRD003陥し穴状遺構とRD004陥し穴状遺構は形態と軸方向が類似し同時存在の可能性を指摘できる。また、1片のみであるが晩期の縄文土器片が出土したことは、調査区の近隣に縄文晩期集落の存在を示唆している。

なお、武道V遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

R F 001



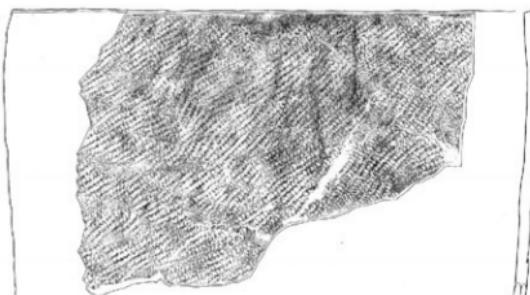
R F 001
I 5 YRA/6 赤褐色燒土 黏性弱 硬まり害 黑色土ブロック5%
及1%混入

土器出土状況



0 1 : 50 2m

縄文土器実測図



0 1 : 3 10cm

第7図 R F 001、土器出土状況・縄文土器実測図

(1) 武道V遺跡



調査区遠景（東から）



RD002・003・004陪穴 (西から)



調査区北側調査前風景（南から）



調査区南側調査前風景（北から）



調査区近景（東から）



調査区北側北端部（南から）



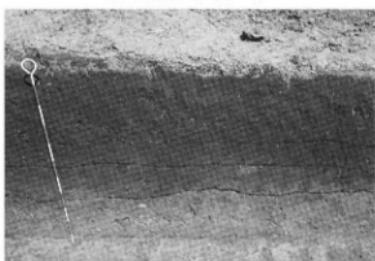
調査区中央部（北から）



調査区南側全景（南から）

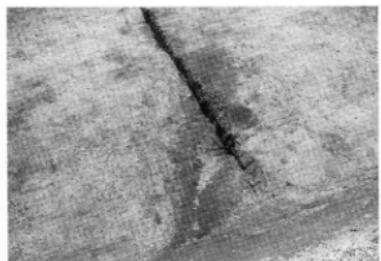


遺跡遠景（北から）

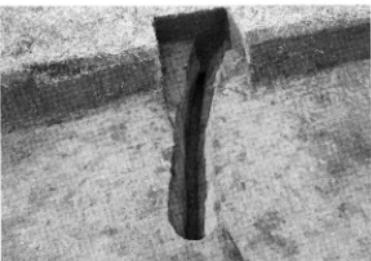


基本土層

(1) 武道V遺跡



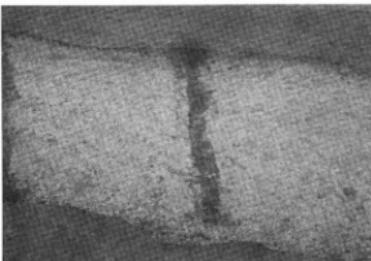
RD 1 検出状況 (西から)



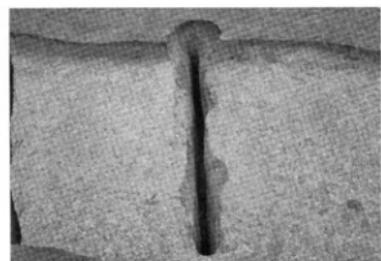
RD 1 平面 (東から)



RD 1 断面 (東から)



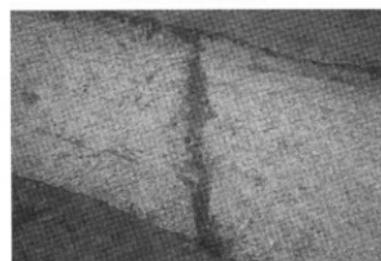
RD 2 検出状況 (北から)



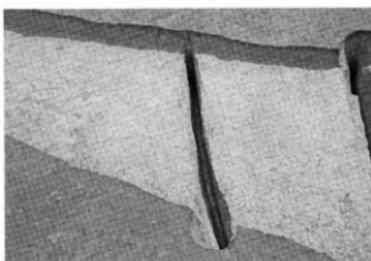
RD 2 平面 (北から)



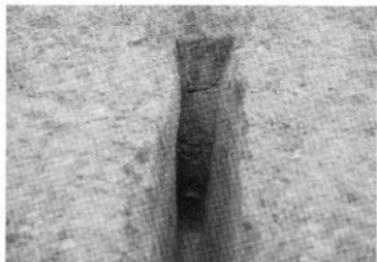
RD 2 断面 (南から)



RD 3 検出状況 (北から)



RD 3 平面 (北から)



R D 3 断面 (南から)



R D 4 棟出状況 (北から)



R D 4 平面 (北から)



R D 4 断面 (北から)



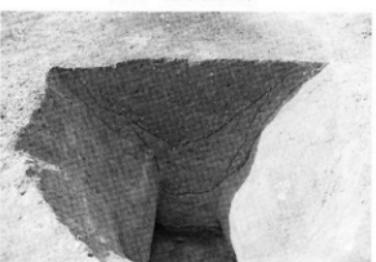
R D 5 平面 (西から)



R D 5 断面 (東から)



R D 6 平面 (南から)

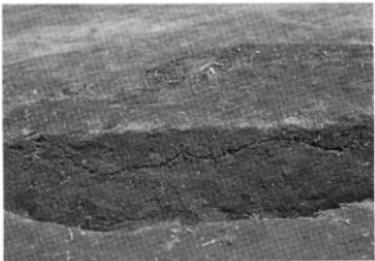


R D 6 断面 (南から)

(1) 武道V遺跡



RF 1 平面 (西から)



RF 1 断面 (南から)



土器出土状況



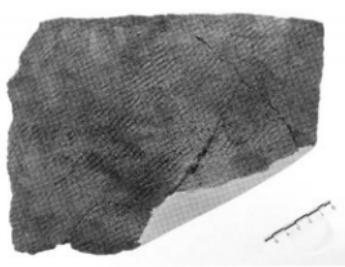
陥し穴状構造調査風景



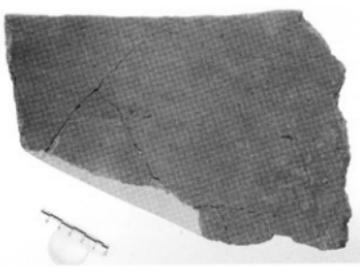
実測作業風景



検出作業風景



縄文土器 (表)



縄文土器 (裏)

(2) 落合2区I遺跡

所 在 地	花巻市東和町落合2区57地内ほか	遺跡コード・略号	ME38-0293・OA2 I-09
委 託 者	国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,515m ²
事 業 名	東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業	調査終了面積	1,515m ²
発掘調査期間	平成21年9月1日～9月17日	調査担当者	晴山雅光・福島正和

1 調査に至る経過

落合2区I遺跡は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の施工に伴って、その事業区域内に遺跡が存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

東北横断自動車道は、東北縦貫自動車道（東北道）に合流、さらに北上市にて分岐し、西和賀町・横手市・大仙市を経由して秋田市に至る総延長212km（内岩手県内113kmで供用区間は45km）の高規格道路である。

本路線は、釜石港・大船渡港といった重要港湾や観光資源豊富な陸上海岸国立公園を有する三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しい北上中部地方拠点都市地域や花巻空港等の岩手県内と秋田県とを結び、周辺地域のみならず岩手・秋田両県全域の産業・経済発展を担うことを目的に策定された。遠野～東和間については、平成10年度に遠野～宮守間で整備計画が、宮守～東和間では施行命令がそれぞれ出されている。また、平成16年度には新直轄方式による整備が決定している。

落合2区I遺跡については、過年度において岩手県教育委員会および東和町教育委員会が分布調査を実施し確認されたものである。落合2区I遺跡については、平成21年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて、平成21年7月8日付けで岩手県教育委員会教育長あてに協議し、平成21年7月31日付けで国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所あてに通知されたことに基づき、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団の委託事業とすることとした。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

2 遺跡の位置と立地（第1・2図）

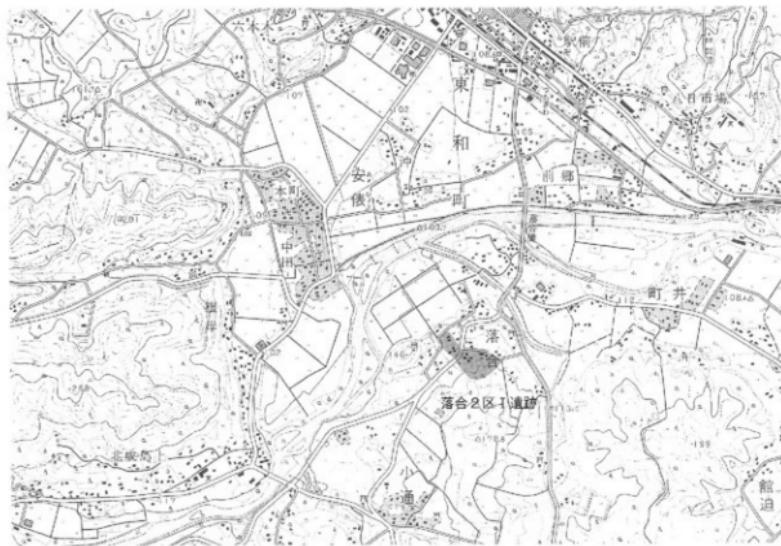
落合2区I遺跡は花巻市東和町落合2区に所在する。遺跡はJR釜石線上沢駅より約1.5km南に位置する。旧東和町内を蛇行しながら東西に流れる猿ヶ石川とこれに南から注ぎ込む毒沢川との間に挟まれた低位段丘上に立地し、調査区は南から北へ延びる小丘陵に挟まれた谷部である。周辺は現地表面でも巨大な花崗岩の転石が点々とみられる地帶である。これら花崗岩の転石は、背後の丘陵起源のものであると推測される。調査地点の標高は約127mであり、調査前は山林や畠地として利用されていた。

3 基本層序（第3図、写真図版2）

調査区内の地形は西に向かって緩やかに下る。したがって、土層の堆積状況は高低差により東に向かって堆積の厚みが増す傾向である。

調査区内の基本層序は、上からⅠ層（表土）、Ⅱ層（黒褐色シルト）、Ⅲ層（黒色シルト～暗褐色砂質シルト）、Ⅳ層（灰黄褐色～褐色シルト）、Ⅳ層以下は花崗岩の風化層が堆積した状況などが認められる。なお、調査区内に多く点在する花崗岩の転石はⅣ層やそれ以下の堆積層に入り込んでいるものもみられる。そのため、これら転石はすべて同一時期に流れ込んだものではなく、かなり古い時代から幾度も流動して調査区内に落ちていたものであると考えられる。

(2) 落合2区1遺跡



第1図 遺跡の位置

1 : 25,000 土沢



第2図 調査位置

1 : 4,000

4 調査の概要

(1) 遺構

今回の調査で検出した遺構は土坑5基（SK01～05）、溝1条（SD01）である。いずれの遺構もIV層上面で検出した。

SK01土坑（第5図、写真図版3）

調査区中央に位置する。平面やや不整な円形で底面はレンズ状に窪む。規模は南北長1.95m、東西長1.86m、深さ65cmである。埋土はおおむね上下2層からなり、上層は黒褐色の粘質シルト、下層は暗褐色の中粒砂である。いずれも軟質の土壤である。埋土上層には縄文土器片が多く含まれ、特に検出面に近い上位のレベルでは集中して認められた。下層には遺物が含まれておらず、最底面を検出すると湧水する。また、底面半ばは地山に含まれている花崗岩が露出している。この遺構の性格は不明であるが、埋土より出土した縄文土器より縄文時代晚期の遺構であると考えられる。

SK02土坑（第5図、写真図版3）

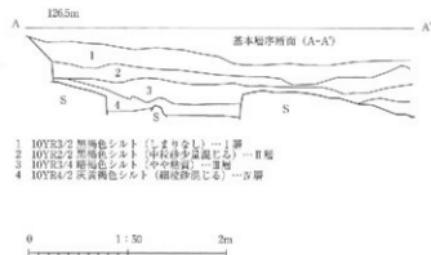
調査区中央より南西に位置する。平面形態は円形であると推測されるが、水路などの攪乱等によつて判然としない。規模は1m程度の直径を有するものと考えられ、残存する深さは22cmである。埋土はおおむね3層からなり、いずれも砂質の土壤で構成される。また、地形的に沢筋にあたっているためか湧水著しく、なおかつ、埋土はグライ化が顕著である。埋土中より縄文土器の細片が一定量出土した。遺構の南側側面は地山に含まれている巨大な花崗岩が露出しており、この巨石までが遺構の範囲であるとみられる。この遺構の性格は不明であるが、埋土より出土した縄文土器より縄文時代晚期の遺構であると考えられる。

SK03土坑（第5図、写真図版3）

調査区南側に位置する。一部、木の根によって攪乱されているが、平面長楕円形の土坑であると考えられる。規模は長軸方向である南北長1.92m、短軸方向である東西長0.65m、深さは中央最深部で16cmである。埋土は褐色を帯びたシルト質砂の単層である。埋土や遺構周辺から遺物は出土しなかつた。遺構の時期、性格とも不明である。

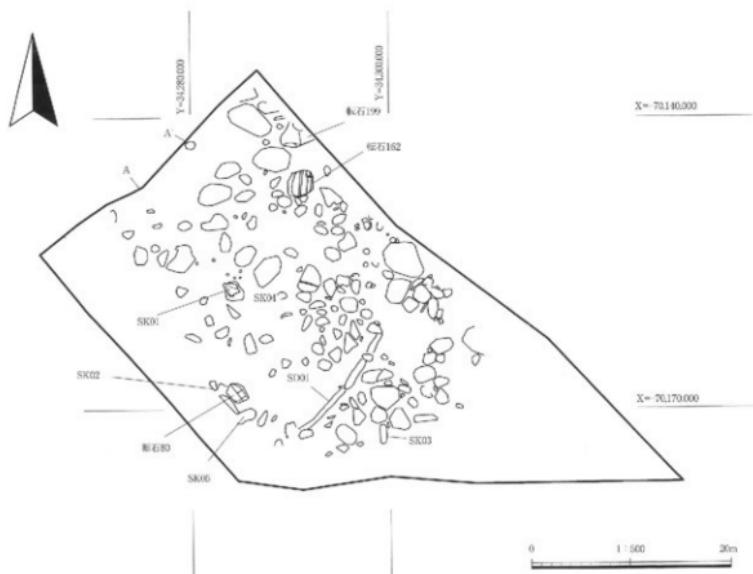
SK04土坑（第5図、写真図版3）

調査区中央に位置する。西側の一部を攪乱によって失われているが、平面形態はおおむね円形であると考えられる。規模は南北長0.68m、東西長0.93m、深さは26cmである。埋土は3層からなり、上層は褐色と黒色のブロック混合土であり、中層は褐色の砂質シルトである。下層は断面図や断面写真に掛からなかったが、遺構の中心部にわずかな範囲で黒色粘質シルトが存在する。この埋土下層より縄文土器の細片が数点出土している。この遺構の性格は不明であるが、埋土下層より出土した縄文土器より縄文時代の遺構であると考えられる。

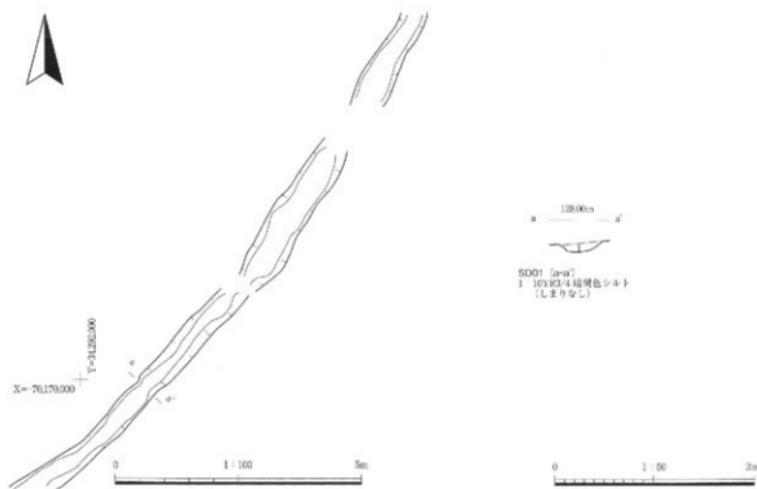


第3図 基本層序断面

(2) 落合2区I遺跡



第4図 遺構配置



第5図 SD01

SK05土坑（第5図、写真図版3）

調査区中央より南西に位置する。平面形態は楕円形であると推測されるが、水路などの擾乱等によつて判然としない。規模は1m程度の直径を有するものと考えられ、残存する深さは22cmである。埋土はおおむね2層からなり、いずれも砂質の土壤で構成される。また、地形的に沢筋にあたっているためか湧水著しく、なおかつ、埋土はグライ化が顕著である。埋土中より縄文土器の細片が一定量出土した。遺構の周辺には地山に含まれている巨大な花崗岩が露出しており、この巨石によって遺構の範囲が区切られているように思われる。この遺構の性格は不明であるが、埋土より出土した縄文土器より縄文時代晚期の遺構であると考えられる。ただし、出土した土器類は微細な破片が多く、なおかつ磨滅が著しく文様等が不鮮明である。

SD01溝（第5図、写真図版3）

調査区南側に位置し東西方向に延びる。長さ12.8m、幅60cm、深さ約10cmの直線的な溝である。埋土は土坑などとは異なり、しまりのない暗褐色シルトの単層である。出土遺物はなく、時期および性格は不明である。

切石（写真図版4）

調査区内には花崗岩の転石が多く存在する。これら転石には、石材として割り採った痕跡が認められるものがいくつか存在する。この切石の痕跡は矢穴が連続して打ち込まれている点で共通する。また、これら痕跡のみで時期は特定できないものの、その痕跡は形状や寸法が等しく、おおむね一時期におこなわれているものと考えられる。

(2) 遺物（第6・7図 写真図版5～7）

出土した遺物のうち、図化可能なものを中心に選択し本書に掲載した。また、これら掲載遺物は表1に一覧としてまとめた。出土遺物量は、土器が大コンテナ約2箱、石器が小コンテナ1箱である。なお、遺構出土の土器類はそのうち約1割の量である。

1～56はいずれも縄文土器である。1～22はSK01の埋土より出土した。21・23～25はSK02の埋土から出土した。26～56は遺構外出土である。これらは縄文時代晚期の所産と考えられる。

57は須恵器の壺底部片である。9～10世紀の所産と考えられる。58・59は磁器碗である。いずれも近世のもので、58は大堀・相馬産である。59は在地で焼かれた臺（台）焼である。

60～62は遺構外出土の石器である。いずれも縄文時代のものと考えられる。60は乳白色の頁岩製石匙である。基部に対して縱方向に長い刃部を有する。

63・64は遺構外出土の砥石である。いずれも凝灰岩製とみられるが、所属時期は不明である。

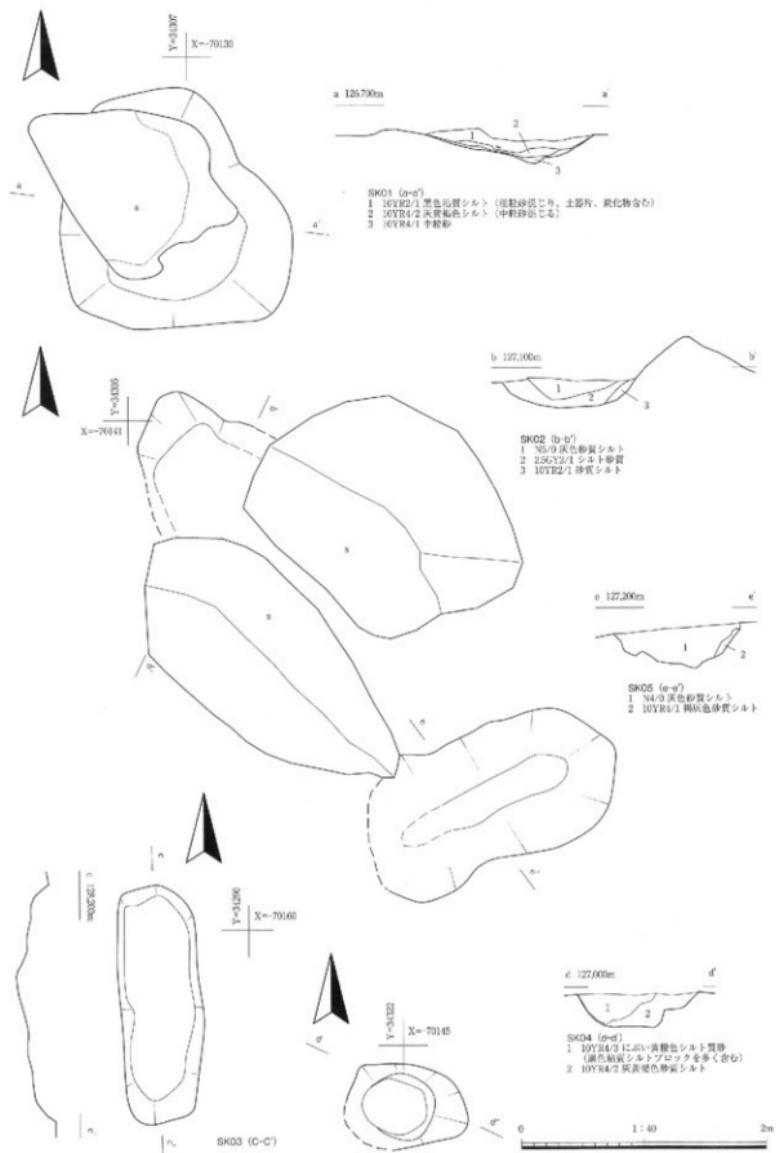
65は石切作業で生じた花崗岩残滓の一部である。調査区北側で出土した。矢穴痕跡が認められ、人為的に割り採られたものの残滓であると考えられる。矢穴痕跡は逆台形であり、最小幅である先端部が3cm、最大幅が3.5cmである。石質は粗粒花崗閃緑岩とみられ、この周辺で検出される他の転石と同じである。

5 まとめ

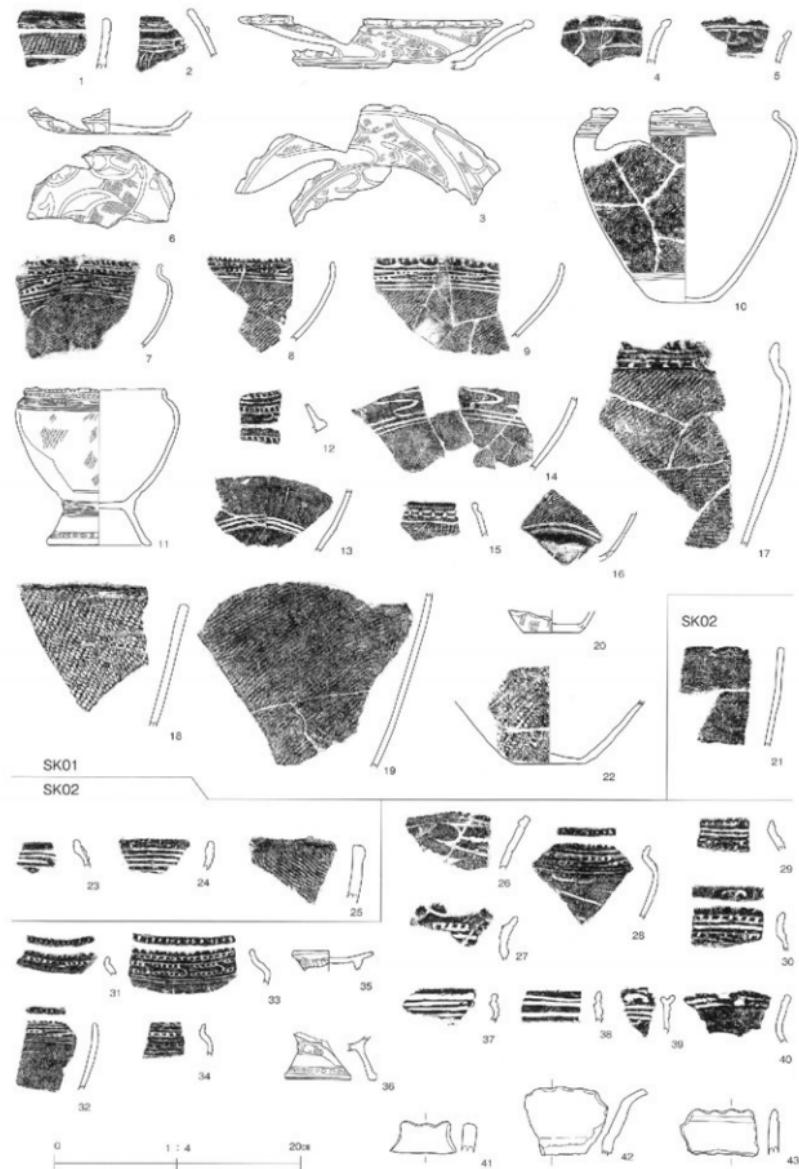
今回の調査では縄文時代晚期と考えられる土坑4基、時期不明の土坑1基、溝1条を検出した。調査区内において竪穴住居などの遺構はみられなかったが、縄文時代晚期の土器を包含する土坑の検出は、周辺にこの時期の集落が存在することを示唆している。

また、調査区内に点在する巨大な花崗岩転石群の中には石切作業がおこなわれた形跡を残すものが

(2) 落合2区1遺跡

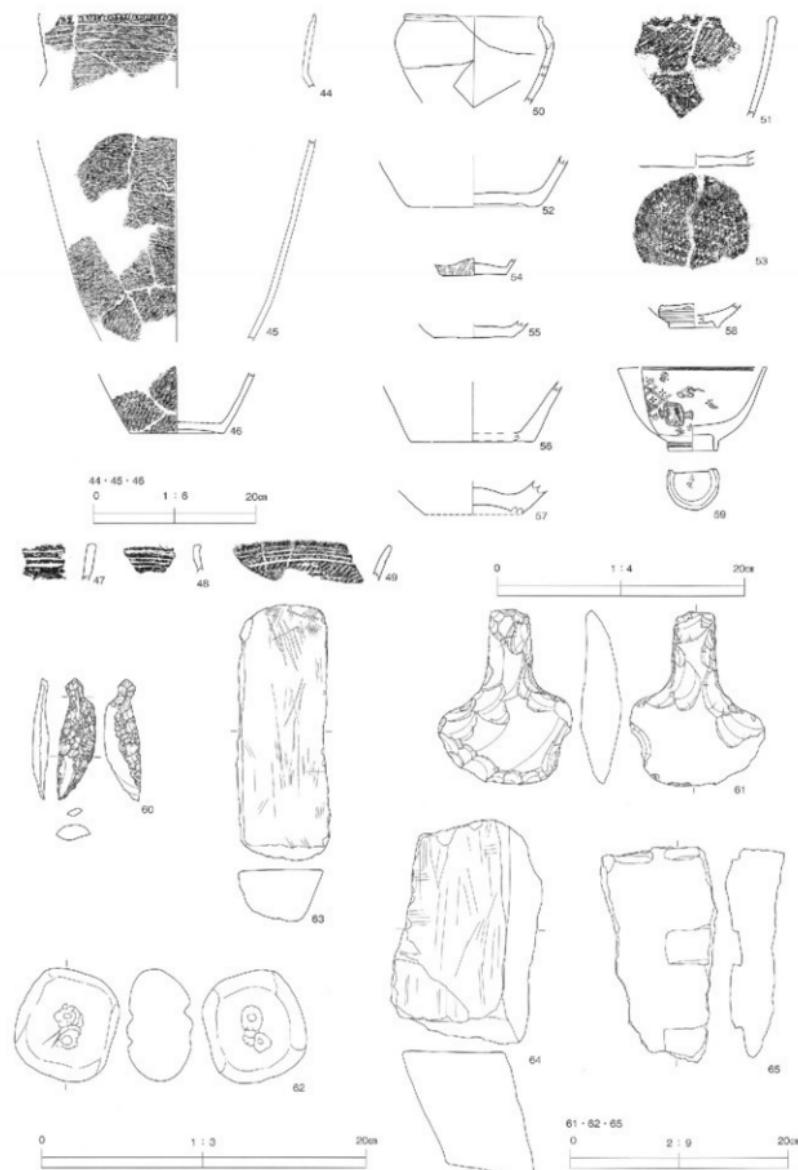


第6図 SK01~05



第7図 出土遺物（1）

(2) 落合2区I遺跡



第8図 出土遺物 (2)

第1表 遺物観察表

N.O.	種別	岩種	部位	出土遺物・位置	時期	調査	特徴	備考
1	縞文土器	深鉢	口縁	SK01・上 縦	後期 中	沈羅区の磨消縞文 露母		
2	縞文土器	鉢	側部	SK01・上 縦	後期 末	沈羅、密付(列縞) 露母		
3	縞文土器	浅鉢	口縁～底部	SK01・上 縦	晚期 中	磨消縞文 露形文		
4	縞文土器	浅鉢	口縁	SK01・上 縦	晚期 中	磨消縞文 露形文		
5	縞文土器	浅鉢	口縁	SK01・上 縦	晚期 中	磨消縞文 露形文		
6	縞文土器	浅鉢	底部	SK01・上 縦	晚期 中	磨消縞文 露形文 平行沈羅		
7	縞文土器	鉢	口縁	SK01・上 縦	晚期 中	口縁欠起 羊角状文		
8	縞文土器	鉢	口縁	SK01・上 縦	晚期 中	口縁欠起 口唇状文		
9	縞文土器	鉢	口縁	SK01・上～下縦	晚期 中	口縁欠起 半周状文		
10	縞文土器	深鉢	口縁～底部	SK01・上～下縦	晚期 中	口縁欠起 半周状文 下位沈羅 I		
11	縞文土器	台付鉢	口縁～底部	SK01・上 縦	晚期 中	口縁欠起 半周状文 台部剥離(遺構外接合)		
12	縞文土器	注口?	体部	SK01・上 縦	晚期 中	半周状文		
13	縞文土器	鉢	体部	SK01・上 縦	晚期 中	平行沈羅		
14	縞文土器	鉢	体部	SK01・上 縦	晚期 末	平行沈羅 形文工字		
15	縞文土器	鉢	口縁	SK01・上 縦	晚期 中	平行沈羅 刺突列		
16	縞文土器	鉢	底部	SK01・上 縒	晚期 末	平行沈羅		
17	縞文土器	深鉢	口縁～体部	SK01・上 縒	晚期	粗製 口縁突起 刺突列		
18	縞文土器	深鉢	口縁	SK01・上 縒	晚期	粗製 LR 繩文		
19	縞文土器	鉢	体部	SK01・上 縒	晚期	粗製 LR 繩文		
20	縞文土器	深鉢	底部	SK01・上 縒	晚期	粗製		
21	縞文土器	深鉢	口縁～体部	SK02・下 縒	晚期	粗製 RL 繩文(縞)		
22	縞文土器	深鉢	底部	SK01・上～下縒	晚期	粗製 LR 繩文		
23	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期 末	平行沈羅 L字文		
24	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期 末	平行沈羅		
25	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
26	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
27	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
28	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
29	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
30	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
31	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
32	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
33	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
34	縞文土器	鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
35	縞文土器	白付鉢	底部	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
36	縞文土器	白付鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期	粗製 RL 繩文		
37	縞文土器	鉢	中 東	試掘土	晚期 中	台部剥離突列		
38	縞文土器	鉢	中 東	檢出面	晚期 家	平行沈羅 L字文		
39	縞文土器	鉢	中 北	檢出面	晚期 家	平行沈羅		
40	縞文土器	鉢	中 北	檢出面	晚期 家	平行沈羅 L字文		
41	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期 ?	口縁突起		
42	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期 家	波狀口縫 無文		
43	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期 家	波狀口縫 無文		
44	縞文土器	深鉢	口縁	SK02・堆 土	晚期 家	口縫突起 平行沈羅(多発)		
45	縞文土器	深鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 家	LR 繩文 44・46と同 一侧		
46	縞文土器	深鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 家	LR 繩文		
47	縞文土器	鉢	口縫	SK02・堆 土	晚期 ?	平行沈羅		
48	縞文土器	鉢	口縫	SK02・堆 土	晚期 ?	平行沈羅 沈羅内面かな刺突列		
49	縞文土器	鉢	中 東	試掘土	晚期 ?	繩文 平行沈羅 刺突		
50	縞文土器	深鉢	口縫～体部	SK02・堆 土	晚期 ?	無文 「口縫に縦やかな凹れ」		
51	縞文土器	深鉢	口縫	SK02・堆 土	晚期 ?	繩文 LR 繩文 口縫突起		
52	縞文土器	深鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文		
53	縞文土器	深鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文 刺突列		
54	縞文土器	深鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文		
55	縞文土器	深鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文		
56	縞文土器	深鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文		
57	痕 悪	鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文		
58	痕 悪	鉢	底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文		
59	痕 悪	鉢	口縫～底部	SK02・堆 土	晚期 ?	無土口縫 繩文		
60	石 砕	石砕	中 央	檢出面	19C ~	台鏡 (花巻)		
61	石 砕	石砕	西 北	調査区	北西	圓文 長7.5cm、幅23cm、厚10cm 灰岩		
62	石 砕	石砕	西 北	調査区	北西	圓文 長16.1cm、幅12.8cm、厚3.6cm 凝灰岩		
63	砾 石	長形	中 央	南	圓文 長10.4cm、幅9.6cm、厚6.1cm 凝灰岩			
64	砾 石	方形	中 央	北	圓文 長15.8cm、幅5.7cm、厚3.2cm 凝灰岩			
65	石 切 斧	鋸痕	石	石	17C ~	石切場 サンプル 花崗岩		

(2) 落合2区I遺跡

いくつか存在する。文献史料によると、「御城築直し御繩張は彦九郎政直公御代より北松齋勤中のよし。但切石等は五大堂小山田辺より取候よし、・・・(以下省略)」とされている。この史料は『郷村古実見聞記』であるが、同様の記述は安政七年(1860)に書かれた『花巻古事記』や18世紀末頃に書かれた『石鳥谷町邦内郷村志』でもみられる。このことから、北上川東岸に位置する花巻市東和町小山田地区や花巻市五大堂地区より花巻城の石垣に用いられた石材がもたらされたことがわかる。この事實を考えると、川船によって花巻城まで石材が運ばれたことが想像できる。この近世初頭におこなわれた花巻城修築以降の改修等は不明であるが、その後も石垣を改修している可能性も考えられよう。今回調査した落合地区も同様の花崗岩が点在する土地であるため、南部氏指揮下この遺跡で花巻城の石垣に用いるための石切作業がおこなわれた可能性も考えられる。また、遺跡は猿ヶ石川に近く、船で石材を運ぶことも容易であると推測される。花巻城の石垣普請に関する考古学的な資料が少ないため、今回の調査でこのような石切場の一つが想定されることは大変有意義な成果であると考えられる。

なお、落合2区I遺跡の平成21年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

<引用・参考文献>

花巻市『花巻市史』第二巻

花巻市教育委員会 1997 『花巻城跡－平成4年度・5年度発掘調査報告書』



調査前現況

写真図版1 調査前現況



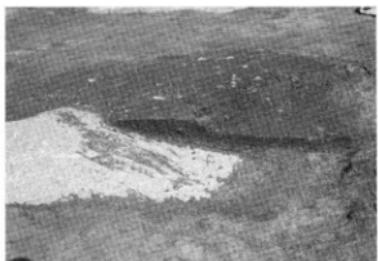
調査区全景



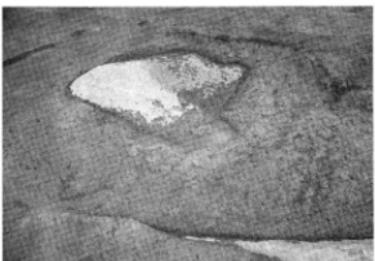
基本層序断面

写真図版2 調査区全景、基本層序断面

(2) 落合2区 I 遺跡



SK01断面



SK01完掘



SK02断面



SK02完掘



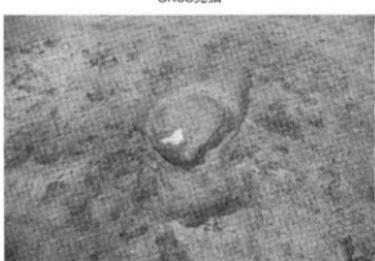
SK03断面



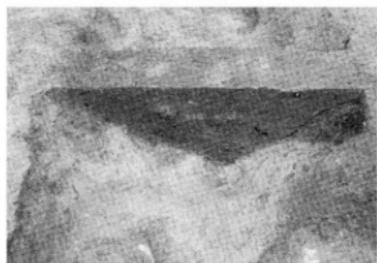
SK03完掘



SK04断面



SK04完掘



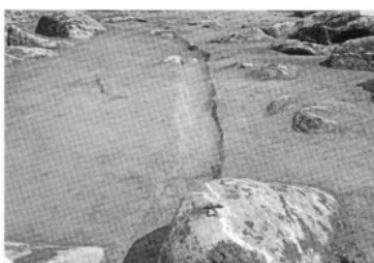
SK05断面



SK05完掘



SD01断面



SD01完掘



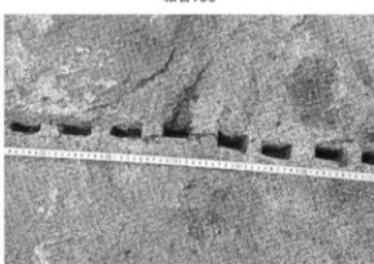
転石80



転石199

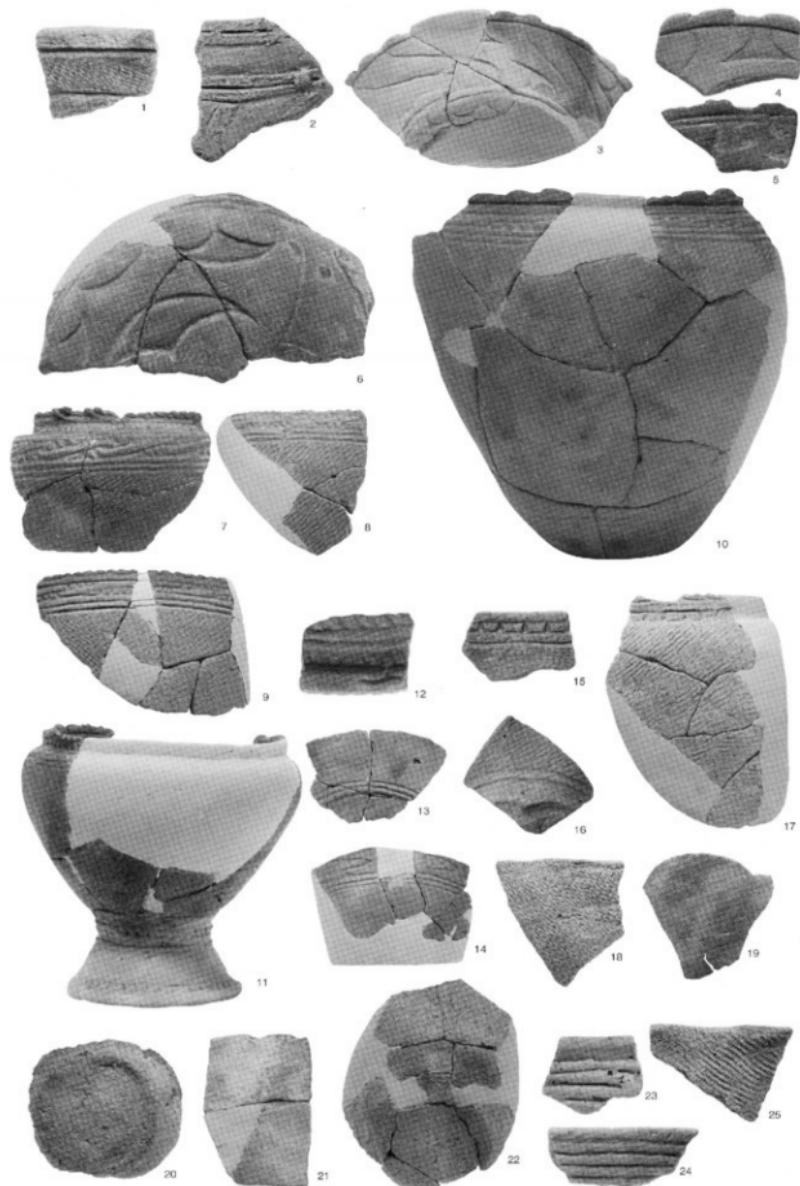


転石162

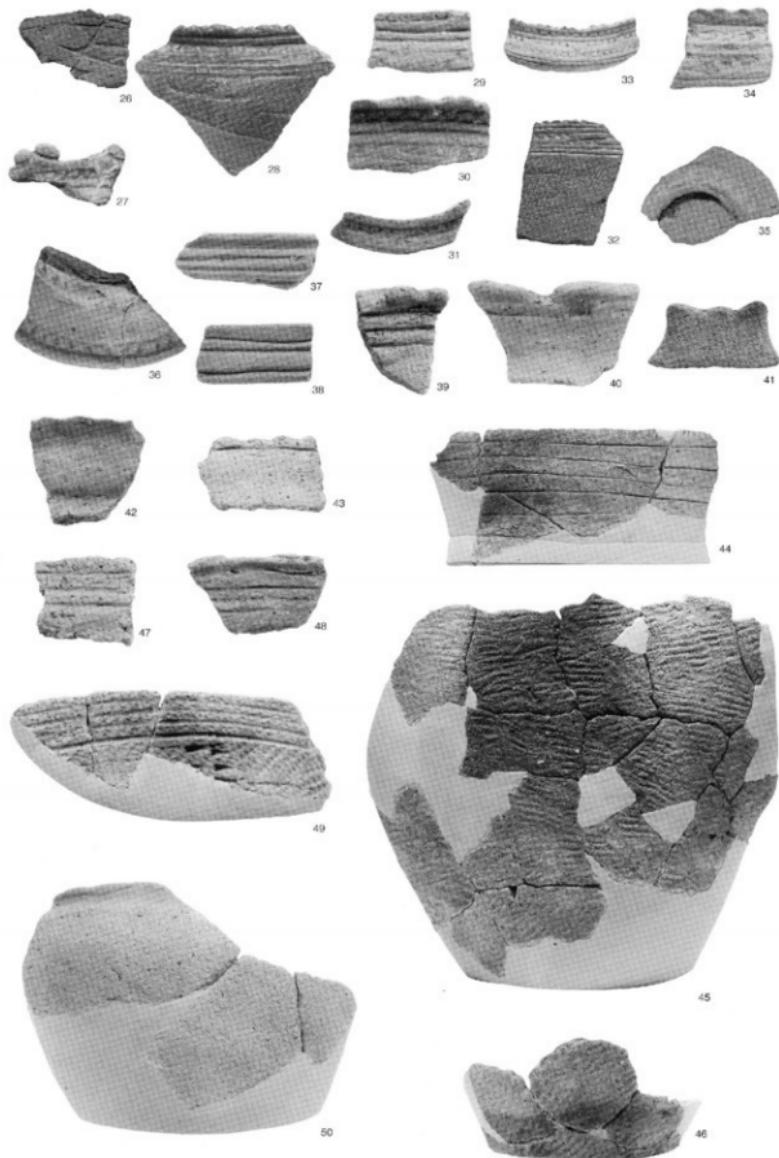


転石199 (拡大)

写真図版4 SK05、SD01、転石80・162・199

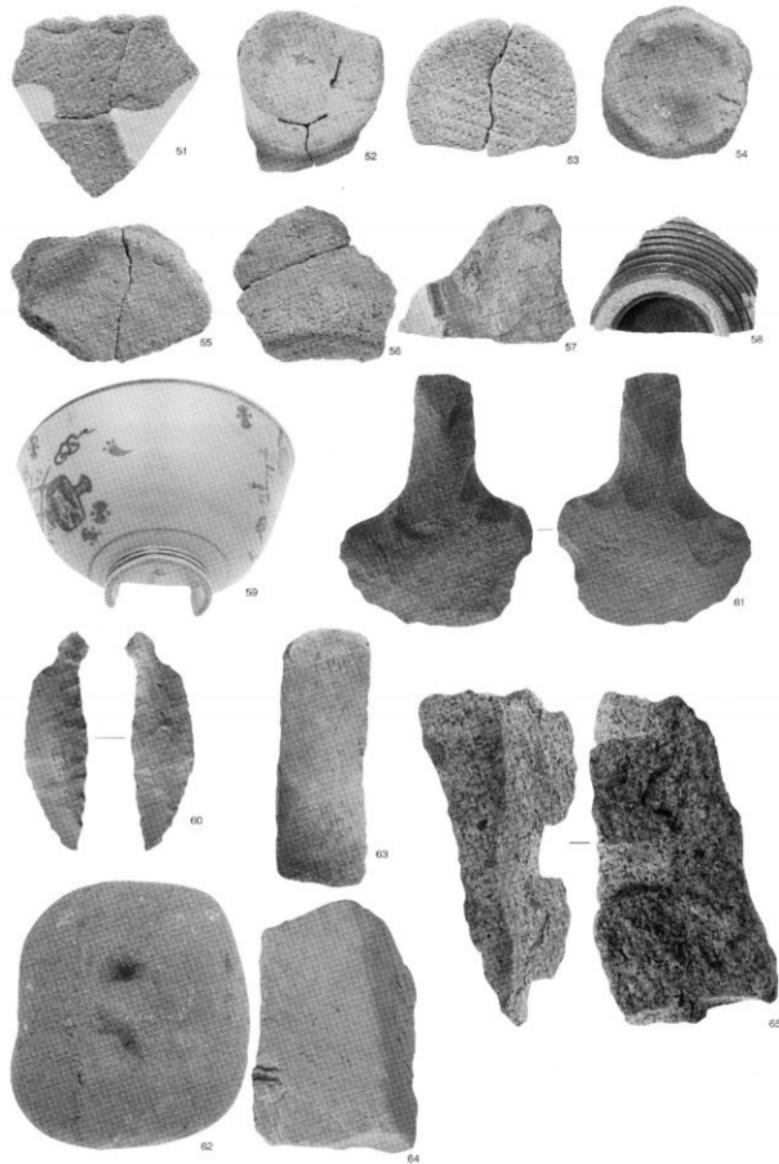


写真図版5 出土遺物 (1)



写真図版 6 出土遺物 (2)

(2) 落合 2 区 I 遗迹



写真図版 7 出土遺物 (3)

(3) 立花館遺跡

所 在 地	北上市立花第5地割108-4ほか	遺跡コード・略号	ME66-1263・TBD-09
委 託 者	国土交通省東北整備局岩手河川国道事務所	調査対象面積	1,250m ²
事 業 名	北上川中流部治水対策事業（立花地区）	調査終了面積	1,250m ²
発掘調査期間	平成21年9月1日～9月30日	調査担当者	北村忠昭・米田 寛

1 発掘調査に至る経過

立花館遺跡は、「北上川中流部治水対策事業（立花地区）」の築堤盛土工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

北上川は、岩手県岩手郡岩手町御堂にその源を発し、幾多の大小支川を合わせて岩手県を南に縱断し、岩手・宮城県境の狭窄部を経て、宮城県石巻市で太平洋に注ぐ、幹線流路延長249kmの一級河川である。事業対象地域である「立花地区」は、北上川上流左岸76km付近に位置し、平成14年7月洪水及び平成19年9月洪水により、僅か5年間で2度も甚大な浸水被害が発生している。背後地には住家等の資産が集中していることから早期の治水対策が必要となっているため、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手河川国道事務所から平成21年4月13日付国東整岩工一3号「北上川中流部治水対策事業（立花地区）に係る埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成21年5月7日に試掘調査を実施し、工事に着手するには立花館遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成21年5月11日付教生第258号「北上川中流部治水対策事業予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当事務所へ回答してきた。

その結果を踏まえて当事務所は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成21年8月31日付けで財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）



第1図 遺跡位置図



第2図 調査区位置図

2 遺跡の位置と立地

北上川東岸の氾濫平野上に位置する（第1図）。本遺跡周辺では、北に館IV遺跡、南に立花南遺跡などで、古代集落跡が確認されている。現況は市営ラグビー場、桜並木となっていたが、ラグビー場整備以前は、雑木林と畠地が広がっていた。その状況は1948年撮影の米軍空中写真でも確認できる（国土交通省 地理院ホームページ <http://archive.gsi.go.jp/airphoto/> 「国土変遷アーカイブス 空中写真閲覧」を参照）。なお、本地域は、北上川との比高差が少なく、北上川の洪水被害をたびたび受ける。

3 基本層序

堆積層を8層（I～Ⅶ層）に大別し、さらに一部の堆積層については細分した。調査区全体にI～Ⅲ層の堆積が認められる。斜面地ではⅢ層の下にⅣ層が見られ、Ⅳ～Ⅵ層が確認できなかった。I層は盛土、II層は耕作土で、調査区北側では薄く、もしくは見られない。Ⅲ層は耕作の痕跡が見られる。Ⅲa～Ⅲd層まで細分できたが、堆積の時期については判明していない。Ⅲ層はラグビー場造成前の表土層で、遺物を包含する。主に調査区の南側で細分可能な堆積状況であった。Ⅳ層は洪水砂層、V層は暗褐色粘土層で、遺物を包含しない。Ⅵ層は5～10cmの大の砾を主体とする砾層である。

VII層は黄褐色砂層と暗褐色粘土層の互層を一括した。VI層は疊層である。IV層～VII層は北上川に向かって、緩やかに傾斜して堆積している。

- I 層 暗褐色土（盛土）
- II a 層 にぶい黄褐色砂層（耕作土）
- II b 層 褐色砂層（耕作土）
- III 層 暗褐色土層（遺物包含層）
a～d層に細分可能である。
- IV 層 にぶい黄褐色砂層
- V 層 暗褐色粘土層
- VI 層 暗褐色砂疊層
- VII 層 にぶい黄褐色砂と暗褐色～褐色粘土の互層を一括
- VIII 層 暗褐色砂疊層

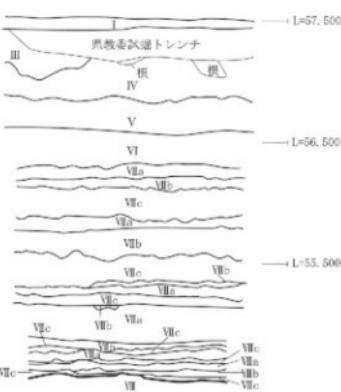
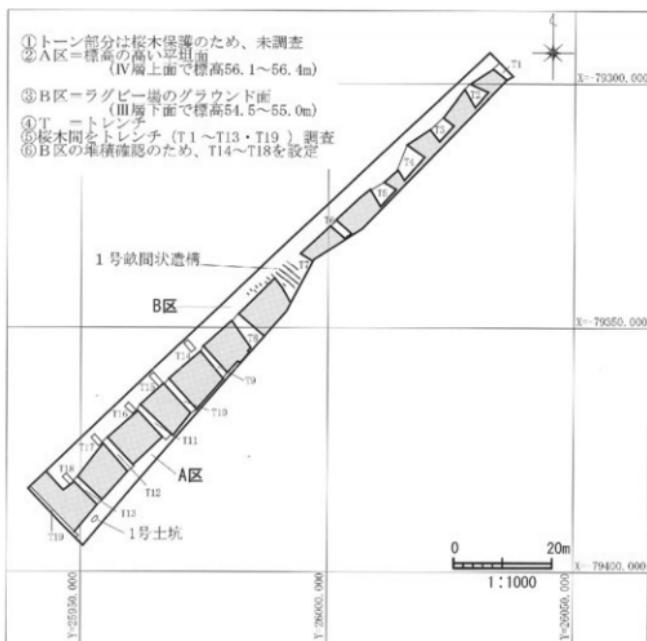


表3段に分け測量し今成
各試面は、V層とVII層の境界とVII層内

第3図 基本層序



第4図 遺構配図

(3) 立花館遺跡

4 調査の概要

岩手県中世城館跡分布調査報告書（岩手県教育委員会1986）によれば、立花館は「範開、遺構不明」とある。今回の調査では、中世に関わる遺構・遺物を確認できなかった。

(1) 遺構

1号土坑

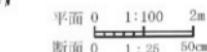
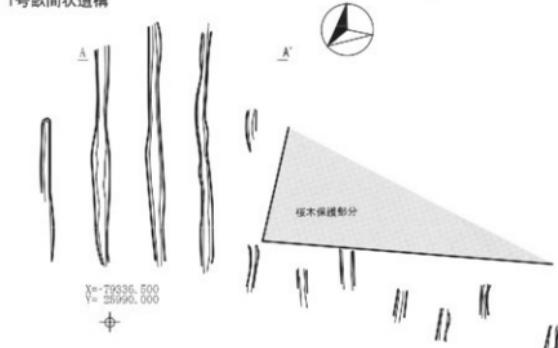
調査区平坦面のIV層上面で検出した。楕円形プランである。平面規模 $1.60 \times 0.76m$ 、深さ15cmを測る。底面標高56.150m、底面面積 $0.645m^2$ である。長軸はN-46度-E。堆積土は単層で、III層に由来する。堆積土下部から、弥生時代前期の特徴を有する土偶と、蛤刃状磨製石斧が出土している。本遺構は弥生時代前期の所産と考えられる。本遺構を墓壙と捉えるならば、これらは副葬品と捉えることが可能である。一方、たまたま墓地に土偶と磨製石斧が流入したと解釈することも可能であり、積極的に墓壙と解釈するには根拠不足かもしれない。

なお、土偶は両腕、左乳房、両足先が欠損しており、磨製石斧は刃部に摩耗やエッジダメージが見られ、使用されたものであると考えられる。

1号畝間状遺構

時期不明の遺構である。III層の堆積年代によって時期決定の判断が左右されるが、今回の調査では、決定できなかった。調査区東側に広がる畝地の延長線上にあることから、近現代の所産の可能性も当然考えられる。この場合、III層内の遺物は客土や流れ込みによるものと判断される。III層をIIIa～IIId層に細分したが、畝間状遺構はIIIb層～

1号畝間状遺構



第5図 検出遺構

Ⅲc層内で検出している。調査区内での面積約32m²、芯芯間距離90~112cm、深さ4~8cmである。やや広めの芯芯間距離であり、根菜類の栽培が考えられる。現代では大根・ニンジン畑が候補である。

(2) 遺物

縄文土器・弥生土器（中コンテナ1.5箱）、弥生時代の土偶2点、土師器・須恵器（中コンテナ0.5箱）、石鏃5点、尖頭器1点、石錐1点、刷片・碎片（小コンテナ0.5箱）、打製石斧1点、磨製石斧1点、スタンプ形石器1点などの砾石器、鉄滓1点、銅錢1点が出土した。主にⅢ層内から出土している。ほとんどの土器が磨耗しており、細片であった。廃棄場の様相を示す遺物出土状況であるが、廃棄時の位置を保持しているとは考えがたく、少なくともⅢ層上部の遺物は、耕作やラグビー場造成により流入出が繰り返されたと考えられる。

縄文土器は晩期末の粗製土器、弥生土器は前期の多重沈線で区画された鉢類が主体である。1号土坑出土の弥生時代の土偶（10）は、一見すると四足動物と見紛うが、動物形土製品のような丸みではなく、頭頂部が扁平で、体部も板状であることから土偶と考えられる。類似形態の土偶は、二戸市火行塚遺跡や北上市金附遺跡など、弥生時代前期の遺跡にみられる。背部に「6」の字状の文様が沈線で描かれていることが特徴のひとつである。頭部、両腕、左乳房、両足先は欠損している。平坦面Ⅲ層出土の土偶（11）は、右腕部と考えられる。当該期の土偶には、腹面側に沈線文様、背面側に円形刺突文の見られるものが多数ある。土師器・須恵器（17~25）は平安時代の所産である。24の坏は底面に穿孔がある。石鏃（26~30）は有茎鏃である。在地系頁岩を使用している。尖頭器（14）は頁岩製で、押圧剥離によって両面を調整加工している。両端部のうち、丁寧な加工が施されるほうを先端部とし、簡易な側縫調整によって器体整形されているほうを基部と認定した。1号土坑出土の磨製石斧（13）は安山岩製で、縄文時代に隆盛する擦切技術による形態、すなわち基部断面が長方形あるいは隅丸方形の形態ではなく、基部が円形もしくは楕円形の形態を呈する。刃部の研磨は正裏両面に施されている。刃部の破損は使用痕跡と考えられる。スタンプ形石器（16）は、安山岩製で、長方形に近い素材を分割し、分割面を打面として調整を施す。

5 まとめ

今回の調査は、立花館遺跡の西側縁辺部分が対象となった。Ⅲ層から土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器などが出土しているが、Ⅲ層の明確な堆積年代を把握するまでには至らなかった。調査区南部の平坦面（A1区）で遺物が比較的多く回収できた。ここではビニール製品を伴う現代の建物跡と、弥生時代の土坑を検出した。斜面地ではⅢ層内に畠の痕跡と考えられる畝間状遺構を確認した。畝間状遺構の時期を決定する明確な根拠はない。今回の調査では、縄文~古代の集落の西端にある廃棄領域の存在を明らかにした。したがって集落の主体は、その東側に広がっていると考えられる。

なお、立花館遺跡2009年度調査に因る報告はこれをもってすべてとする。

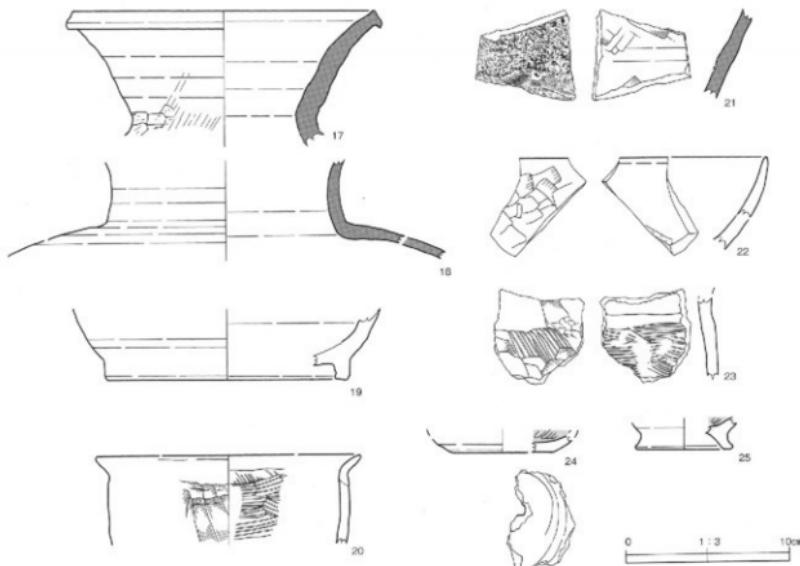
<引用・参考文献>

- 岩手県教育委員会 1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1981『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 -上田面遺跡 大沢遺跡火行塚遺跡-』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第23集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第482集

(3) 立花館遺跡



第6図 出土遺物 (1)



第7図 出土遺物(2)

第1表 遺物観察表

No.	種別	器種・形態	位置・層位	調査・特徴・備考
1	土器	浅鉢・口縁	AIKT13付近・Ⅱ層	沈粂、突起、穿孔、内外面ミガキ、口径15.3cm
2	土器	浅鉢?・口縁	AIKT12・13回・Ⅱ層	多量沈粂、口唇突出部、
3	土器	体盤・口縁	AIKT11・12回・Ⅱ層	多量沈粂、浅次口縁、内外面ミガキ
4	土器	体盤・口縁	AIKT11・12回・Ⅱ層	多量沈粂
5	土器	浅鉢?・口縁	AIKT13付近・Ⅱ層	多量沈粂
6	土器	浅鉢?・斜脚	AIKT11・12回・Ⅱ層	多量沈粂、半片状突起、溝文1.8mm、底面
7	土器	深鉢?・口縁	AIKT13付近・Ⅱ層	口縁ヨコナギ、底面丸新、擦滑
8	土器	浅鉢・底部	AIKT11・12回・Ⅱ層	多量沈粂、溝文1.8mm、擦痕、底径6cm
9	土器	浅鉢・底部	AIKT11・12回・Ⅱ層	多量沈粂、底径8cm
10	土製品	土匁・全体	1号土匁・堆積土	圓底、凹側・左丸突・四足欠損、沈粂、貧乏、背筋に6の字状沈粂、長5.2cm、幅2.9cm、厚2.2cm、重さ25.9g
11	土製品	土匁・右腕	AIKT12・13回・Ⅱ層	沈粂、割欠、底18cm、幅4.8cm、厚1.7cm、重量24.1g
12	石器	石斧	T13・Ⅱ層	長46.0cm、幅3.5cm、厚1.6cm、重さ73g、メノウ製
13	石器	磨削石斧	1号土匁・堆積土	長89.9cm、幅4.9cm、厚3.3cm、重さ241g、安山岩製
14	石器	尖端斧	T18・Ⅱ層	長5.9cm、幅2.6cm、厚0.7cm、重さ135g、質的製
15	石器	打削石斧	T13・Ⅱ層	長11.08cm、幅4.6cm、厚0.26cm、重さ90.2g、質的製
16	石器	スランプ形石器	T12・Ⅱ層	長7.6cm、幅4.0cm、厚3.9cm、重さ367.1g、安山岩製
17	假想器	セラミック・口縁	AIKT14・Ⅰ層	ロクロナゲ、無脚ケズリ、口径18.3cm
18	假想器	セラミック・腹部	AIKT11・12回・Ⅱ層	ロクロナゲ
19	土器	体盤・底部	AIKT13・15回・堆積	ロクロナゲ、底径16cm
20	土器	甕・口縁・腹部	AIKT13付近・Ⅱ層	ロ線彫ヨコナギ、外腹ナダ、内腹ハケメ、口径16.0cm
21	假想器	セラミック・斜脚	T11・Ⅱ層	外腹タキキメ、自然縫、内腹ロクロナゲ、ナダ
22	土器	碗・口縁	AIKT11・12回・Ⅱ層	外腹ナダ
23	土器	甕・腹部	AIKT12・13回・Ⅱ層	ロ線彫ヨコナゲ、外腹ナダ、内腹ハケメ
24	土器	甕・底部	T12・Ⅱ層	ロクロナゲ、内腹墨色底塗、内腹ミガキ、底径6cm
25	土器	碗・底盤	T10・Ⅱ層	ロクロナゲ、内腹墨色底塗、内腹ミガキ、底径6cm
26	石器	石鋸	A区・Ⅱ層	有刃鋸、長3.9cm、幅1.7cm、厚1.2cm、重さ55g、質的製
27	石器	石鋸	A区・Ⅱ層	有刃鋸、長2.3cm、幅1.2cm、厚0.5cm、重さ1.1g、質的製
28	石器	石鋸	T13・Ⅱ層	有刃鋸、長2.07cm、幅1.05cm、厚0.3cm、重さ0.7g、質的製
29	石器	石鋸	AIKT13付近・Ⅱ層	有刃鋸、長2.6cm、幅1.02cm、厚0.4cm、重さ1.0g、質的製
30	石器	石鋸	T19・Ⅱ層	有刃鋸、長1.65cm、幅0.73cm、厚0.3cm、重さ0.9g、質的製

(3) 立花館遺跡



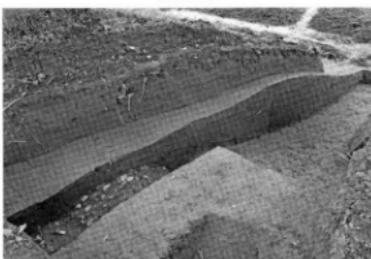
調査前現況



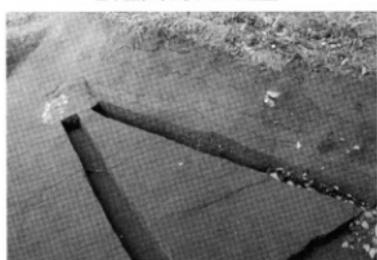
調査風景



基本層序（4号トレンチ東壁）



8号トレンチ南壁断面



7号トレンチ東壁断面



1号款簡状造構断面



1号款簡状造構検出状況（7号トレンチ内）



1号款簡状造構近景（7号トレンチ内）

写真図版1 調査区、検出遺構（1）



平坦面完掘状況（南から）



1号土坑断面（南から）



1号土坑遺物出土状況（北から）



1号土坑全景（北から）



13号トレンチ北壁断面（西から）



13号トレンチ北壁断面東端部（南から）

写真図版2 検出遺構（2）



写真図版3 出土遺物（1）

(3) 立花館遺跡



写真図版4 出土遺物（2）

(4) 平根原 I 遺跡

所 在 地	奥州市胆沢区若柳字平根原5-1ほか	遺跡コード・略号	NE31-1090・HNH I -09
委 託 者	国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所	調査対象面積	12,000m ²
事 業 名	胆沢ダム建設事業	調査終了面積	12,000m ²
発掘調査期間	平成21年9月1日～9月30日	調査担当者	濱田 宏・佐々木智久

1 調査に至る経過

平根原 I 遺跡は、「胆沢ダム建設事業」に伴い、その事業区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

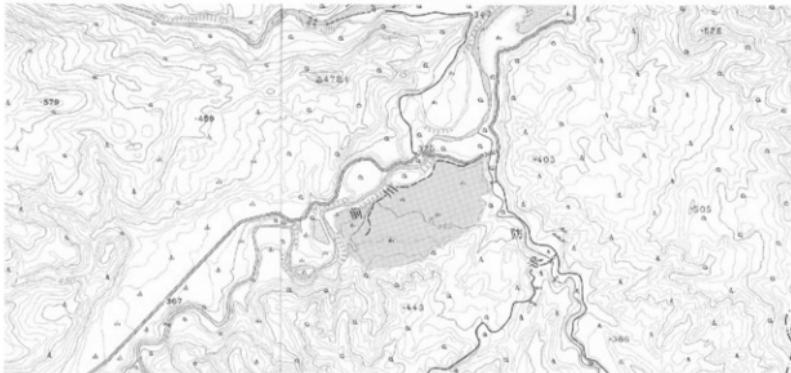
胆沢ダムは、北上川右支川胆沢川に建設中の堤体高132m、堤頂高723m、総貯水容量1億4,300万m³の中央コア型ロックフィルダムであり、その目的に洪水調節・河川環境保全等のための流水確保・かんがい用水・水道用水・水力発電を有する多目的ダムである。

胆沢ダム建設事業は、平成2年5月11日に「胆沢ダムの建設に関する基本計画」が官報告示されて建設着手し、その後平成12年6月14日に基本計画変更が官報告示され、事業費及び工期改定を行い現在に至っている（当初工期：平成11年度→変更工期：平成25年度）。

埋蔵文化財の取り扱いについては、事業に先立ち昭和58年10月に建設省（現国土交通省）新石淵ダム調査事務所（昭和63年4月に胆沢ダム工事事務所に組織改正）から、ダム事業区域内における埋蔵文化財の有無を岩手県教育委員会に照会し、周知地区864,000m²、可能性有地区490,000m²を確認した。その後は、水没面積4,400,000m²を含む事業区域内における埋蔵文化財の包蔵地について、毎年度、各工事の実施に先立って岩手県教育委員会との協議を行なながら、計画的に調査を実施してきているところである。

胆沢ダム建設事業に関する平根原 I 遺跡の埋蔵文化財調査は、ダムの湛水により影響を受ける常時満水位以下の区域（約46,000m²）を実施することとし、平成20年5月21日付け国東整胆調設第14-2号により、胆沢ダム工事事務所長から岩手県教育委員会に試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会が平成20年9月2日～5日の4日間にわたり試掘調査を実施した結果、調査区域東側に位置する A 地区（常時満水位以下）では、埋蔵文化財は確認されなかつたが、同じく常時満水位以下の C 地区（調査区域西側）では、引き続き調査が必要な状況であった。



第1図 遺跡の位置

(4) 平根原Ⅰ遺跡

そのため、埋蔵文化財調査計画について、平成21年1月9日に岩手県教育委員会と協議し、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託して発掘調査を実施することになったものである。

(国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所)

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、奥州市胆沢総合支所の南南西およそ18km、石淵ダムの南西3km付近に位置し、北東方向に流れる前川によって形成された北西向きの段丘上に立地する。標高は337.0m～349.0mである。

本遺跡の周辺は、かつて開田されたが数年で放置され、現在ではほぼ全域が原野となっている。

3 基本土層

調査区は、高位面と低位面の大きく2つからなるが、その中間地点に設定したT6付近では、次のような土層が観察された。

I層 黒褐色の現表土（層厚5～15cm）腐植土の発達が良くない。

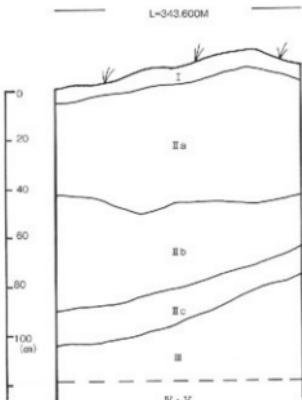
II層 黒褐色と黄褐色土の混合土（層厚20～60cm）開田時に凹部に入れられた盛土か。本層下の凹部には、泥炭層や灰色の粘土層がみられる箇所がある。

III層 黄褐色土（層厚10cm以上）地山。層厚不明。

IV層 にぶい黄褐色砂層（層厚20～40cm）

V層 明黄褐色砂礫層（層厚20cm以上）

なお、高位面では表土下に暗褐色土の漸移層を挟んで地山となる。



第2図 T6北壁 基本土層

4 調査の概要

調査では、まず全体の状況を把握するため2m幅のトレンチを26本（T1～26）設定し、重機によつて掘削後人力で遺構の検出作業を行った。あわせて遺物の有無や土層の観察も行った。T1からT19については、新設されるダムの常時満水位（標高345.6m）以下の本調査範囲に、T20からT26は、常時満水位以上の確認調査範囲に設定したものである。

トレンチの総長は950mを数え、調査面積の約15%を掘削したが、遺構・遺物は全く確認されなかつた。各トレンチの土層の観察によって、今回の調査区は比較的新しい前川の氾濫箇所が主体となることが明らかとなり、このことから全域の表土掘削は不要との判断がなされ、調査は当初予定を一ヶ月ほど繰り上げて終了した。

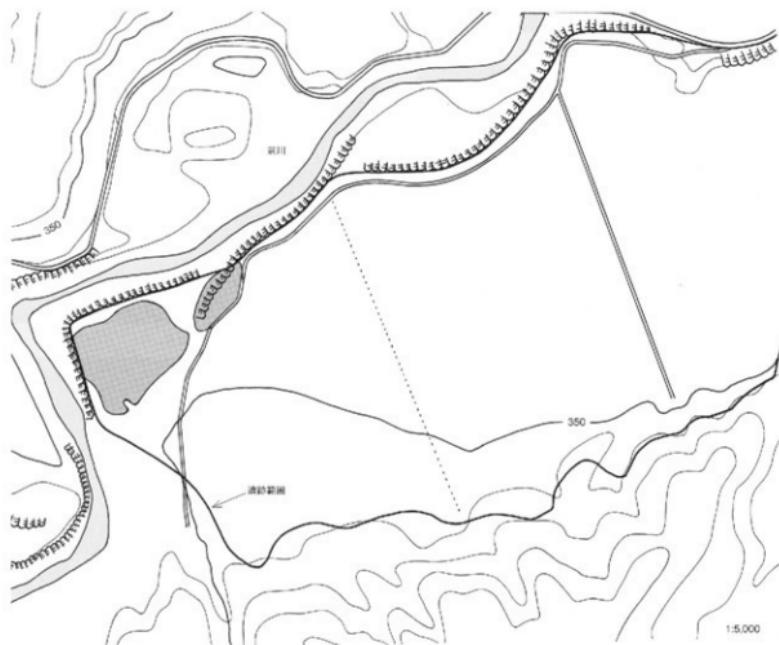
調査区高位面には、今現在でも湿地が形成されている箇所があり、この周辺は居住するには適さない土地であったと考えられる。既述のとおり、水田耕作も長くは営まれなかつたようであり、さらにさかのぼって昭和20年頃には人家が2軒ほどあったらしいが、これもまた2、3年で引き上げたとのことである。次ページの写真に見えるコンクリートの構造物は、前川の対岸に渡した吊り橋の橋脚のことであるが、その人家があった際に使われていたものであろう。

なお、平根原Ⅰ遺跡平成21年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。



第1表 トレンチ観察表

トレンチ No.	深さ(cm)	状況
T1	30~40	泥炭 1層
T2	50~200	透水土 1.5m
T3	30~180	透水 1.2m
T4	70~210	泥炭 1層
T5	20~40	玄土下無機色土質食害あり
T6	40~120	泥炭 1層、上位砂層
T7	20~100	泥炭 1層
T8	20~180	泥炭 2層、下位砂層
T9	20~120	泥炭 2層
T10	20~150	泥炭 4層
T11	20~170	泥炭 3層
T12	50~180	泥炭 3層
T13	50~200以上	透水 3層、透水ない、下位透水
T14	100~200	泥炭 3層、透水ない、下位透水
T15	70~200以上	すべて透水
T16	10~200以上	すべて透水、透水により崩落
T17	20~200以上	透水、上位岩盤
T18	10~200以上	下位透水、上位岩盤
T19	10~180	泥炭 1層、上位砂層
T20	30~40	I 玄土 II 黒褐色土 III 黄砂層 古礫土(筑山)
T21	30~40	*
T22	30~40	*
T23	30~40	*
T24	30~40	*
T25	20~50	*
T26	30~40	*



第4図 遺跡範囲と調査区

(4) 平根原 I 遺跡



調査前の状況



T 6 北壁基本層序



T 7 全景



T 9 全景



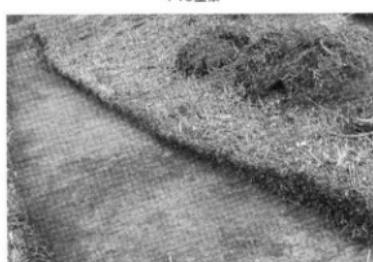
T 14 全景



T 19 全景



T 20 全景



T 25 全景

(5) 矢盛遺跡 第25次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田4地割47-1ほか 遺跡コード・略号 L E 26-0139・IYM-09-25
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調査対象面積 1.234m²
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調査終了面積 1.234m²
発掘調査期間 平成21年9月15日～9月17日 調査担当者 金子昭彦・藤原大輔

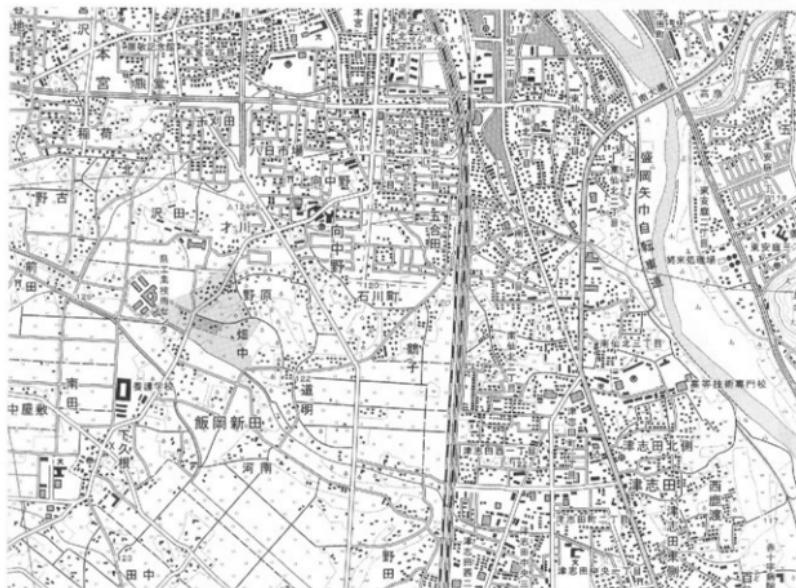
1 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることになった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることになった。

矢盛遺跡第25次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成21年度の事業として確定した。これを受け、平成21年5月1日に財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結した。

（盛岡市都市整備部盛岡南整備課）



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地 (第1図)

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、零石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

3 基本層序

0層 盛土。層厚0~120cm。I層 表土。腐食土か耕作土(水田)。層厚0~50cm。V層 10YR4/4褐色砂層。地山。層厚不明。

*この地域では、通常、II層：クロボク土、III層：漸移層、IV層：黄褐色土が認められるのだが、本調査区では全く認められなかった(II層上部が平安時代遺構の掘り込み面)。

4 調査の概要

今回の調査区は、遺跡推定範囲の南東端に相当する。第26次調査区が南側の飛び地北側に隣接し(第2図)、トレントは通して設定したが(第3図)、トレント1(T1)は第25次で報告する。

トレント3~6(第3図T3~6)の地点は、既に工事が一部進められていたため(写真図版上段)、1m前後の盛土が見られた。トレント3・4では、80cmの盛土の下に50cmほどの水田耕作土が認められ、すえた臭いが鼻につく。トレント5は、110~120cmの盛土の下は地山で、既に表土は残っていないかった。トレント6は、90cmほどの盛土下に表土である水田耕作土が10~20cm残っており、ここでもすえた臭いが鼻についた。ただし、北側は大きく擾乱され、表土は残っていないかった。

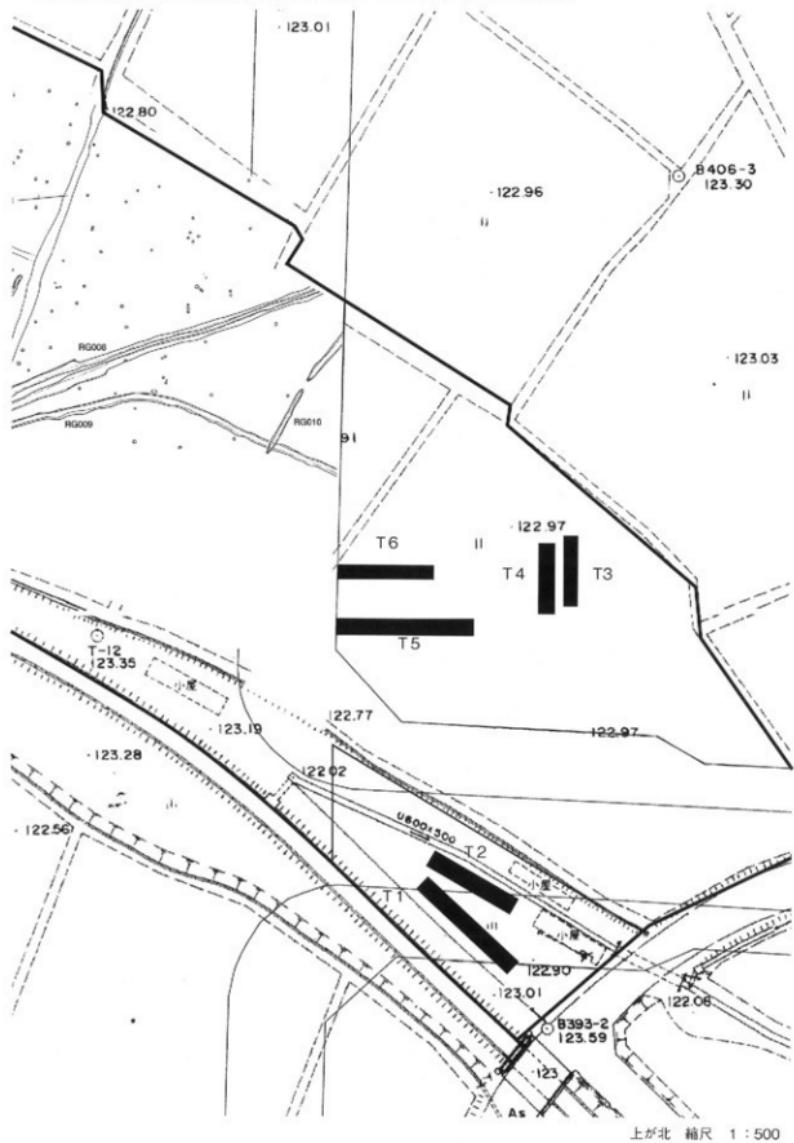
遺構、遺物は全く出土せず、今回の調査区の大部分は、既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。南側に隣接する第13次調査区(当センター報告書第534集)でも、同様の結果が得られている。西側



第2図 これまでと今回の調査範囲

に隣接する第9次調査区（同第508集）では、古代の溝跡などが検出されている（第2・3図）。

なお、矢盛遺跡第25次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



第3図 今回の調査区とその周辺



第25次・26次調査範囲全景（北から）



トレンチ3



トレンチ4



トレンチ5



トレンチ6

写真図版1 第25次調査区

や もり
 (6) 矢盛遺跡 第26次調査

所 在 地	盛岡市飯岡新田4地割49-1ほか	遺跡コード・略号	L E 26-0139・I YM-09-26
委 託 者	独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所	調査対象面積	334m ²
事 業 名	盛岡南新都市土地区画整理事業	調査終了面積	334m ²
発掘調査期間	平成21年9月15日～9月17日	調査担当者	金子昭彦・藤原大輔

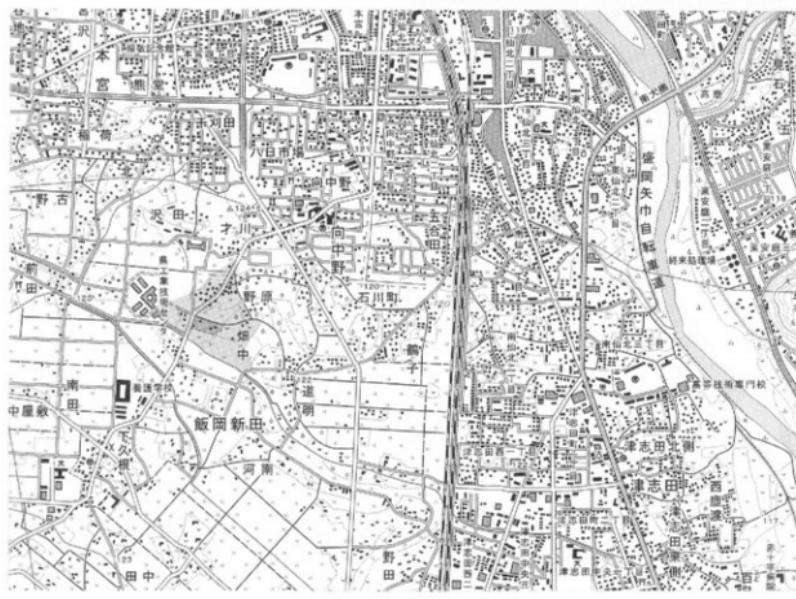
1 調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（当時）の三者が地域振興整備公団（現、独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って本調査を必要とする範囲を確定した上で、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることになった。

矢盛遺跡第26次調査は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成21年度の事業として確定した。これを受け、平成21年6月11日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と都市再生機構岩手都市開発事務所長の間で委託契約を締結した。

(独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所)



第1図 遺跡の位置

2 遺跡の位置と立地（第1図）

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西約1.8kmに位置し、零石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。標高は122m前後である。

3 基本層序

0層 盛土。層厚0~120cm。I層 表土。腐食土か耕作土（水田）。層厚0~50cm。V層 10YR4/4褐色砂層。地山。層厚不明。

*この地域では、通常、II層：クロボク上、III層：漸移層、IV層：黄褐色土が認められるのだが、本調査区では全く認められなかった（II層上部が平安時代遺構の掘り込み面）。

4 調査の概要

今回の調査区は、遺跡推定範囲の南東端に相当する（第4図）。第25次調査区飛び地が南側に隣接するが（第2図）、トレントは通して設定した（第3図）。

トレント1・2（第3図T1・2）では、表土40~50cm下に地山が認められた。表土は水田耕作土あるいはそれを動かしたもののが主だが、腐食土の部分もある（桜、柳の大木があったところ）。

遺構、遺物は全くなかった。水田造成前には残っていた可能性もなくはないが、地形と地山からその可能性は低く、今回の調査範囲は既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。北側に隣接する第13次調査区（当センター報告書第534集）でも、同様の結果が得られている（第2・3図）。

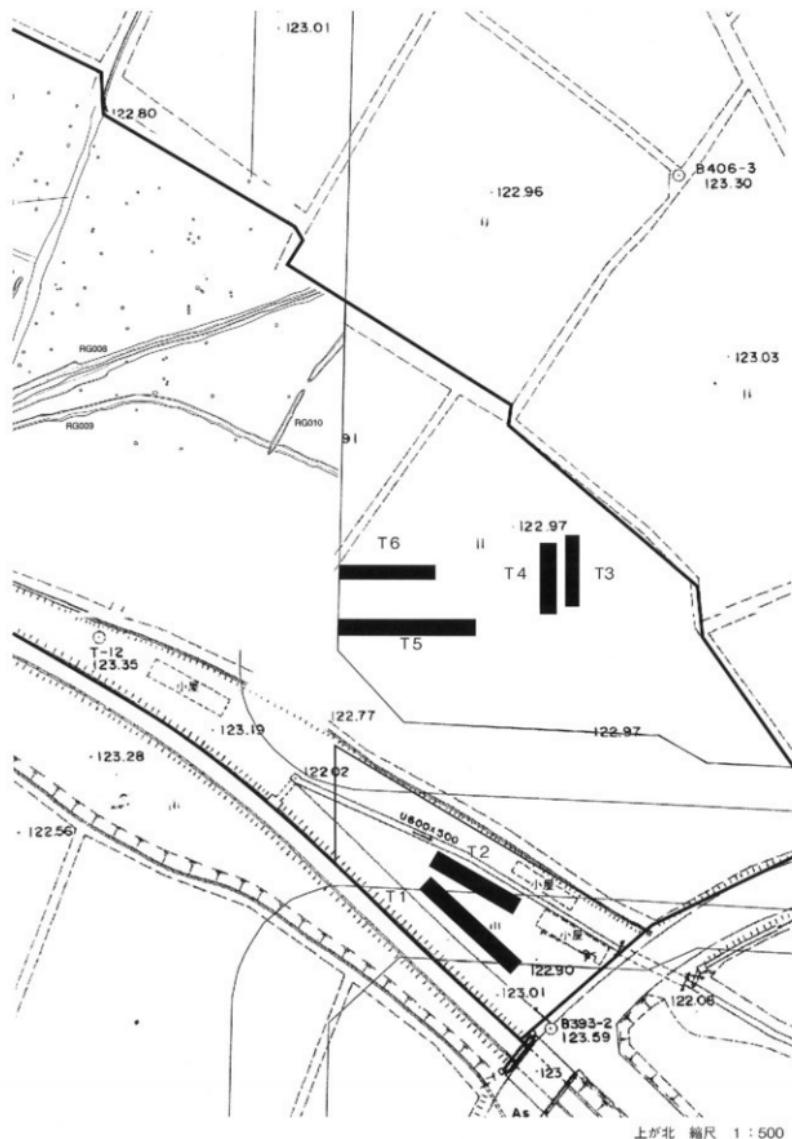
遺跡の南限は堰になっており（第4図）、この方向に沖積段丘が伸びる。段丘上西端（第4図1次調査区付近）では平安時代の集落が（当センター報告書第205・555集）、段丘下（同10~13次調査区



第2図 これまでと今回の調査範囲

以西)では中世の居館跡・集落跡が検出されている(同第534集ほか)。

なお、矢盛遺跡第26次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



第3図 今回の調査区とその周辺



第4図 遺跡推定範囲における調査区の位置（右下網部分）



調査範囲全景



右遺がトレンチ1・2



トレンチ1



トレンチ2

写真図版1 第26次調査区

おおみやきた
(7) 大宮北遺跡第15次調査

所 在 地 盛岡市本宮字小幅3-3ほか 遺跡コード・略号 L E 16-2036 · O O K - 09-15
委 託 者 岩手県盛岡地方振興局土木部 調査対象面積 2,000m²
事 業 名 主要地方道盛岡和賀線飯岡地区道路整備事業 発掘調査面積 2,000m²
発掘調査期間 平成21年6月1日～6月30日 調査担当者 小林弘卓・北田 真

1 調査に至る経過

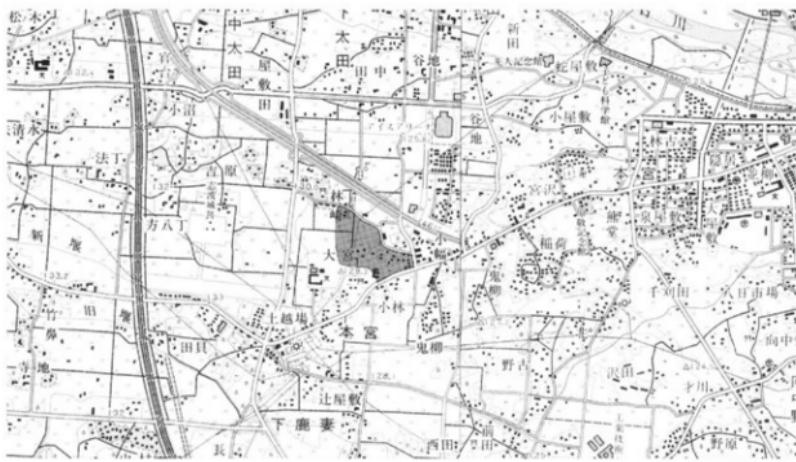
大宮北遺跡は、「主要地方道盛岡和賀線飯岡地区道路整備事業」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

主要地方道盛岡和賀線は盛岡市を起点とし、矢巾町、紫波町及び花巻市を経由し、北上市に至る延長51.49kmの幹線道路である。本事業は、現道における交通混雑の緩和と歩行者等の安全性の向上を図るとともに、幹線道路である本路線の年間を通じた機能向上を図ることを目的として整備するものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成20年8月27日付盛地土第7103号「主要地方道盛岡和賀線飯岡地区道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により岩手県教育委員会に試掘調査を依頼し、平成20年10月2日、平成20年10月3日及び平成20年11月17日に調査を実施したものである。

調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認され、平成20年11月25日付教生第1111号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により、工事に着手するには大宮北遺跡の発掘調査が必要とのことから、岩手県教育委員会と協議・調整を行い、平成21年5月25日財團法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査の実施に至ったものである。

(岩手県盛岡地方振興局土木部)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

大宮北遺跡は、JR盛岡駅から南西に約2kmの本宮字小幡地内に所在する。遺跡は零石川右岸の低位冲積段丘面に立地しており、標高は126m前後、現況は宅地及び果樹園である。

3 基本層序

基本層序はI～VI層に分層される。I層黒褐色土と褐色土の混合である表土30～50cm、II層黒色土の旧表土10～20cm、III層にぶい黄褐色土（上面が第一遺構検出面）10cm、IV層褐色土（最終遺構検出面）20～50cm、V層にぶい黄褐色砂礫50cm、VI層にぶい黄褐色砂・層厚不明である。

4 調査の概要

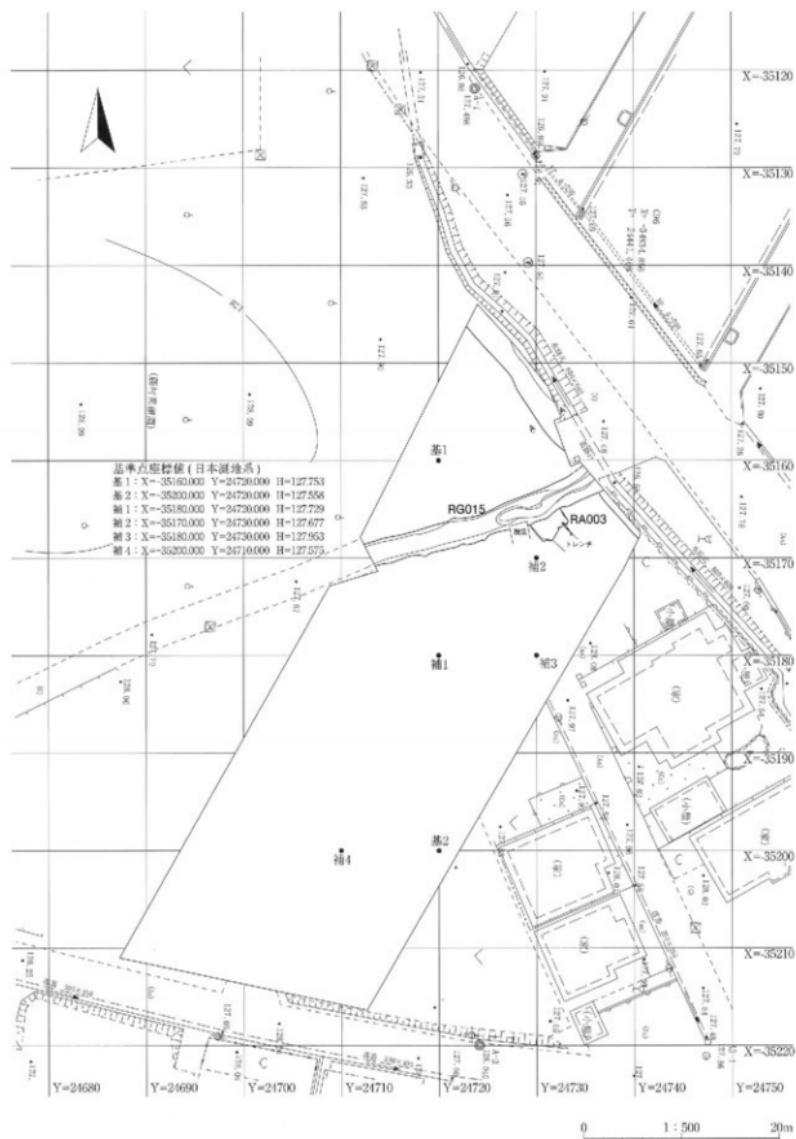
大宮北遺跡は昭和59年度から平成19年度までに14次の調査が行われており、今回は第15次調査にあたる。これまでの調査における主な成果としては、第4次調査では平安時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、第8次調査では建て替えの認められる掘立柱建物跡や土坑が検出され、10世紀に位置付けられる土器が多数出土している。第9次調査では近世から近代にかけての土坑墓が60基確認されている。また、第11次調査では今次調査とも関連する溝跡1条などが検出されている。

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居跡1棟、溝跡1条である。また、この他に調査区北端において段丘状の落ち込みが確認された。

なお、グリッドの設定についてであるが、本遺跡の調査が複数次に亘り、且つ調査機関も様々であったため、過去において各々異なる設定を行っていることから、今次はグリッドを設定せず座標値（日本測地系）のみを付記することとした。



第2図 遺跡位置図



第3図 遺構配図

(1) 遺構

RA003堅穴住居跡（第4図、写真図版1・2）

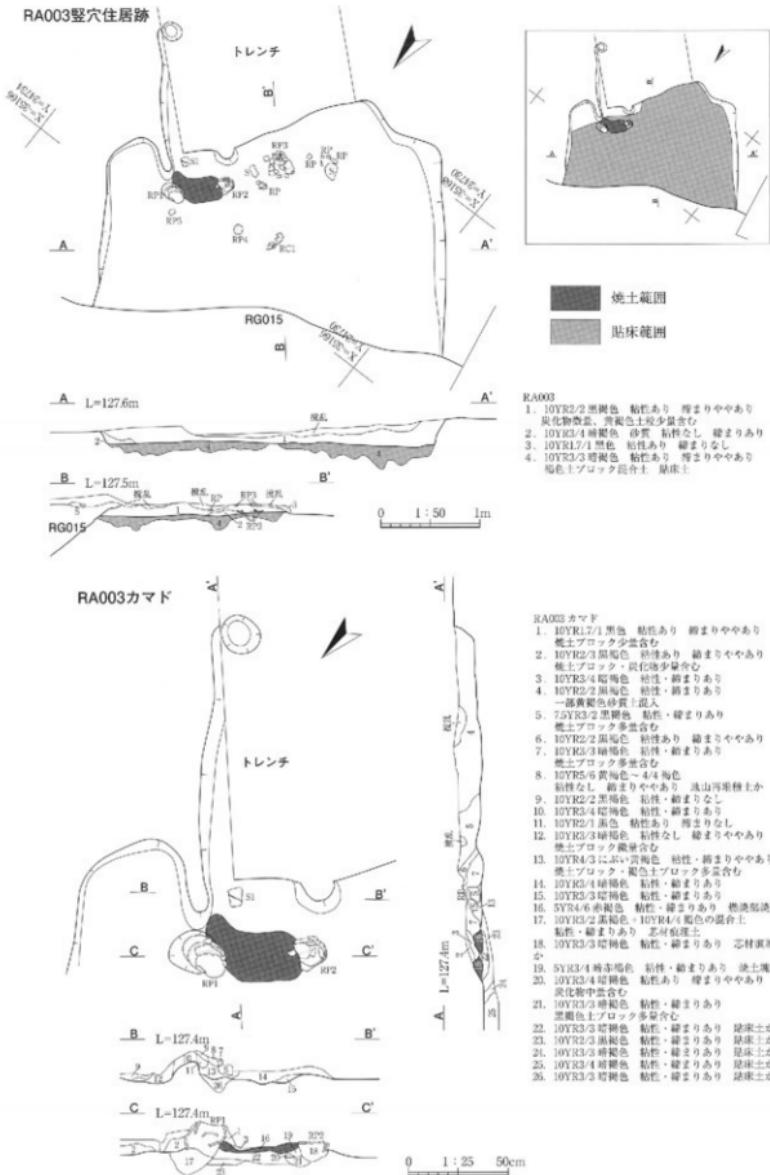
調査区北側に位置し、検出面はIV層である。現存していた宅地等によって大きく削平を受けており、埋土が10cmに満たない部分もある。前年度に行われた試掘によても南東側が若干の影響を受けている。また、RG015溝跡と重複しこれに切られるため北側は消失している。確認された平面形は南隅が不整な隅丸方形である。残存状態が悪く、断面等では確認ができなかつたため可能性の示唆に止めるが、本遺構は堅穴住居跡が2棟重複していた可能性がある。カマドが遺存する南東壁から繋がる部分が新期、これより規模がやや大きく、西側に遺存する壁が見られる部分が旧期の住居跡と思われる。出土した遺物もこの新期住居跡に伴うものであろう。西壁から推測すると、両者とも軸方向は概ね南東-北西方向にあるが、新期の方が同方向により傾いており、新期で一辺約2.9m、旧期で一辺約3.5mの規模が推察される。壁は残存する部分では直角に近い角度で立ち上がり、壁高は最大25cmを測る。埋土は3層に細分したが、主体となるのは1層黒褐色土である。床面は暗褐色土と褐色土を混合した貼床土がほぼ全面に施されているがやや軟質である。床面施設は明確なものは確認できなかつたが、カマド左側にあたる南北隅が全体よりも若干深んでおり、貯蔵穴としての機能も考えられるが判然としない。カマドは南東壁の北寄りに付設されている。上述により煙道や右袖等が消失している。袖の基部は煙からの造り出しで、これに粘土を貼り付けて構築していたものと思われる。焚口の両側には芯材として土師器の甕が用いられており、倒立状態で設置されている（RPI・2）。燃焼部焼土は赤褐色を帯び、不整な楕円形状に広がる。この南東方向からは亜円縁（SI）が出土しており、支脚として使用された可能性がある。煙道は長さ約1.2m、幅20~30cmで、概ね水平に先端へと向かう。構築方法は割り貫きか掘り込みかは残存部からは判断できない。煙出孔は大半が消失しており、下部の痕跡が3~5cm残存するのみである。遺物は土師器が小コンテナで1箱出土した。このうち掲載したのは1~8の8点である。いずれもカマド及び床面からの出土である。これらの出土遺物から、7世紀後半の遺構と考えられる。

RG015溝跡（第5図、写真図版2）

調査区北側に位置し、検出面はIII層及びIV層である。本溝跡は規模・形状・走向方位等から、盛岡市教委による平成19年度第11・13次調査で確認されたものと同一遺構と判断した。RA003堅穴住居と重複するが上述のとおりである。今回検出した規模は、長さ24.6m、幅2.5~3mである。直線状に延び、走向方位はおよそ北東東-南西西にある。底面標高は北東東に向かって低位となる。断面形は西側では箱形、東側では流水などの影響によりV字状となり、深さは最深部で90cmを測る。埋土は最大5層に細分され、黒~黒褐色土を主体とする自然堆積土と考えられる。本遺跡北側から隣接する小幅遺跡との間には北西-南東方向に走向する旧河道が存在すると考えられており、これに連結していたものと思われる。実際、本調査区内でも北端に段丘線と思われる落ち込みが確認されている（北側段丘線）。遺物は土師器が小コンテナで約0.5箱、須恵器が2点出土した。このうち掲載したのは9~15の7点である。過年度でも類似する土器が伴出しており、今回も同様に10世紀代に位置付けられると思われる。本遺構は前回分を含めると全長120mと長大な溝跡となり、北側は今回確認された自然地形と連結することから、区画機能をもっていた可能性が窺える。

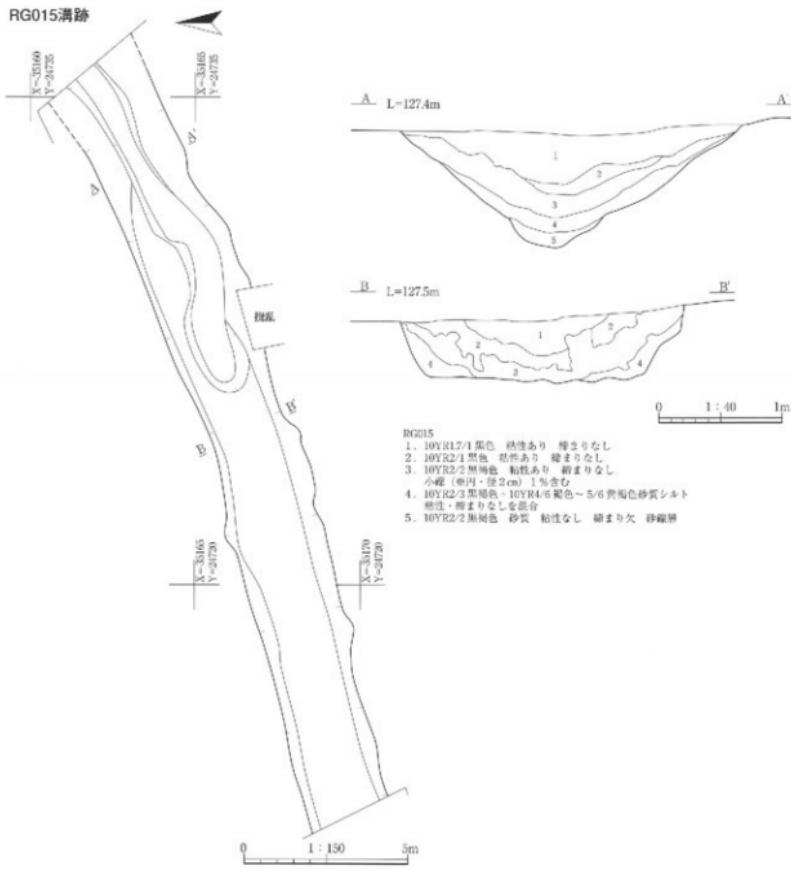
北側段丘線（第5図、写真図版3）

調査区北端に北側に向かって下がる落ち込みを確認した。調査区内では深さ1.2mを測り、東側でRG015溝跡と連結している。新旧関係は判断できなかつたが、同時存在である可能性も考えられる。遺物は小コンテナで約0.5箱出土している。掲載したのは17~21の土師器5点である。

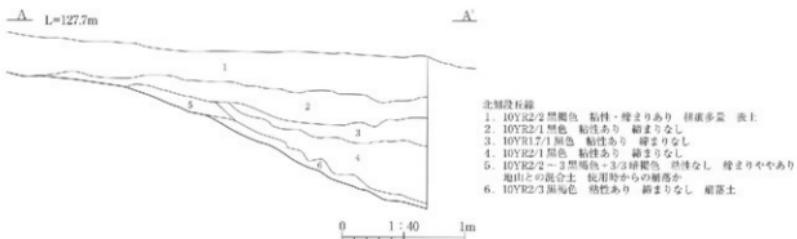


第4図 RA003 堅穴住居跡

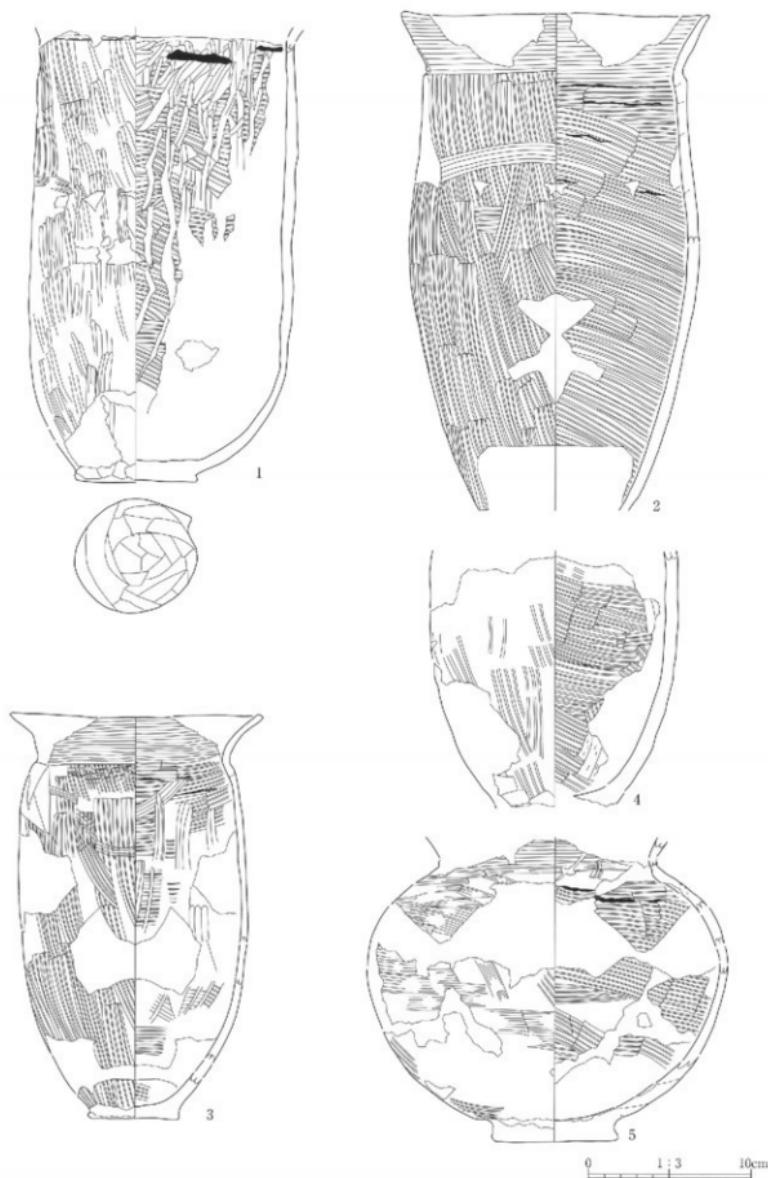
(7) 大宮北遺跡第15次調査



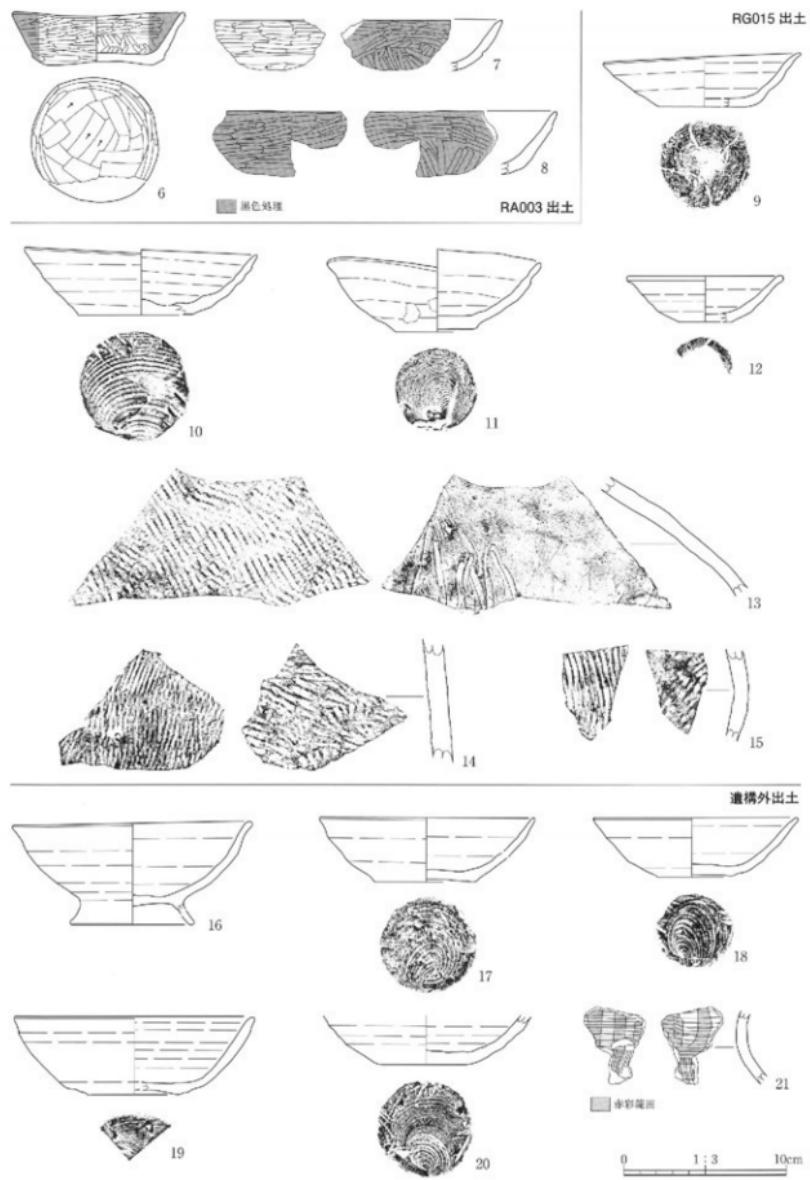
北側段丘線



第5図 RG015 溝跡、北側段丘線



第6図 RA003 (1) 出土土器



第7図 RA003 (2)、RG015、造構外出土土器

(2) 遺物

今回出土した遺物の総量は大コンテナ1箱である。大半が土師器で、その他は須恵器が十数点である。このうち掲載したのは21点と前年度試掘調査時に出土した2点を合わせた計23点である。

1~8はRA003豎穴住居跡出上である。すべて土師器で非クロコ成形である。1~4は長胴壺、5は球胴壺で、1を除き内外面ハケメ調整されている。1は内外面ともハケメ調整後、縦位のミガキが行われている。1~4はいずれも体部は寸胴で、底部に向かって急激に窄む形状をする。6~8は壺で、体部下半に段を持つ。6・8は内外面黒色処理、7は内面黒色処理でミガキ調整が施される。いずれも7世紀後半の製作と考えられる。9~15はRG015出土である。9~12土師器壺、13~15須恵器大壺である。いずれもロクロ成形で、土師器壺は非黒色、10世紀代の製作と思われる。16~23は遺構外出上である。16は高台付壺、17~20は壺で、いずれもロクロ成形で10世紀代の製作と考えられる。21は壺と思われ、縦位に赤色塗彩されている。22・23はロクロ成形の壺である。墨書が見られるが、文字については判別できなかった。9世紀後半の製作と思われる。

5まとめ

今回の調査において、7世紀後半の豎穴住居跡1棟と10世紀代の溝跡1条が確認された。古墳時代終末期の住居跡が検出されたことから、該期集落の周辺への広がりが今後期待される。また、10世紀代の遺物を出土したRG015溝跡及び北側段丘縁は、状況的にも同時に存在・機能していた可能性が高いと思われるが、第8次調査においても同時代の土器を多数伴出した點で併えの認められる掘立柱建物跡や土坑が検出されていることから、これら建物群等と関連し、これらを構成する空間を区画する用途があったものと推察される。

なお、大宮北遺跡第15次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

第1表 土器観察表

No.	出土地点	層位	種類	基盤	残存率(%)			計測値(cm)	外寸測定	背面調査	曲る
					口横	底	口径				
1	RA003 RP1	床面	土師器	壺	0	100	-	7.3 (27.9)	体:ミガキ、底:ケズリ	作:ハコナ・ミガキ	非ロクロ
2	RA003 RP2・カマド	床面	土師器	壺	10	0	(18.6)	- (21.6)	口:ヨコナデ、底:ハケメ	門:ヨコナデ、体:ハケメ	非ロクロ
3	RA003 RP1・ペベルト	床面	土師器	壺	5	100	(19.1)	6.6 31.1	口:ヨコナデ、底:ハケメ	門:ヨコナデ、体:ハケメ	非ロクロ
4	RA003 カマド	漆箔下など	土師器	壺	0	0	-	- (15.8)	体:ハケメ	門:ヨコナデ、体:ハケメ	非ロクロ
5	RA003 RP3	床面	土師器	壺	0	100	-	7.5 (18.9)	底:ハラナデ	門:ケズリ	赤ロクロ
6	RA003 RP1漆箔下壺	床面	土師器	壺	40	70	105	6.0 (3.3)	口:体:ミガキ、底:ケズリ、黒色処理	口~底:ミガキ、底:ケズリ、黒色処理	赤ロクロ
7	RA003 カマド	漆箔下土	土師器	壺	15	0	-	- (3.1)	口:ミガキ、底:ケズリ、黒色処理	口~底:ミガキ、底:ケズリ、黒色処理	非ロクロ
8	RA003	床面	土師器	壺	29	0	-	- (4.0)	口:ミガキ、底:ケズリ、黒色処理	口~底:ミガキ、底:ケズリ、黒色処理	非ロクロ
9	RG015	埋土	土師器	壺	80	100	121	5.4 33	底:凹凸有り	底:凹凸有り	小窓
10	RG015 RA003裏塙跡	土師器	土師器	壺	100	100	140	6.9 42	底:凹凸有り	底:凹凸有り	小窓
11	RG015 RA003裏塙跡付近	埋土	土師器	壺	90	100	130	4.9 6.1	底:斜傾、底:凹凸有り	底:斜傾、底:凹凸有り	歪み
12	RG015	埋土上段	土師器	壺	40	30	(9.6)	32 29	底:凹凸有り	底:凹凸有り	小窓
13	RG015	埴土	須恵器	壺	0	0	-	- (7.8)	體:敲き目	體:当貝痕	小窓
14	RG015	埋土	須恵器	壺	0	0	-	- (7.6)	體:敲き目	體:当貝痕	小窓
15	RG015	埴土上段	須恵器	壺	0	0	-	- (5.6)	體:敲き目	體:当貝痕	小窓
16	遺構外	北側段丘縁	土師器	高台付壺	85	60	145	(7.6) 6.4			
17	遺構外	北側段丘縁	埋土	土師器	25	100	(13.2)	6.0 3.9			
18	遺構外	北側段丘縁とEG015裏塙跡	埴土	土師器	35	100	(12.5)	4.5 3.7			
19	遺構外	北側段丘縁	埴土	土師器	30	15	(11.6)	(5.5) 4.8			
20	遺構外	北側段丘縁(トレンチ)	埴土	土師器	0	100	-	35 (3.0)			
21	遺構外	北側段丘縁	埋土	土師器	0	0	-	- (4.8)	ハラナデ	ハラナデ	赤色並列
22	遺構外	立木跡付近T7	土師器	壺	20	0	(15.9)	- (3.6)			墨書きのみ
23	遺構外	立木跡付近T7	土師器	壺	0	0	-	- (3.1)			墨書き 写真のみ



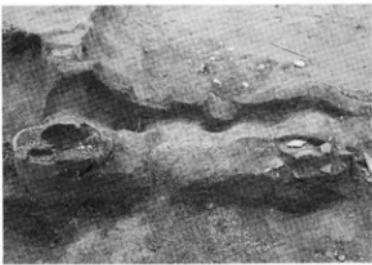
完掘（北西から）



断面（南西から）



カマド 完掘（北西から）



カマド 断面（北西から）



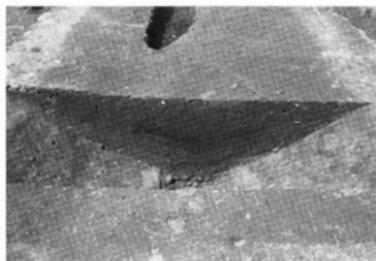
RA003 遺物出土状況1（北西から）



RA003 遺物出土状況2（北西から）



RG015 完掘（南西から）



RG015 断面 A-A'（北東から）



RG015 断面 B-B'（南西から）

写真図版2 RA003 穂穴住居跡（2）、RG015溝跡

(7) 大宮北遺跡第15次調査



北側段丘縁 実掘（南東から）



北側段丘縁 断面（北西から）



調査区北側 全景（南西から）



調査区南側 全景（北東から）

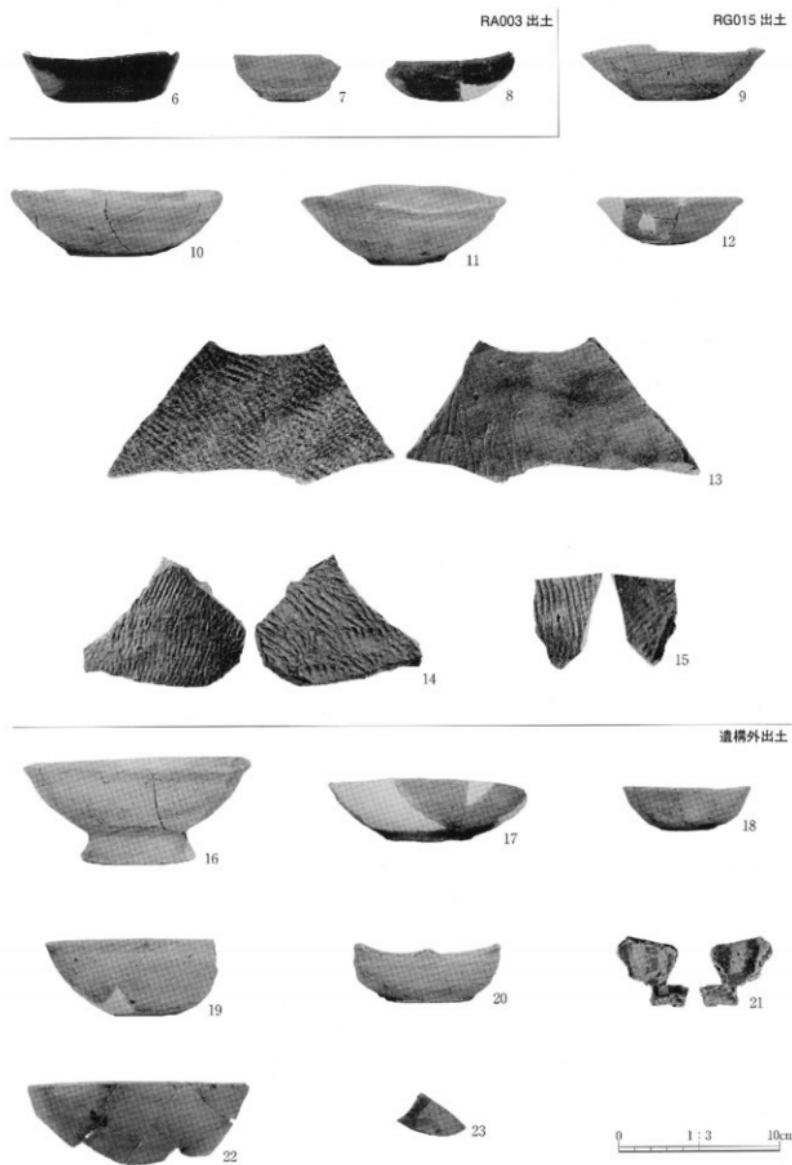


基本土層（北西から）

写真図版3 北側段丘縁、調査区全景、基本土層



写真図版4 RA003 出土遺物（1）



写真図版5 RA003 (2)、RG015、遺構外出土遺物

(8) 高屋敷 II 遺跡

所 在 地 気仙郡住田町世田米字高屋敷36-1ほか 遺跡コード・略号 NF13-1389・TYS II -09
委 託 者 大船渡地方振興局土木部 調査対象面積 1,190m²
事 業 名 一般国道397号線高屋敷地区道路改良
事業 (地域自立支援活性化交付金事業) 調査終了面積 1,190m²
発掘調査期間 平成21年7月1日～8月24日 調査担当者 米田 寛・高橋静歩

1 調査に至る経過

高屋敷 II 遺跡は、「道路改築事業高屋敷工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

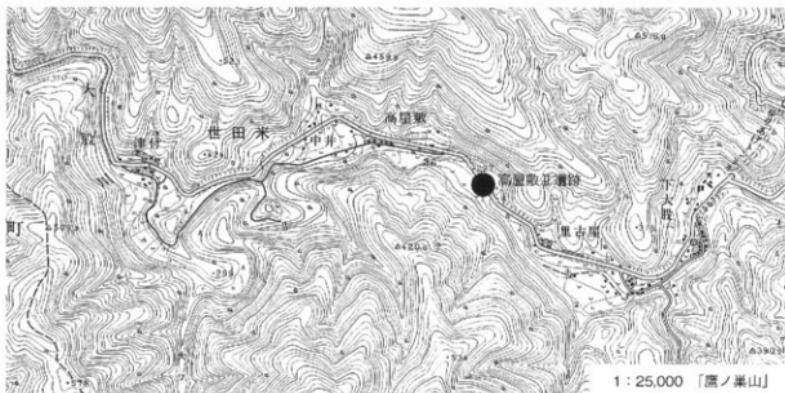
一般国道397号は気仙郡住田町西部に位置し、内陸部と大船渡地域とを連絡する道路である。この路線は急峻な北上山地を東西に横断するため、平面線形および縦断線形の劣悪な箇所が点在していることから、大船渡地域と岩手県内陸部の主要都市の物流を阻害している。これらの道路状況を改善すべく、この路線を大船渡港湾関連道路として位置付け、重点的に整備を進めている。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、大船渡地方振興局土木部から平成20年10月23日付大地土第454号「一般国道397号高屋敷地区道路改良事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

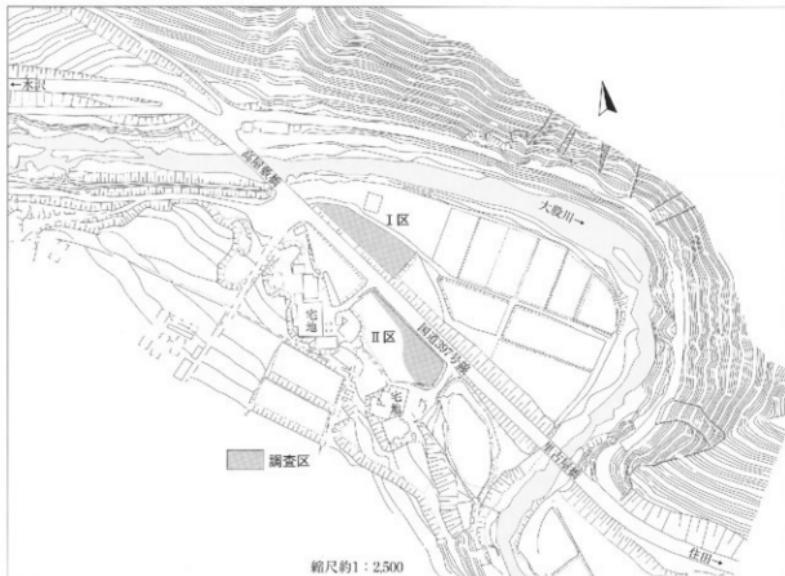
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成20年11月19日および、20日に試掘調査を実施し、工事に着手するには高屋敷 II 遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成20年12月11日付教生第1182号「一般国道397号高屋敷地区道路改良工事における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成21年6月23日付で財團法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(岩手県大船渡地方振興局土木部)



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区位置図（1）

2 遺跡の位置と立地（第1・2図）

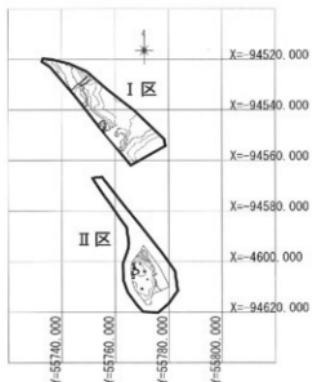
住田町役場から西に約8.5kmの場所にあり、大股川右岸の河岸段丘面上に立地している。標高は225～230mで現況は宅地、水田、畠地である。地権者によれば、国道397号線の整備に伴い、かつて比高差1～2m程度の段丘崖となっていた場所を、多量の土砂で埋め立てたと言う。今回の調査区は国道を挟んで2ヶ所（北側をI区、南側をII区と呼称）あり、そのうちII区が埋め立てられた範囲の一部に相当する。II区では道路面から約2.5mの深さで旧表土が確認された。測量用の基準点は、世界測地系第X系で、I区に基準点A ($X=-94523.000$ 、 $Y=55744.000$)、II区に基準点B ($X=-94607.000$ 、 $Y=55772.000$) を設置した。

II区で確認された崖線ラインは標高226.000mで、I区のIII層が堆積しているラインも226.000mである。遺構・遺物が密集するのは、226.000mよりも標高の高い範囲である。

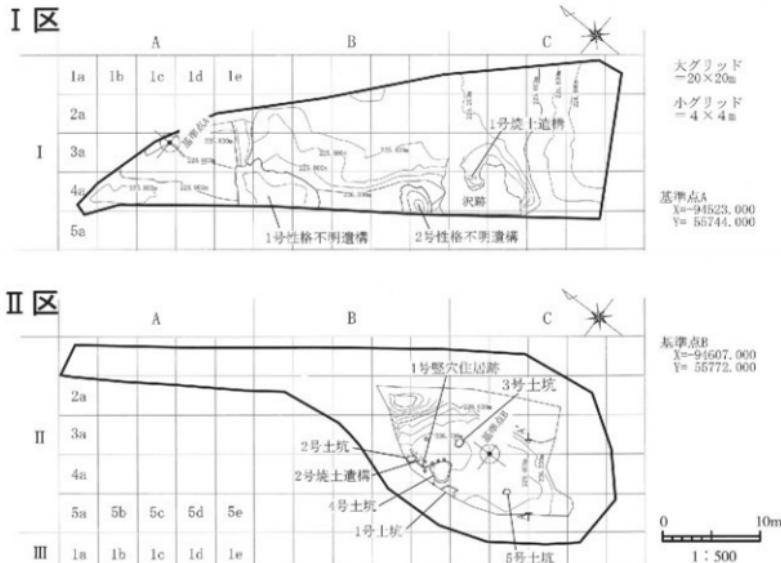
なお、各調査区には地形面に沿うように大グリッド20×20m、小グリッド4×4mを設置して、遺物の取り上げを行っている（第4図）。

3 基本層序

堆積層は、I区とII区で大きく異なることはない。4層（I～IV層）に大別し、さらに一部の堆積層については細分した。I区では、I層が厚く、II・III層が薄い。大股川沿いはI層直下にIV層が堆積している。I区内ではIIa層内に崖錐性堆積物が多くみられる事から、崖の崩落が起ったと考えられる。II区では、厚いI層を除去すると、II層の堆積が30cm近く確認された。II層は縄文土器・



第3図 調査区位置図(2)



第4図 遺構配図



第5図 II区上層断面図

4 調査の概要

(1) 遺構

縄文時代晚期の堅穴住居跡1棟、土坑4基、焼土遺構2基と、時期不明の性格不明遺構2基、土坑1基、柱穴状土坑8個を確認している。

1号堅穴住居跡

II区のⅡB4eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。堆積層は薄く、また、試掘トレンチや国道整備時の盛土(Ⅱ層)の土圧と搅乱により、東半部は消失していた。弧状のプランの残存が確認された。残存部は平面規模 2.90×0.90 m、深さ24cmを測る。底面標高226.65m、底面面積1.35m²である。住居範囲の堆積層は3層に細分される。1層は、Ⅰb層(盛土)の残存で、2層は、遺物を包含しⅡa層を起源とする。3層は、にぶい黄褐色土で硬く締まっており、床の硬化面の可能性がある。床面では、地床炉を1基検出した。炉の範囲は 0.46×0.34 mで厚さ5cmを測る。遺物は、破損した石鏃(87)と石錐(92)と三叉文を特徴とする晚期前葉の上器片(2)が床面上で出土し、堆積土下部からは、三叉文が施文される晚期前葉の注口土器の胸部片(1)、土製円盤(80)、石錐(88)が出土している。堆積層と出土遺物から、1号堅穴住居跡は、縄文時代晚期前葉の所産である。

1号土坑

II区のⅡB4eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。遺構範囲は調査区外へ延び、調査区内のプランは半円形である。平面規模 1.56×0.82 m、深さ33cmを測る。底面標高226.31m、底面面積0.65m²である。堆積土は2層に分層される。2層ともに黒色シルトであるが、第1層には炭化物が微量含まれ、黄褐色土の混入量が少ない。遺物は第2層から縄文晚期の粗製土器(6)、三叉文の施文される土器(4)が出土している。底面出土遺物はないが、本遺構の堆積層が1号堅穴住居跡の第2層と類似することから、時期は縄文時代晚期前葉と考えられる。

2号土坑

II区のⅡB4dグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。楕円形プランである。平面規模 0.94×0.70 m、深さ20cmを測る。底面標高226.64m、底面面積0.32m²。堆積土は単層で褐色土である。遺物は出土していない。1号堅穴住居跡の東壁を切る。時期は縄文時代の可能性もあるが、特に判断材料もなく不明である。

3号土坑

II区のⅡC3aグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。楕円形プランである。平面規模 0.96×0.74 m、深さ42cmを測る。底面標高226.20m、底面面積0.40m²である。堆積土は黒色～黒褐色シルトで2層に分離した。第1層には炭化物が微量含まれ、黄褐色土混入量が少ない。堆積状況は1号土坑に類似する。遺物は、堆積土から微細擦離痕のある剥片と縄文土器片が出土している。堆積層が1号堅穴住居跡の第2層や1号土坑と類似することから、時期は縄文時代晚期前葉と考えられる。

4号土坑

II区のⅡB4eグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。不整形プランである。平面規模 2.16×2.18 m、深さ40cmを測る。底面標高226.34m、底面面積2.65m²である。堆積土は3層に分離した。第1・2層は黒褐色土で、遺物を包含する。3層は、にぶい黄褐色土でⅢ層の崩落層と考えられる。遺物は堆積土から土製円盤(77～79)、肩部の張る形状の粗製土器(7)、晚期中葉の土器(10・12・13)、後期中葉の土器(8・11)、石錐(90・91)、楔形石器(95)などが出土している。堆積層が1号堅穴住居跡の第2層や1号土坑と類似することから、時期は縄文時代晚期前葉と考えられる。本

遺構は、県教育委員会による試掘調査によって、プランが確認された。試掘トレーンチ掘削によって、中央部の堆積土は若干薄くなったものの、遺構形状は残存していた。北壁が若干オーバーハングし、本遺構の周辺に柱穴状土坑が巡ることから、調査当初は木根痕跡の可能性も考慮した。しかし、底面はフラットで、根によるカクランの痕跡はなかった。焼土、遺構内の柱穴など、住居跡と認識可能な内部構成要素が確認できなかったため、土坑と捉えた。

5号土坑

II区のII C4bグリッドに位置する。III層上面で検出した。梢円形プランである。平面規模 0.69×0.53 m、深さ16cmを測る。底面標高226.14m、底面面積0.23m²である。堆積土は黒色～黒褐色シルトで2層に分離した。第2層に黄褐色土の混入の量が多い。堆積状況は1号土坑に類似する。遺物は出土していない。時期は堆積層が1号堅穴住居跡の第2層や1号土坑と類似することから、縄文時代晚期前葉の可能性がある。

1号焼土遺構

I区のI C4aグリッドに位置する。III層上面で検出した。燃上範囲は 0.91×0.48 m、焼上厚7cmを測る。焼土面標高225.98m、焼土範囲面積0.23m²である。焼土は明赤褐色で、現地性である。焼上上から造物は出土していないが、焼土から半径50cm以内のIII層上面では、晚期の粗製土器が出土している。周辺を沢跡によって削平されており、柱穴は確認できなかった。時期は遺物の分布状況から、縄文時代晚期の可能性がある。

2号焼土遺構

II区のII B4eグリッドに位置する。II a洞で検出した。燃土範囲は 0.27×0.29 mの中にモザイク状に分布する。焼土厚3cmを測る。焼土面標高226.730m、焼土範囲面積0.03m²である。焼土は赤褐色である。1号堅穴住居跡内の火跡と近接していることから、1号堅穴住居跡から外へ出された廃棄物の可能性も考えられる。形成時期は不明であるが、周辺の遺構と何らかの関係があるとすれば、縄文時代の所産である。

1号性格不明遺構

I区のI A2eグリッドに位置する。南側をIII層上面、北側をIV層上面で検出した。北側の溝部と南側の半円形部で構成される。溝部は長4.52m、幅1.80m、深さ110cmで、半円形部は長軸8.36m、短軸4.84m、深さ121cmを測る。堆積土は上部が黒褐色シルトで、下部は洪水砂と考えられる細粒砂が混入する。本遺構は礫層を掘り込んで形成されている。形態的特徴は金採掘坑と類似する。遺物は堆積土内から、鉄滓、縄文土器、石器が出土している。周辺住民によると、かつてこの遺構で、砂金採取作業を行っていたとのお話をいただいた。また、本遺構に隣接する水車小屋では第2次大戦後頃には、大理石のような硬い石を先端に付けた杵があり、水車の動力で硬い物質を碎いていたという。これらの情報が正しいとすれば、本遺構の存続年代は昭和時代で、その用途は鉱物を含む土砂の洗浄・選別作業場であろう。住田町を含む気仙郡は、金採掘の盛んな土地であったため、本遺構が金採掘関連遺構である可能性は十分考えられる。今回の調査では、時期決定の根拠となる底面遺物が出土していないため、時期・用途とも不明とした。

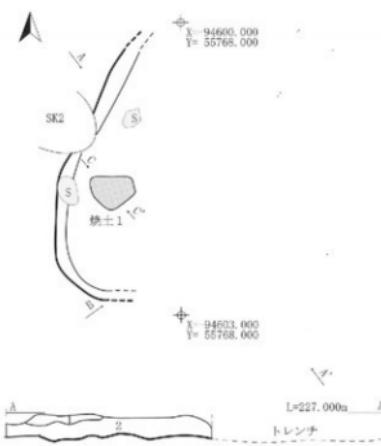
2号性格不明遺構

I区のI B4dグリッドに位置する。III層上面で検出した。作業上の安全を考慮し、調査区上場から深さ1.8mのところで、掘削を終了したため、底面形状と遺構深度は把握していない。東西2.88m、南北3.02mを測る。堆積土は黒色土で、人頭大蝶を多量に包含する。堆積層は、大形礫を使って埋め戻したことで形成されたと考えられる。本遺構は礫層を掘り込んでいることから、採掘坑であった

(8) 高屋敷Ⅱ遺跡

可能性が考えられるが、全体像が把握できなかったため、ここでは性格不明遺構として報告する。また、時期決定の根拠となる底面遺物は出土していないため、時期不明とする。

1号竪穴住居跡

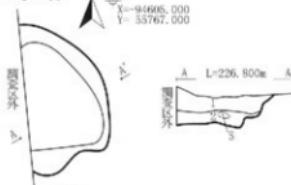


住居地盤土

1. 10YR4/1 黄褐色土 (I層) 粘性微弱、しまりやや弱、砂利少量
2. 10Y5/1 黒褐色土 粘性やや弱、しまり強、炭化物1%、遺物包含
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性強、しまりやや弱、床の硬化面の可塑性あり



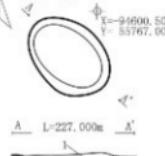
1号土坑



1号土坑

1. 10TR1.7/1 黒色シルト 粘性やや弱、しまりやや強、黄褐色土3%・炭化物1%混入
2. 10YR3/1 黒色シルト 粘性やや弱、しまりやや強、黄褐色土7%混入

2号土坑



2号土坑

1. 10YR2/2 黄褐色シルト 粘性やや強、しまりやや強、炭化物1%、黄褐色土10%混入

1号焼土遺構



- 1号焼土遺構被覆土
1. 2. 5YR5/6 明度褐色土
粘性微弱、しまり密

2号焼土遺構



- 2号焼土遺構被覆土
1. 5YR4/1 赤褐色土
粘性微弱、しまり密、炭化物1% (1号住かららの産業物か?)

3号土坑

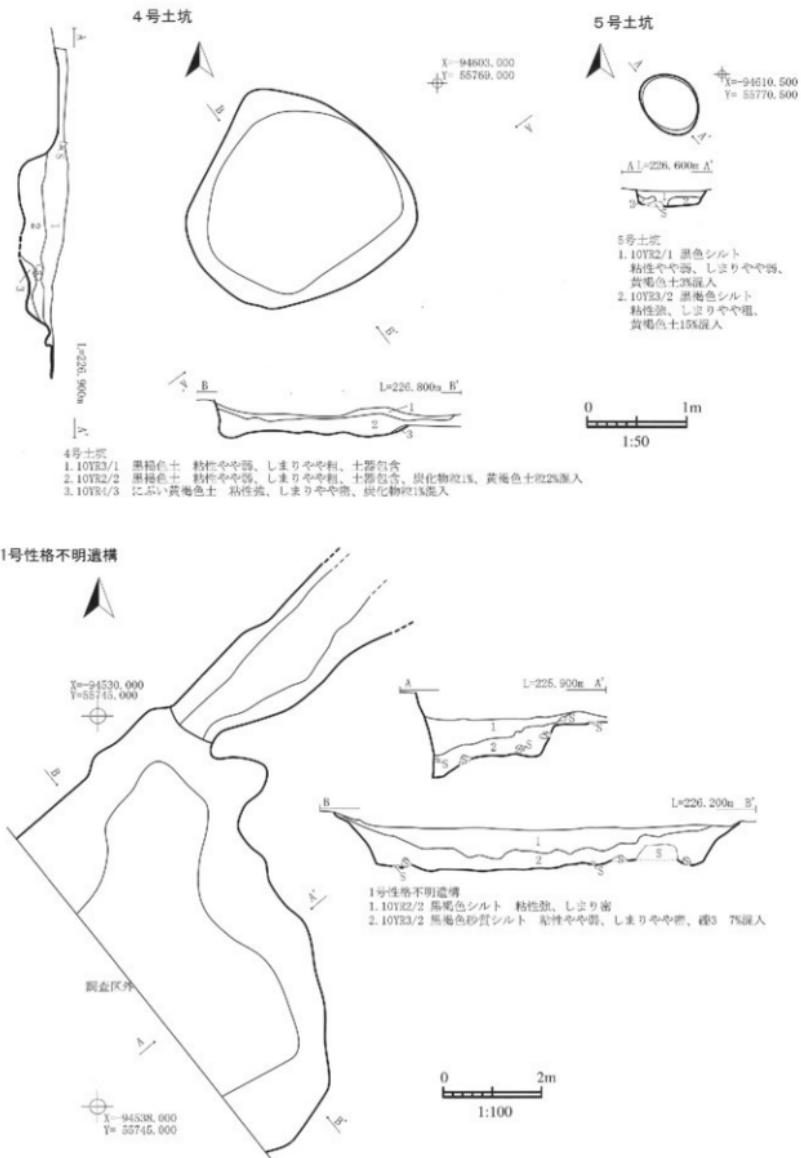


3号土坑

1. 10YR 2/1 黒色シルト 粘性やや弱、しまりやや強、炭化物1%混入、黒褐色シルト 粘性やや強、しまりやや強、黄褐色土15%混入
2. 10YR3/2 黑褐色シルト 粘性やや強、しまりやや強、黄褐色土15%混入



第6図 棚出遺構 (1)



第7図 検出遺構(2)

(8) 高屋敷II遺跡

(2) 遺物

縄文土器・弥生土器（大コンテナ25箱：総重量38.93kg）、石鏃5点、石匙1点、石錐1点、楔形石器1点、微細剥離痕のある剥片1点、剥片・碎片（小コンテナ0.5箱）、磨製石斧1点、敲石2点、磨石1点、敲磨器1点、石製円盤2点、石棒3点、鉄滓7点が出土している。主にIIa～IIb層内から出土している。ほとんどの土器が、細片で、完形近くまで復元できる個体はなかった。

土器は、早期の貝殻沈線文系土器（17・18）、後期前葉（19～26）、後期中葉～後葉の

土器（27～33）、晚期前葉（34～38）、晚期中葉（39～70）、晚期後葉（71～74）、晚期末葉～弥生前期（75・76）が出土している。

石器は石鏃（87～91）、石錐（92）、石匙（93）、微細剥離痕のある剥片（94）、楔形石器（95）、石棒（98～100）、石製円盤（101・102）、磨製石斧（103）、磨石（104）、敲磨器（105）、敲石（106・107）などが出土している。

5 まとめ

今回の調査は、高屋敷II遺跡範囲のうち、北側の縁辺部分が対象となった。住居跡、土坑、焼土遺構などが確認され、縄文時代後期～晩期にかけての集落跡と判明した。主にII層から縄文土器・弥生土器・石器が出土している。また、時期不明の性格不明遺構は、金探掘に関連する遺構の可能性がある。気仙郡では陸前高田市古館跡で探掘坑の調査事例がある。類似遺構の調査が蓄積されれば、気仙郡における探掘活動の様相を明らかにできるものと期待する。

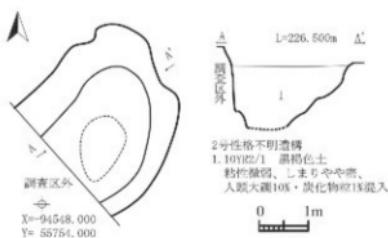
なお、高屋敷II遺跡平成21年度調査に関する報告はこれをもってすべてとする。

<引用・参考文献>

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007「里古屋遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第499集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2009「子飼沢II遺跡」「平成20年度発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第546集

2号性格不明遺構



第8図 掘出遺構（3）

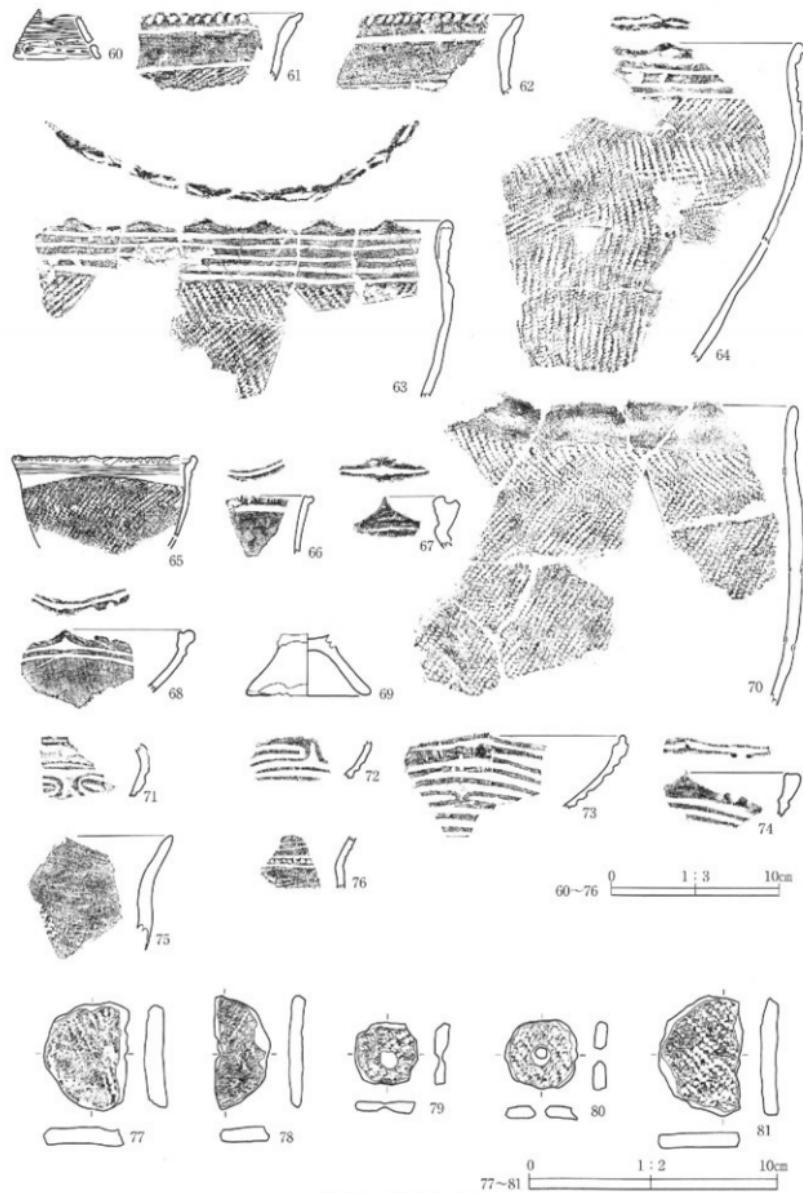


第9図 出土遺物 (1)

(8) 高屋敷Ⅱ遺跡



第10図 出土遺物 (2)

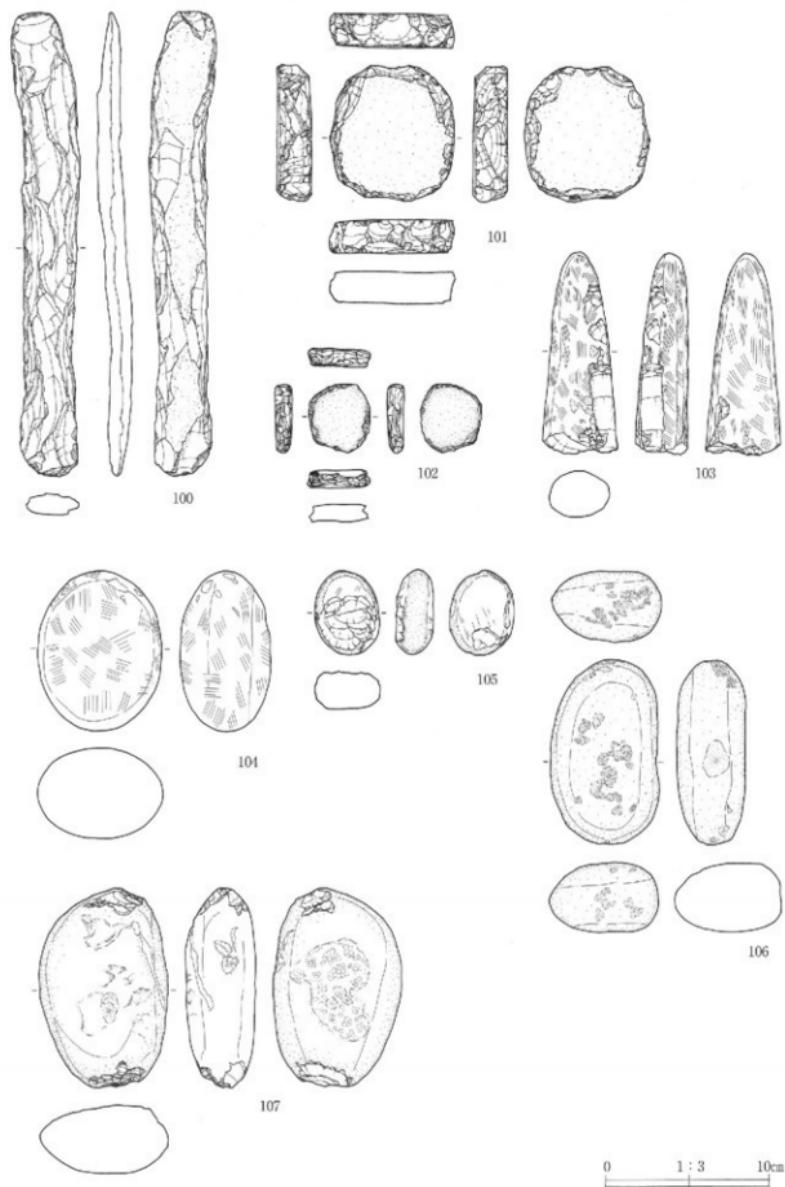


第11図 出土遺物 (3)

(8) 高屋敷II遺跡



第12図 出土遺物 (4)



第13図 出土遺物 (5)

第1表 遺物観察表

No.	種別	器種・部位	時期	位置・層位	類型・特徴・備考
1	縄文土器	往口十器・胴部	晚原前葉	I号窓穴住居・ 地積七手前	三叉文・沈線、内外面ミガキ。 頭高最大径17.1cm
2	縄文土器	鉢類・口縁	晚原前葉	I号窓穴住居・ 床面	二叉文・沈線、口唇部刻目、 LRヨコ・外面ミガキ
3	縄文土器	深鉢・ 口縁～閉部	晚原前葉	I号窓穴住居・床面 2号土坑・2層	白継縁単位、頭Rヨコ・外面上部ス付着
4	縄文土器	鉢類・口縁	晚原前葉	I号土坑・2層	口縫小突起、人組二叉文・沈線
5	縄文土器	鉢類・胴部	後期中葉	I号土坑・1層	LRタケ・ヨコ・沈線、外側ミガキ
6	縄文土器	鉢類・胴部	後葉	I号土坑・2層	IRタテ
7	縄文土器	西・ 口縁～胴部	後期	4号土坑・2層	LRUヨコ
8	縄文土器	鉢類・胴部	後期中葉	4号土坑・1層	普通文・沈線、外側ミガキ
9	縄文土器	?	後葉期	4号土坑・地積土	有孔
10	縄文土器	鉢類・口縁	晚原中葉	4号窓穴・ 地縫上・下部	多量沈線、ミガキ
11	縄文土器	鉢類・口縁	後原中葉	5号土坑・ 地縫土・下部	波状口縫、RLタテ・ヨコ・沈線、磨損、 植縫孔?
12	縄文土器	深鉢・口縁	晚原中葉	4号土坑・2層	口縫部開口、沈線
13	縄文土器	鉢類・口縁	晚原中葉	4号土坑・2層	LRヨコ・沈線、内外面ミガキ
14	縄文土器	深鉢・底部	後葉	1号小明遺構・ 1層	直徑7.70cm
15	縄文土器	深鉢・口縁	晚原中葉	1号不明遺構・ 1層	多量沈線、口唇刻目
16	縄文土器	鉢類・口縁	後原前葉	2号不明遺構・ 1層	波状口縫、刺突列、平行沈線、 外生土胞?
17	縄文土器	深鉢・胴部	中期中葉	H.C4b・IIa層	只見櫻楕文・沈線
18	縄文土器	深鉢・口縁	三期中葉	H.C1b・IIa層	只見櫻楕文・沈線
19	縄文土器	深鉢・口縫	後原前葉	H.C3a・IIa層	陶系、刺突、IRヨコ・沈線
20	縄文土器	?	後原前葉	H.C3b・IIa層	波紋
21	縄文土器	?	後原前葉	H.C3a・IIa層	波紋
22	縄文土器	深鉢・胴部	後原前葉	H区・カクラン	沈線、IRヨコ・磨酒
23	縄文土器	深鉢・口縫	後原前葉	H.C4b・IIa層	沈線、刺突、IRヨコ・磨酒
24	縄文土器	深鉢・胴部	後原前葉	H.C5b・IIa層	沈線、E、磨酒
25	縄文土器	深鉢・胴部	後原前葉	H区・IIb層	LRヨコ・沈線、磨酒
26	縄文土器	深鉢・胴部	後葉	II.C4c・IIa層	太目状底糸文E
27	縄文土器	深鉢・胴部	後原中葉	I.A4b・IIa層	LR帶櫻楕文・沈線
28	縄文土器	深鉢・胴部	後原中葉	I.A4b・IIa層	IRヨコ・沈線、外外面ナデ
29	縄文土器	深鉢・口縫	後原中葉	I.B3e・IIa層	沈線、RLタテ・ヨコ
30	縄文土器	深鉢・胴部	後原中葉	I.C4a・IIa層	IR、RLヨコ・沈線
31	縄文土器	?	後原中葉	H区・I層	IR
32	縄文土器	深鉢・口縫	後原中葉	H.C4b・IIa層	IR、RL、羽状隠文、輪面導孔
33	縄文土器	深鉢・胴部	後原中葉	H.C5b・IIa層	沈線、刺突
34	縄文土器	深鉢・口縫	後原前葉	H.C4C・IIa層	一叉文・LRヨコ・直縫・磨酒
35	縄文土器	深鉢・口縫	後原前葉	H.C4e・IIa層	二叉文・沈線、帶縫孔・磨酒
36	縄文土器	鉢類・口縫	後原前葉	H.C4b・IIa層	LRヨコ・沈線、羊首状文、内面ミガキ・磨酒
37	縄文土器	鉢類・口縫	後原前葉	H.C5c・III層	LRヨコ?・沈線、革衝状文・磨酒
38	縄文土器	ミニチュア?	後原前葉	H.C4b・IIa層	沈線、三叉?
39	縄文土器	西鉢・口縫	晚原中葉	H区・IIb層	LRヨコ?・沈線、内外面ミガキ、 スヌ・コゲ付着
40	縄文土器	?	晚原中葉	I.Ab・IIb層	沈線、笠形導孔
41	縄文土器	鉢類・口縫	後原?・口縫	H.C5b・IIa層	白唇部刻目・LRヨコ・沈線、内外面ミガキ
42	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	H.C4n・IIa層	LRヨコ・沈線、内外面ミガキ
43	縄文土器	?	後原中葉	H.C4b・IIa層	IR?
44	縄文土器	?	後原中葉	H.C4b・IIa層	IR、沈線、直縫
45	縄文土器	台付鉢・ II層～底部	晚原中葉	H.C4b・IIa層	LRヨコ・沈線、IV字状文、口唇刻目・磨酒、 内径12.1cm、直徑7.65cm、高さ11.06cm
46	縄文土器	?	後原	H.C2a・IIa層	直縫・沈線、外側ミガキ
47	縄文土器	口縫・注口	晚原中葉	I.C1e・IIa層	隆背・口縫・刻目
48	縄文土器	鉢類・口縫	晚原中葉	H.C4b・IIa層	多量沈線間に刻目・IR、RL、型清
49	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	I.C1c・IIa層	沈線間に刻目・内外面ミガキ
50	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	I.C4a・IIa層	IRヨコ・沈線、口唇刻目・磨酒
51	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	I.A4c・IIa層	IRタテ・沈線、口唇刻目
52	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	H.C3b・IIa層	LRヨコ・沈線、磨酒
53	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	H.C4c・IIa層	LRヨコ・沈線、口唇刻目・磨酒
54	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	H.C4c・IIa層	IRタテ・多量沈線、口唇刻目
55	縄文土器	鉢類・口縫	後原中葉	I.C1a・IIa層	輪面導孔、多量沈線、口唇刻目

No.	種別	器種・部位	時期	位置・層位	断面・特徴・備考
56	高麗土器	深鉢・口縁	晚期中央	II 53e・II a層	表面磨耗、口縁に多量沈痕、口唇刻印
57	高麗土器	深鉢・口縁	晚期中央	I A1b・II b層	多量沈痕、口唇刻印
58	高麗土器	深鉢・口縫	晚期中央	I A4c・II b層	多量沈痕、口唇突起
59	高麗土器	深鉢・口縫	晚期中央	I A1d・II b層	口縫口縫、多量沈痕、口唇刻印
60	高麗土器	台付鉢・底部	晚期中央	I B3e・II b層	多量沈痕、有孔
61	高麗土器	深鉢・口縫	晚期中央	II 区・II a層	口縫口縫、沈痕、磨損、口唇刻印
62	高麗土器	深鉢・口縫	晚期中央	I A4b・II b層	沈痕、口唇刻印
63	高麗土器	深鉢・口縫	晚期中央	I C1b・II a層	則、I R、多量沈痕、波状口縫
64	高麗土器	深鉢・口縫	晚期中央	I C4b・II a層	則、I R、多量沈痕、波状口縫
65	高麗土器	鉢・山根	晚期中央	II C1b・II a層	口縫口縫、沈痕、口唇刻印
66	高麗土器	鉢	晚期中央	II C4c・II a層	口唇刻印、内外面ミガキ
67	高麗土器	鉢・口縫	晚期中央	II C5e・II a層	口縫口縫、口唇突起
68	高麗土器	浅鉢・口縫	晚期中央	I C1a・II a層	沈痕、内外面ミガキ
69	高麗土器	台付鉢・口縫	晚期中央	I C1a・II c層	ミガキ
70	高麗土器	鉢	晚期中央	I C1c・II c層	ミガキ、Rタテ
71	高麗土器	口縫・柄部	晚期中央	II C4b・II c層	口縫・T字文
72	高麗土器	鉢底・調部	晚期後期	I A4b・II a層	沈痕、T字文
73	高麗土器	鉢底・口縫	晚期後期	I C4b・II a層	沈痕、口縫、T字文、突起、内外面ミガキ
74	高麗土器	鉢底・口縫	晚期後期	I C3a・II a層	沈痕、突起
75	高麗土器	鉢底・口縫	晚期中央	II C3c・II a層	Rタテ?、溝消
76	生漆土器	鉢底・口縫	弱生前	II C4a・II a層	沈痕、突起
77	上製品	円盤	陶文後期	4号土坑・1層	桃形、長3.3cm、幅3.4cm、厚0.8cm、重量13.2g
78	上製品	円盤	陶文後期	4号土坑・1層	桃形、長4.6cm、幅2.3cm、厚0.6cm、重量4.9g
79	上製品	円盤	陶文後期	4号土坑・1層	R.L、穿孔途中、長2.6cm、幅2.5cm、厚0.6cm、重量4.3g
80	上製品	円盤	陶文後期	1号窓穴底・堆積土下部	R.H、有孔、長2.6cm、幅2.9cm、厚0.6cm、重量1.1g
81	上製品	円盤	陶文後期	II C4a・II a層	1R、長4.9cm、幅3.3cm、厚0.7cm、重量13.4g
82	上製品	円盤	陶文後期	II C4a・II a層	R、沈痕、長5.6cm、幅5.9cm、厚0.8cm、重量16.1g
83	上製品	円盤	陶文後期	II B4d・II a層	1R、長3.1cm、幅3.8cm、厚0.6cm、重量4.1g
84	上製品	円盤	陶文後期	II B4d・II a層	1R、有孔、長4.6cm、幅3.0cm、厚0.6cm、重量4.5g
85	上製品	円盤	陶文後期	II L・I 層	1R、有孔、長2.1cm、幅2.0cm、厚0.6cm、重量2.9g
86	上製品	円盤	陶文後期	II 区・II a層	1R、有孔、長2.9cm、幅2.7cm、厚0.6cm、重量4.8g
87	石器	石礫	陶文後期	1号窓穴底・床面	長1.8cm、幅1.4cm、厚0.5cm、重量0.6g、質岩質
88	石器	石礫	陶文後期	1号窓穴底・床面	長1.8cm、幅1.5cm、厚0.6cm、重量1.0g、メソノイ型
89	石器	石礫	陶文後期	II C4b・II a層	長3.1cm、幅1.5cm、厚0.5cm、重量1.4g、質岩質
90	石器	石礫	陶文後期	4号土坑・2層	長2.6cm、幅1.2cm、厚0.4cm、重量0.7g、質岩質、アスファルト付着
91	石器	石礫	陶文後期	4号土坑・2層	長3.1cm、幅1.4cm、厚0.5cm、重量1.3g、質岩質、アスファルト付着
92	石器	石礫	陶文後期	1号窓穴底・床面	長5.3cm、幅1.5cm、厚0.6cm、重量2.1g、質岩質
93	石器	石礫	陶文後期	II C4b・II b層	長2.3cm、幅3.1cm、厚0.6cm、重量2.3g、質岩質
94	石器	微細削離塊	撲・弥	3号土坑・堆積土	長4.9cm、幅1.4cm、厚1.4cm、重量25.0g、質岩質
95	石器	微細削離塊	撲・弥	堆積土	長3.1cm、幅1.4cm、厚0.5cm、重量1.3g、質岩質
96	石器	剥片	撲・弥	4号土坑・1層	長4.9cm、幅1.1cm、厚1.4cm、重量23.3g、質岩質
97	石器	剥片	撲・弥	II C3e・II a層	長3.1cm、幅2.0cm、厚1.4cm、重量6.1g、黑色石器
98	石製品	石棒	撲・弥	II C3a・II a層	長1.9cm、幅1.6cm、厚0.8cm、重量6.1g、黑色石器
99	石製品	石棒	撲・弥	II D4c・II a層	長8.8cm、幅3.2cm、厚2.7cm、重量102.3g、質岩質
100	石製品	石棒	撲・弥	II 区・I 層	石刀形状製品、長28.2cm、幅3.6cm、厚1.5cm、重量215.6g、質岩質
101	石器	円盤	撲・弥	II C4b・II a層	長8.3cm、幅7.6cm、厚2.1cm、重量249.9g、質岩質
102	石器	円盤	撲・弥	4号土坑・1層	長4.2cm、幅3.8cm、厚1.1cm、重量27.5g、質岩質
103	石器	削離石片	撲・弥	II C4a・I 層	長12.3cm、幅1.6cm、厚3.2cm、重量231.7g、質岩質
104	石器	削離石片	撲・弥	II B4a・II b層	長9.8cm、幅7.65cm、厚5.5cm、重量60.2g、安山岩質
105	石器	軋壓器	撲・弥	II C4b・II a層	長5.1cm、幅3.9cm、厚2.3cm、重量69.7g、安山岩質
106	石器	敲石	撲・弥	II C4a・II a層	長11.3cm、幅6.8cm、厚4.2cm、重量476.3g、安山岩質
107	石器	敲石	撲・弥	II C4c・II a層	長12.1cm、幅7.9cm、厚4.3cm、重量569.2g、質岩質

(8) 高屋敷II遺跡



調査区現況



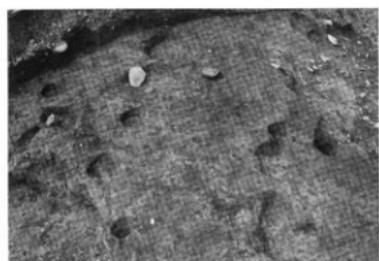
調査区完掘（II区埋め戻し終了後）



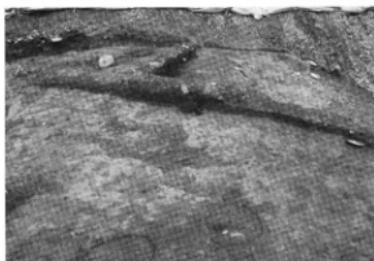
II区 II-a層遺物出土状況



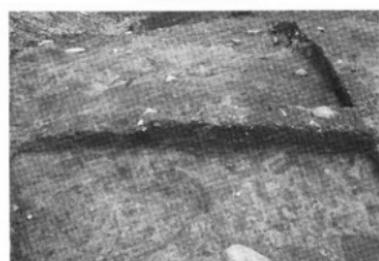
II区土層断面（A-A'）



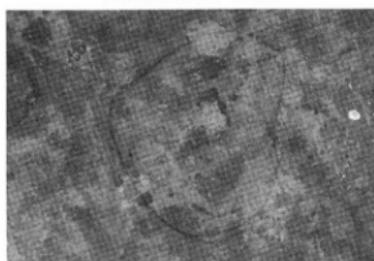
1号竪穴住居跡全景



1号竪穴住居跡断面（B-B'）



1号竪穴住居跡断面（A-A'）



1号竪穴住居跡焼土 1全景

写真図版1 梱出遺構 (1)



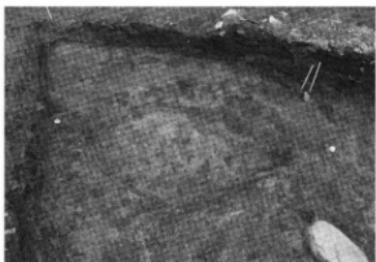
1号土坑断面



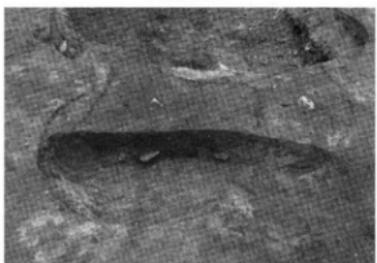
1号土坑全景



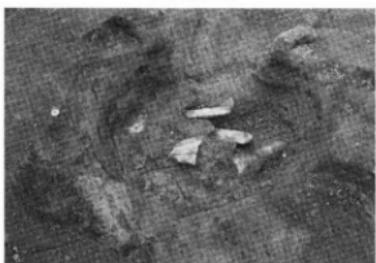
2号土坑断面



2号土坑全景



3号土坑断面



3号土坑全景

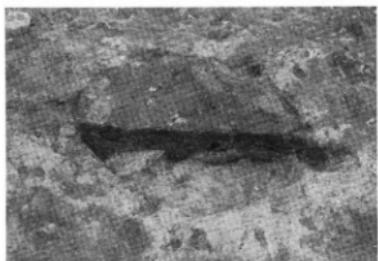


4号土坑断面 (B-B')

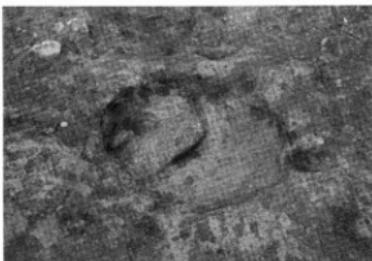


4号土坑全景

(8) 高程散Ⅱ遺跡



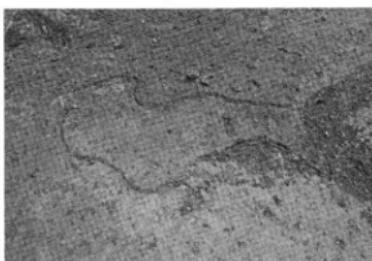
5号土坑断面



5号土坑全景



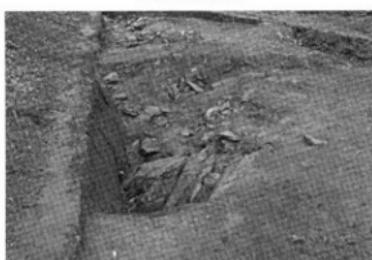
1号焯土渠模断面



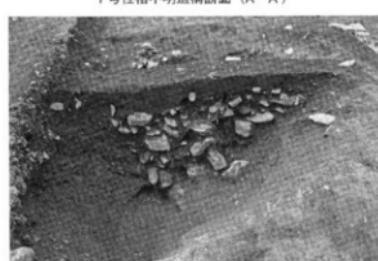
1号焯土渠模全景



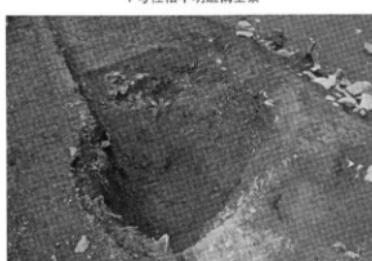
1号性格不明遣構断面 (A-A')



1号性格不明遣構全景



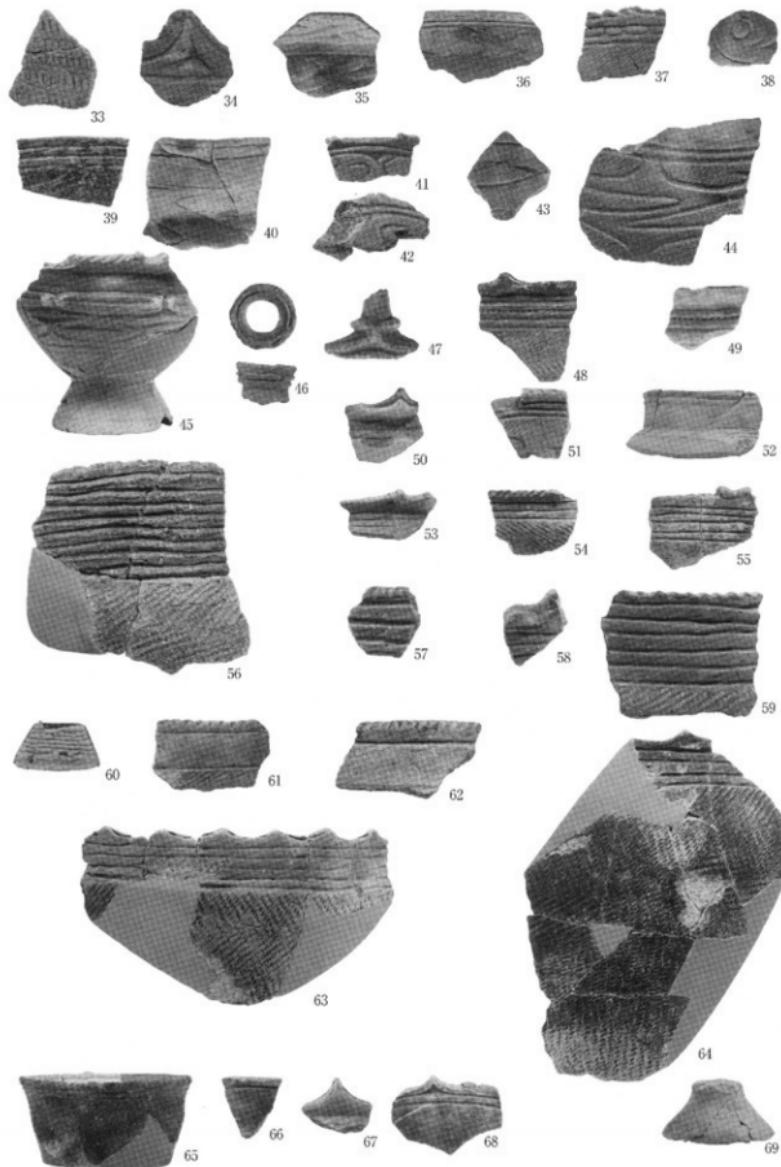
2号性格不明遣構断面



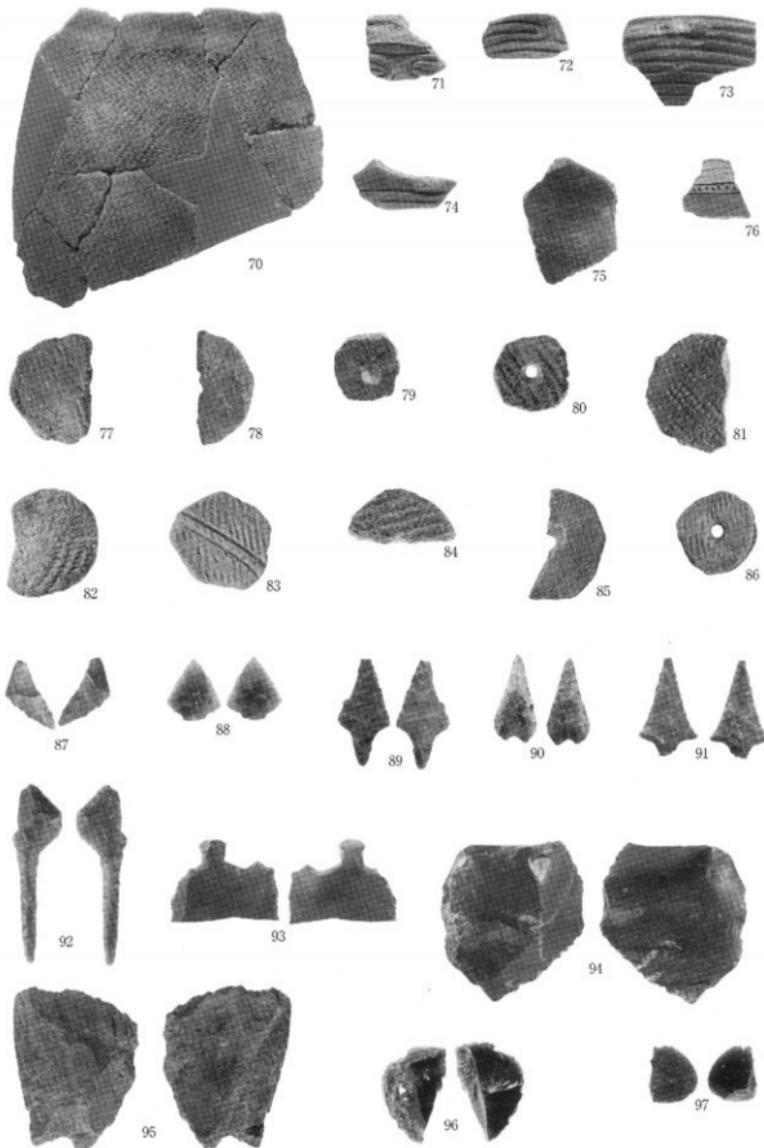
2号性格不明遣構全景



写真図版4 出土遺物（1）

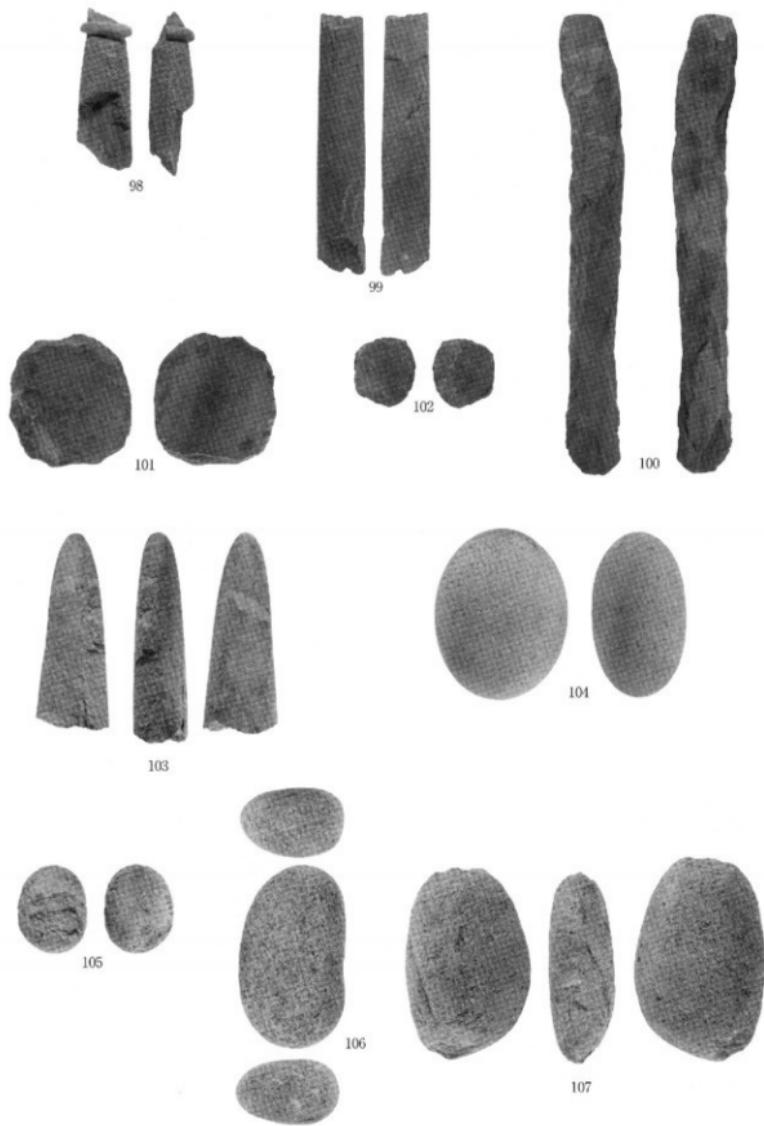


写真図版5 出土遺物(2)



写真図版6 出土遺物（3）

(8) 高屋敷II遺跡



写真図版7 出土遺物 (4)

(9) 八幡遺跡

所 在 地	奥州市前沢区白山字八幡91ほか	遺跡コード・略号	N E 46-2317・H M-09
委 託 者	県南広域振興局農林部農村整備室	調査対象面積	800m ²
事 業 名	経営体育成基盤整備事業白山地区	調査終了面積	800m ²
発掘調査期間	平成21年5月1日～5月29日	調査担当者	北田 真・小林弘卓

1 調査に至る経過

八幡遺跡は、経営体育成基盤整備事業白山地区の施工に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することになったものである。

本地区は、前沢区白山地区的約270haを圃場整備するもので、大部分は昭和29年～31年の非補助土地改良事業により10a区画に整備されているが、農道幅員が2～3mと狭小で農作業の効率が悪く、水路は用排兼用土水路のため用水不足や排水不良をきたし維持管理に多大な労力を投じている現状であった。そのため本事業により農業規模拡大を目指した大区画は圃場とし、作業体系の受託および農地の流動化を促進し経営規模拡大による担い手農家の育成を図ると共に、生産コスト低減のための整備を行ない近代農業化による農業経営の安定を期すため、平成12年度に採択され事業を実施している。

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農林部農村整備室から、平成20年10月27日付け県南広域農業第141-6号（八幡遺跡）により岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼した。

依頼を受けた県教育委員会では平成20年11月4日～6日に試掘調査を実施し、工事着手するには発掘調査が必要となる旨を平成20年12月4日付け教生第1157号（八幡遺跡）により当農村整備室へ回答した。

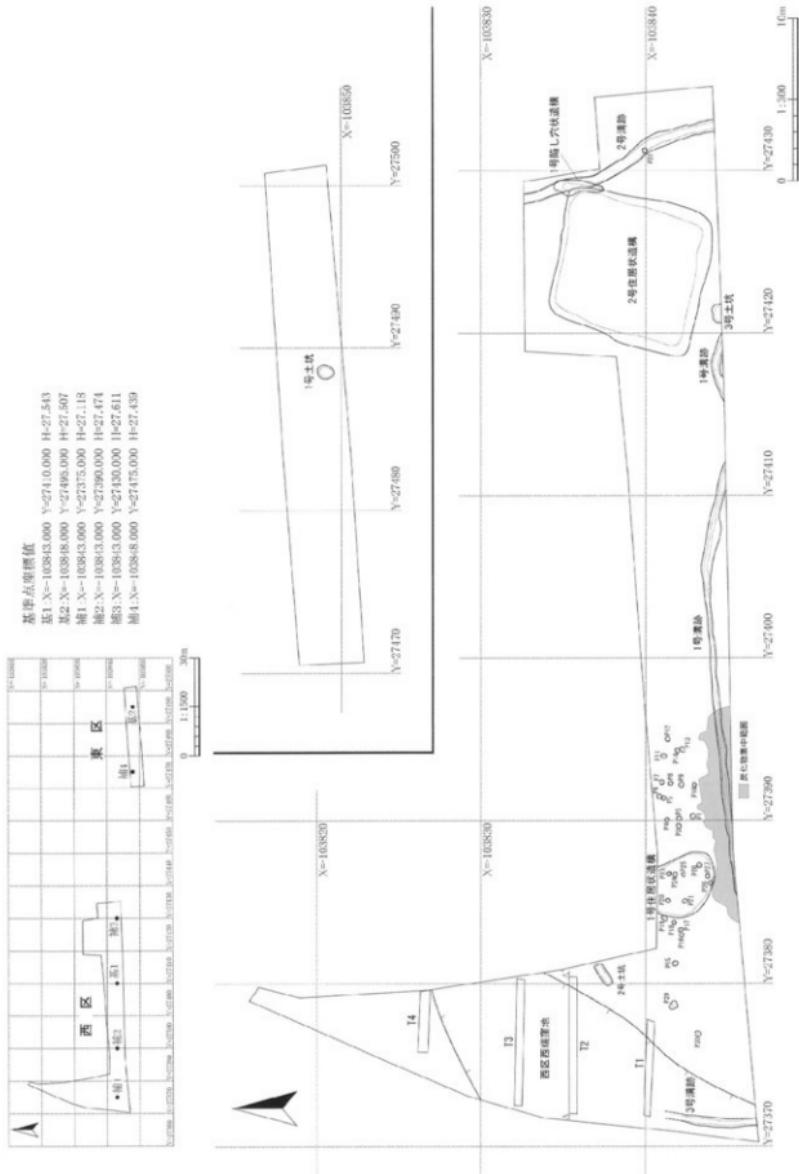
その結果を踏まえて当農村整備室は岩手県教育委員会と協議し、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターとの間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農林部農村整備室）



第1図 遺跡の位置

(9) 八榀道路



第2图 造構配置図

2 遺跡の位置と立地

八幡遺跡は、奥州市役所前沢支所の北東方向約2.8kmに位置し、北上川右岸の低位段丘上にあり、遺跡西側を流れる明後沢川によって開拓されている。標高は27~28m前後、現況は水田・畑地である。

3 基本層序

調査区内の基本層序はⅠ~Ⅵ層に分層される。Ⅰa層は褐灰色粘土や黒褐色土の現耕作土（表土）10~40cm、Ⅰb層は暗褐色土と黄褐色粘土の混合する盛土20~40cm、Ⅱ層暗褐色の旧表土10~30cm、Ⅲ層暗褐色土10~30cm、Ⅳ層黄褐色粘土の地山（遺構検出面）50~80cm、Ⅴ層褐灰色砂・層厚不明、Ⅵ層岩盤・層厚不明である。

4 調査の概要

調査区は農道を挟んで2箇所あり、西区、東区の2つに区分している。現況は西区北西端及び東区が水田、西区の大半が畑地で周囲よりも高位である。水田部分の削平は著しく、造成時の影響を受けている。反対に畑地部分は全体に盛土がなされており遺存状況は良好である。

今回の調査で確認された遺構は、住居状遺構2棟、土坑3基、陥し穴状遺構1基、溝跡3条、柱穴状ピット（Pと略号を付した）30個である。このほか、西区西側において縄文時代の遺物が集中する床状地の低位部分と、炭化物が集中して広がる部分を確認した。

（1）遺構

1号住居状遺構（第3図、写真図版2）

西区西側に位置する。北側が削平されているため全容は不明だが、平面形は不整な円形を呈しており、規模は3.5×(3.8)mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は15cmが残存する。堆積土は3層に細分したが、黒褐色土が主体となっている。床面はⅣ層土となり概ね平坦で堅く締まるが、炉などの床面施設は確認されなかった。出土遺物は大半が剥片石器であり、縄文時代に属すると思われる。

2号住居状遺構（第4図、写真図版3）

西区東側に位置する。1号陥し穴状遺構・2号溝跡と重複が認められる。断面状況から1号陥し穴状遺構より新期と判断できるが、2号溝跡との新旧関係については判断が付かなかった。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は一辺約8.0~8.8mを測る。壁は床面から直角に近い角度で立ち上がり、上部で崩落のため外傾する。壁高は最大で約75cmが残存する。堆積土は13層に細分されるが、黄褐色を主体とした壁際の崩落土と自然流入した黒褐色土に大別できる。流入時に水分が多くたためか粘土質で土色が変性している。床面はV層土となり、平坦で堅く締るが、砂質であり地下水位が高いためか水分を多く含む。北西隅にピット1を確認したが、その他に床面施設は認められなかつた。出土遺物は上部器や須恵器が主であるが、床面からの出土はほとんどなく大半が1~3層の流入土に含まれている。遺構形状や出土遺物から平安時代の構築と推測される。

1号土坑（第5図、写真図版4）

東区中央に位置する。平面形・規模は径0.9~1.0mの円形を呈する。断面形は鍋底形で副穴を伴っている。深さは最深部で44cmを測る。堆積土は4層に細分される自然堆積土と思われる。出土遺物はなく、時期・性格等詳細は不明である。

2号土坑（第5図、写真図版4）

西区西側に位置する。平面形・規模は約1.5×0.5mの長方形を呈する。断面形は逆台形状で、深さは最深部で36cmを測る。堆積土は2~4層は壁崩落土、1層は流入土で自然堆積と考えられる。遺物は堆積土中より土器片が数点出土している。平安時代に属する可能性がある。

3号土坑（第5図、写真図版4）

(9) 八幡遺跡

西区東側に位置する。調査区外に掛かるため全容は不明だが、径約1.2mの円形を呈するものと思われる。断面形は皿形で、深さは最深部で32cmを測る。いずれの堆積土にも廐棄焼土を含む黒褐色土主体で、人為堆積の可能性がある。遺物は堆積土中から土師器片が数点出土している。平安時代に属する可能性がある。

1号陥し穴状遺構（第5図、写真図版4）

西区東側に位置する。2号住居状遺構と2号溝跡と重複し、これらの精査中に検出した。断面状況から両者よりも旧期と判断される。平面形は溝形で北側は崩落の影響で変形している。規模は3.0×0.7mである。断面形はU字状となり、深さ48cmを測る。堆積土は5層に細分される自然堆積土と考えられる。出土遺物ではなく時期不明であるが、形状から縄文時代に属すると考えられる。

1号溝跡（第5図、写真図版4）

西区南際に沿うように位置する。調査区外へと統くため全容は不明であるが、長さ約35m以上、幅30~55cmである。走向方位は東~西方向にあり、蛇行している。深さは約10~20cmで、底面標高は西に向かって低位となる。堆積土は暗褐色土の単層である。出土遺物は上師器・須恵器のほか、陶磁器・砥石といった近現代のものも見られる。

2号溝跡（第6図、写真図版5）

西区東側に位置する。2号住居状遺構・1号陥し穴状遺構・P31と重複し、1号陥し穴状遺構・P31よりも新期と判断したが、2号住居状遺構とについては不明である。長さ約12.7m以上、幅55~90cmである。走向方位はやや蛇行するものの、およそ北北西~南南東方向にある。深さは最深部で約25cmを測り、底面標高は北に向かって低位となる。堆積土は最大2層に分別されるが、概ね黒褐色粘質土を主体とする。遺物は堆積土中より上師器・須恵器が出土している。このうち、須恵器の大甕片が2号住居状遺構出土のものと接合した(14)。出土遺物から平安時代に属するものと思われる。

3号溝跡（第6図、写真図版5）

西区西端に位置する。北側が削平により消失され、南側が調査区外へと延びるため全容は不明だが、長さ約4.6m以上、幅40~55cmを測る。走向方位は北~南にあり、直線状に延びる。深さは最深部で約30cmを測り、底面標高は北に向かって低位となる。堆積土は3層に細分されるが、黒褐色土主体の自然堆積の様相を示す。遺物は堆積土中から土師器片が少量出土している。出土遺物より平安時代以降に属する可能性がある。

柱穴状ピット（第2図、写真図版5、第1表）

西区西側を中心に30個検出している。円形・楕円形を呈するものが大半で、径30cm前後のものが多い。深さは16~73cmと様々である。列状に並ぶ傾向のある部分も認められるが、調査範囲が狭いことや、現況における営農用具痕の可能性も否定できないため、個々についての表記載にのみ留めた。出土遺物もなく時期等詳細は不明であるが、P31のみは2号溝跡より旧期であることが確認されており、平安時代に属するものと考えられる。

西区西端窪地（第2・6図、写真図版5）

西区西端に北東から南東方向に帯状に広がる黒褐色プランを確認した。規模は長さ12m以上、幅7~10m、深さ35cm、面積114m²である。遺物は縄文時代の土器・石器・石製品が主体で、上師器・須恵器も少量出土している。大半が堆積土上位の2層からの出土である。

炭化物集中範囲（第2図）

西区西側に12.2×1.0~2.1mの範囲に炭化物を多量に混合した黒褐色土が5~8cmの厚さで広がる。1号住居状遺構・1号溝跡と重複するが、いずれの堆積土上部にこれが堆積している状況であり、

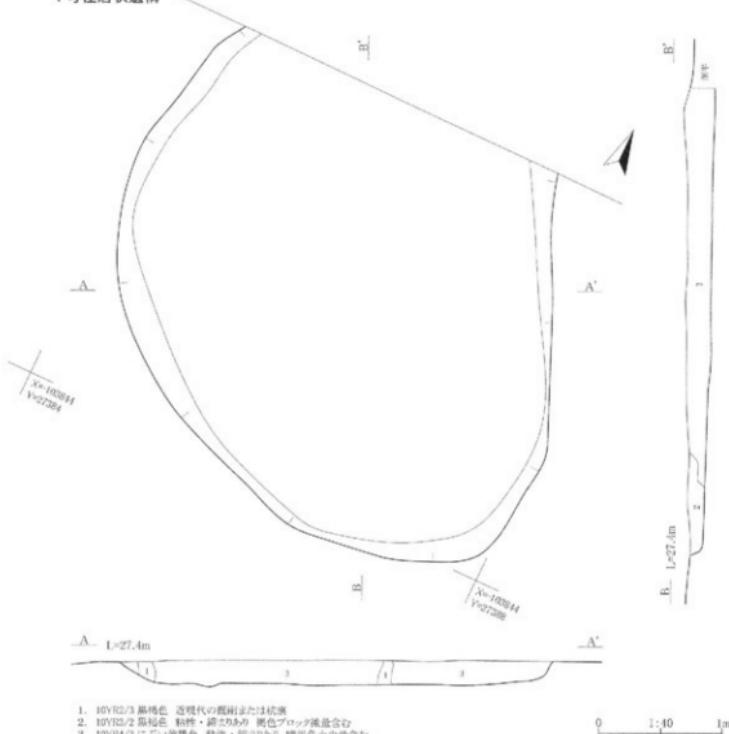
新しいものと判断される。地主の方のお話では隣接する社が何十年か前に火災にあっているとのことから、これに起因する可能性がある。

(2) 遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ大1箱である。種別ごとの内訳は縄文土器コンテナ中1箱、石器114点（石鏃3点・石匙3点・削搔器7点・二次加工ある剥片4点・剥片95点・打製石斧1点・礫器1点）、有孔石製品1点、土師器2袋、須恵器1袋、近現代の砥石3点である。このうち、土師器3点（1～3）、須恵器6点（4～8・12）、縄文土器3点（9～11）、石器12点（13～24）、石製品1点（25）の計25点を掲載した。

縄文土器は破片資料が多く、器形や文様などが判然としないものばかりであるが、大半が縄文時代後期前葉に位置付けられるものと思われる。11は植物質纖維を混入しており、前期前葉の可能性が考えられる。土師器・須恵器はほぼ同一時期で平安時代中期の9世紀後半に属すると考えられる。石器は伴出した土器から大半は縄文時代後期前葉と考えられるが、1号住居状遺構は時期を決定するような土器が伴出していなかったため縄文時代と広く捉えておく。

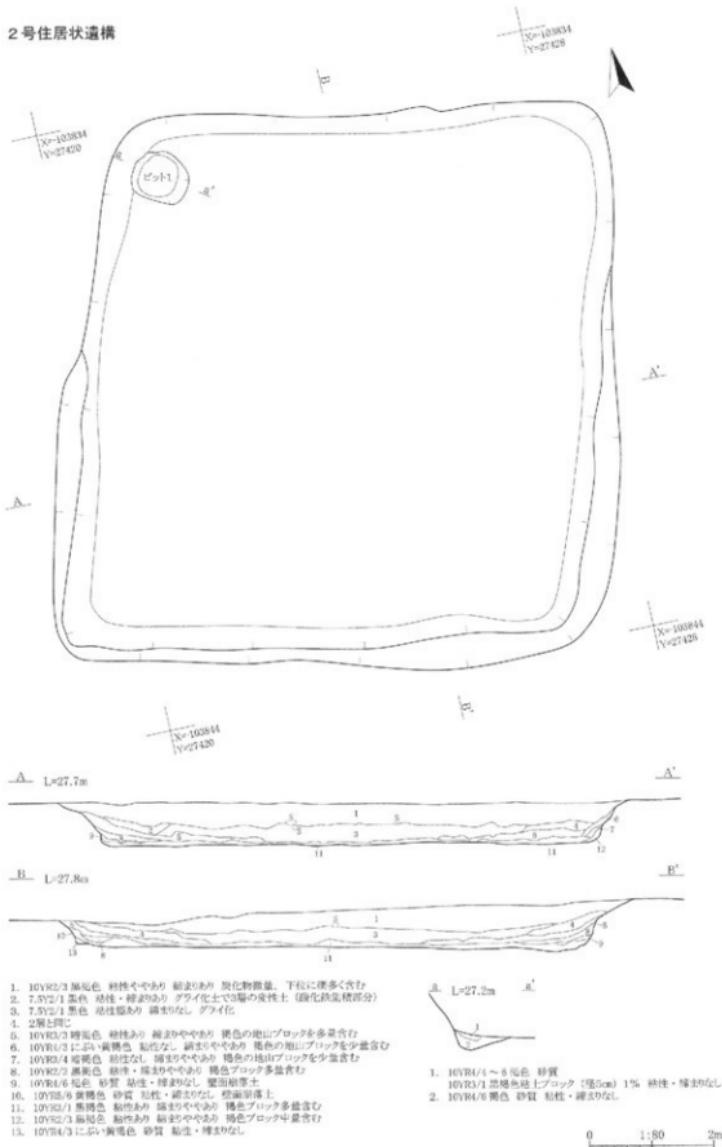
1号住居状遺構



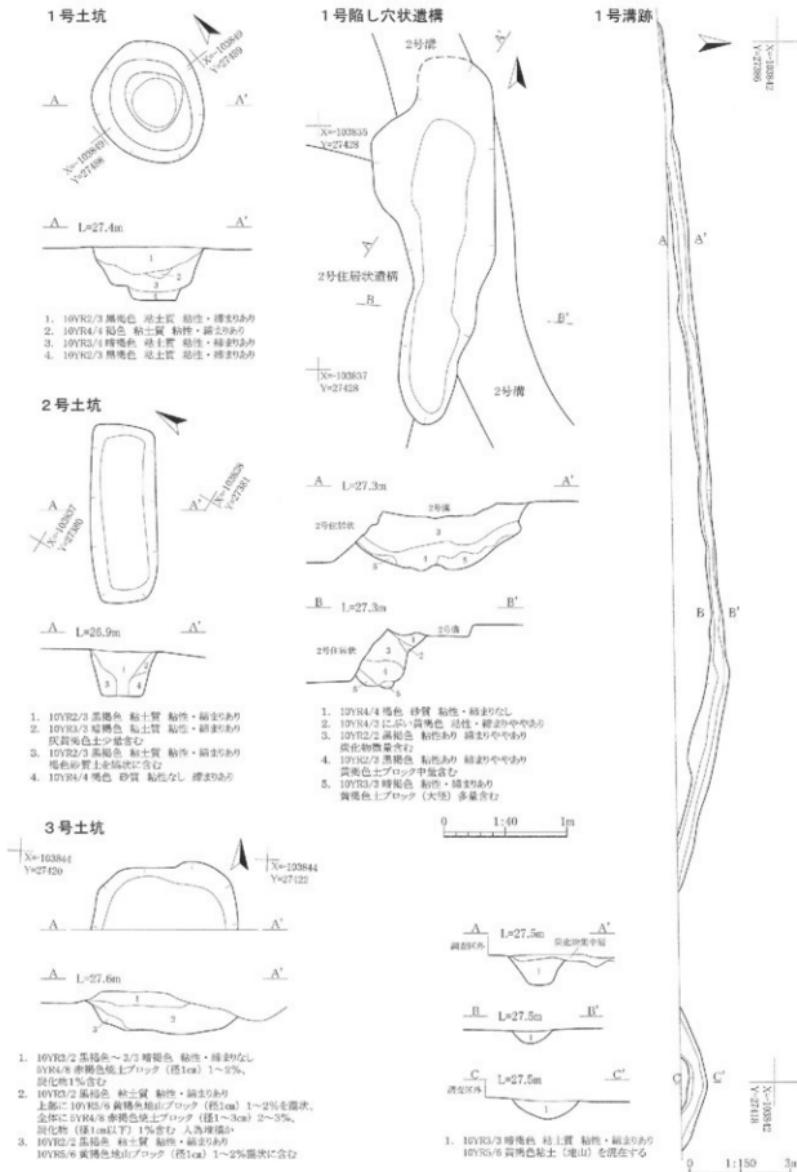
第3図 1号住居状遺構

(9) 八幡遺跡

2号住居状遺構

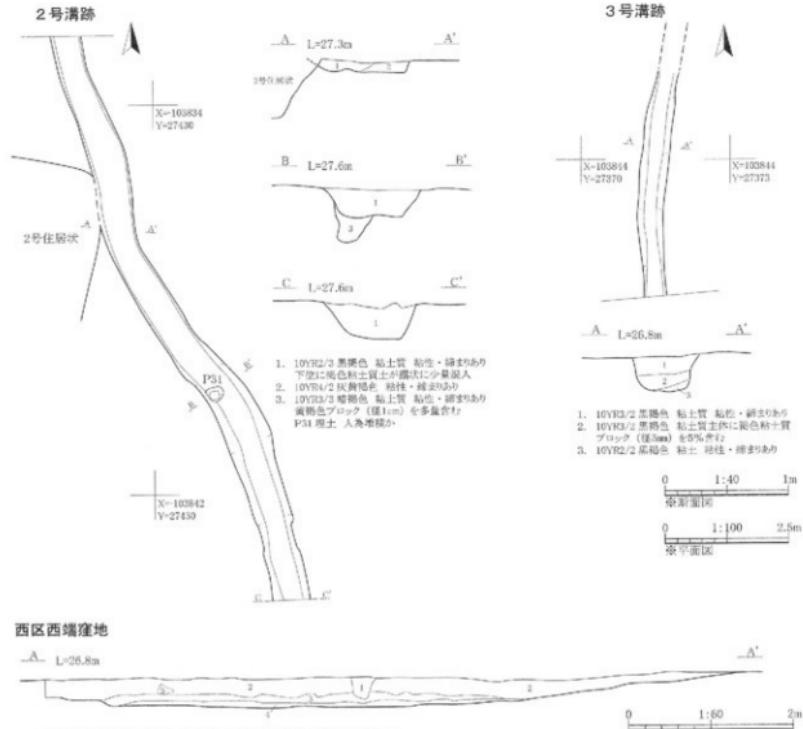


第4図 2号住居状遺構



第5図 1～3号土坑、1号陥し穴状遺構、1号溝跡

(9) 八幡遺跡



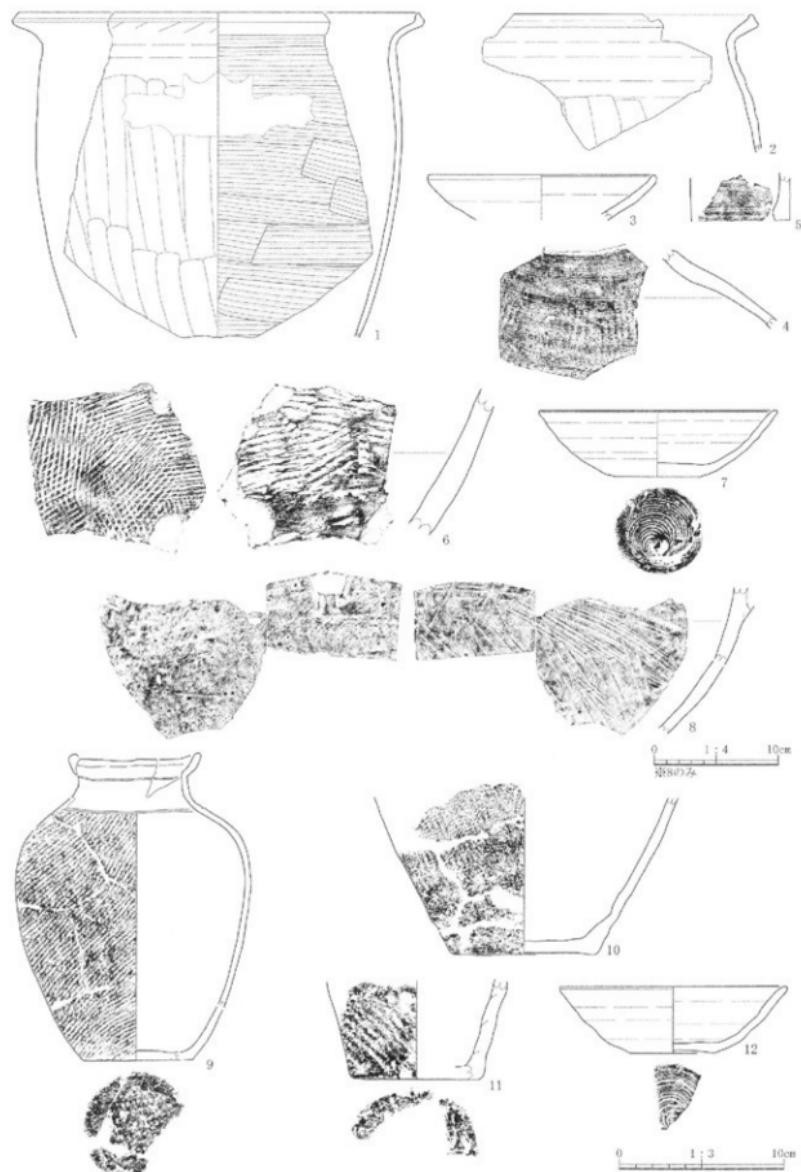
西区西端窪地



第6図 2・3号溝跡、西区西端窪地

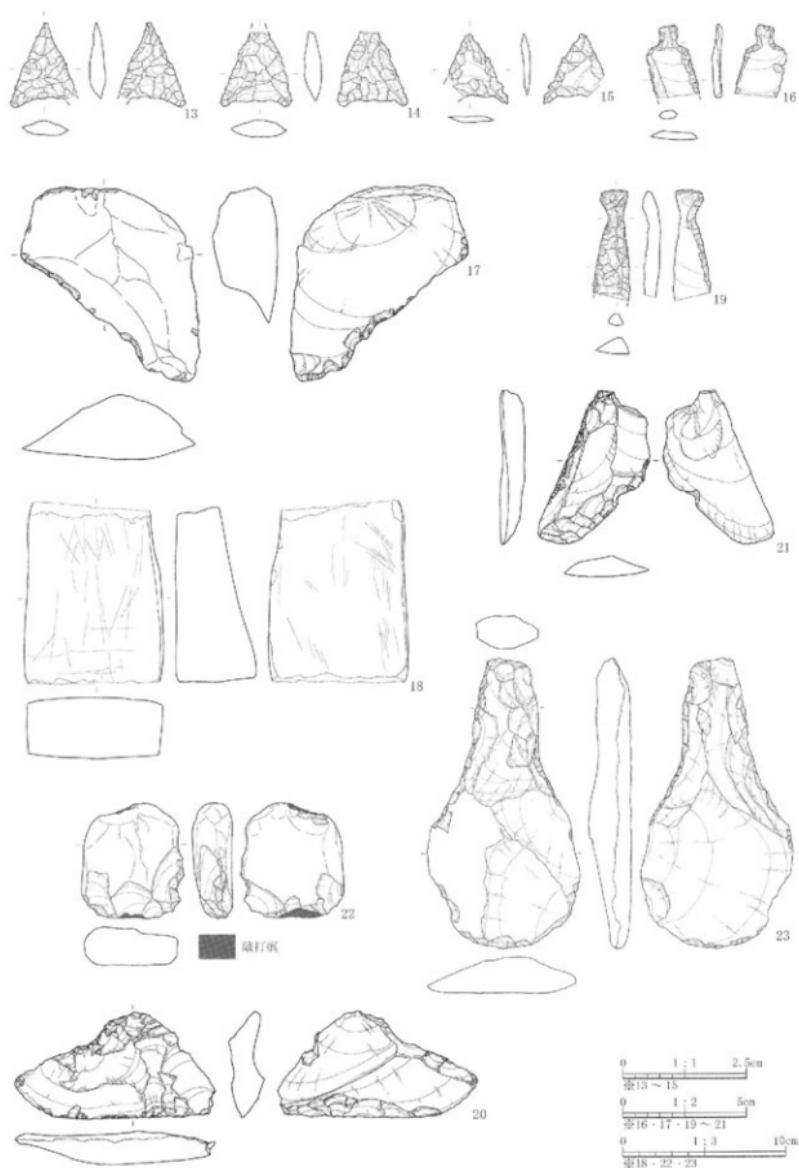
第1表 柱穴状ピット計測一覧表

井筒名	開口深底長(cm)	幅(cm)	底面径高(cm)	重耕名	開口付埋深(cm)	開口深(cm)	底面径高(cm)	重耕名	開口付埋深(cm)	開口深(cm)	底面径高(cm)
P1	35×31	22	26.990	P11	35×29	54	26.790	P11	35×27	31	26.790
P2	33×31	16	27.135	P12	33×27	21	27.165	P23	36×26	18	28.915
P3	33×31	33	26.950	P13	37×30	26	26.850	P24	31×27	31	26.754
P4	27×26	20	27.695	P14	29×28	35	26.790	P25	26×24	31	26.774
P5	29×27	18	27.100	P15	36×33	63	25.823	P26	29×26	29	28.876
P6	21×29	73	26.870	P16	29×27	26	26.576	P27	27×27	24	26.719
P7	29×28	32	26.960	P17	29×26	33	26.960	P28	31×30	37	26.715
P8	30×24	15	27.130	P18	29×27	34	26.905	P29	27×24	59	26.451
P9	35×31	41	26.885	P19	49×28	68	26.765	P30	38×32	59	26.378
P10	29×25	19	27.110	P20	32×29	62	26.631	P31	31×30	27	26.960

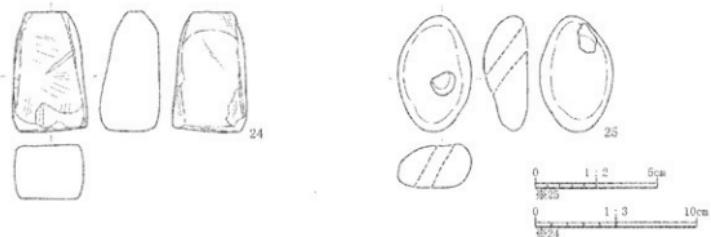


第7図 出土遺物（土器）

(9) 八幡遺跡



第8図 出土遺物(石器1)



第9図 出土遺物(石器2・石製品)

第2表 土器類解説表

No.	出土場所 遺物名	場所 位置(グリッド)	種類	形相	内面年(℃)		計測値(cm)			表面(例解)	内面側面	備考		
					上層部	底部	内面	底面	厚さ					
1	2号(室床)遺構	南内	土師器	北洋器	猪	18	0	(24.8)	-	(20.0)	猪・ケツ	猪・ハゲタ		
2	2号(住居)遺構	住土	土師器	章	13	0	-	-	(3.5)	-	猪・ケツ			
3	2号(住居)遺構	1層(高)	土師器	环	20	0	(13.8)	-	(2.8)					
4	2号(住居)遺構	住土上住	陶器	大環	6	0	-	-	(4.9)	-	猪・麻き貝			
5	2号(住居)遺構	下西	2層(灰)	陶器	猪	0	0	-	-	(3.2)				
6	1号(墓塚)	未定	陶器	大環	0	0	-	-	(3.0)	-	猪・麻き貝	猪・猪・馬頭		
7	2号(墓塚)	未定	陶器	不	35	100	(14.4)	(5.1)	4.1	-	猪・印輪(内切)			
8	2号(住居)遺構	上北	2層(灰)	陶器	大環	0	0	-	-	(12.6)	-	猪・麻き貝・把手	猪・ヘラナ?	
9	遺構外	八北内側付近	黑色土	陶文土器	猪	45	89	(6.0)	(3.0)	(8.9)	13.2	猪・虎・梵文・猪・丸文・基・夷代		
10	遺構外	2号(住居)付近	粘土・灰	陶文土器	猪	0	25	-	8.6	(9.7)	-	猪・丸文		
11	遺構外	宮又西側塚	土器灰中	陶文土器	猪	0	33	-	(8.0)	(6.0)	-	猪・丸文・猪・木葉模	新土に猪・夷代骨質圓片混入	
12	遺構外	2号(住居)付近	猪灰	陶器	猪	35	20	10	(13.7)	(6.1)	4.1	-	猪・山形(内切)	

第3表 石器・石製品觀察表

No.	出土場所 遺物名	場所 位置(グリッド)	種類	石器		計測値			大きさ	表面	備考	
				石材	磨耗	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)				
13	1号(住居)遺構	北東	粘土中～表	石器	質	奥羽山脈	1.7	1.3	0.3	0.4	有	田芝形
14	1号(住居)遺構	北東	粘土中～表	石器	質	奥羽山脈	0.30	1.4	0.4	0.6	有	9.5mm
15	1号(住居)遺構	北東	粘土	石器	質	奥羽山脈	1.4	0.2	0.2	0.2	有	田芝形
16	1号(住居)遺構	北東	粘土中～表	石器	質	奥羽山脈	0.30	1.8	0.4	1.8	有	細密
17	2号(住居)遺構	下西	2層(灰)	陶器	質	奥羽山脈	0.0	7.0	2.7	109.7	○	
18	1号(墓塚)	未定	地	陶器	質	奥羽山脈	(11.1)	8.4	4.6	767.5	有	古代化
19	遺構外	八北内側付近	2層(灰)	陶器	質	奥羽山脈	(1.5)	1.2	0.7	4.0	有	質密
20	遺構外	宮又西側塚	松木盒	羽根器	質	奥羽山脈	0.1	4.3	1.3	33.3		
21	遺構外	2号(住居)付近	西谷	羽根器	質	奥羽山脈	0.3	2.2	0.9	19.6		
22	遺構外	宮又西側塚	羽根器	質	奥羽山脈	7.0	6.2	2.4	167.9	○	質の硬膜由来あり	
23	遺構外	2号(住居)付近	打鍛石	赤色灰岩	石上山地	17.5	9.7	2.6	344.4	○		
24	遺構外	古文化跡	砂岩(凝灰岩)	奥羽山脈	7.4	4.3	3.6	186.0			古代化	
25	遺構外	古文化跡	白石	奥羽山脈	4.8	3.0	1.6	28.2	○	当石に質密性の差		

5まとめ

今回の調査から縄文時代後期前葉、平安時代中期の遺構・遺物が確認され、明後沢川の河岸に立地する縄文時代・平安時代の複合遺跡であることが確認された。後世の削平が著しい部分もあり、遺構の存否については現況の造成度合に因るところが大きいが、高位面が残存する部分であれば遺構の造存率も高いものと思われ、調査区北方及び明後沢川河畔まで遺跡が拡がる可能性も考えられる。

なお、八幡遺跡半成21年度調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

(9) 八幡遺跡



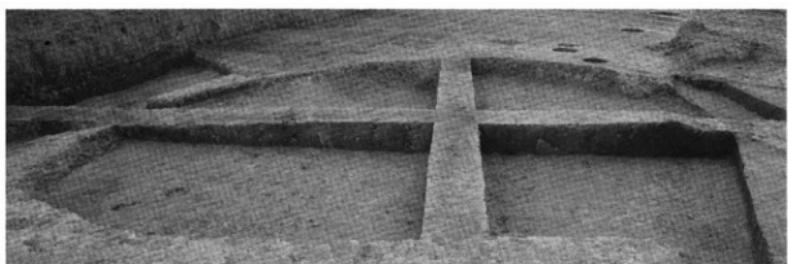
遺跡遠景（西から）



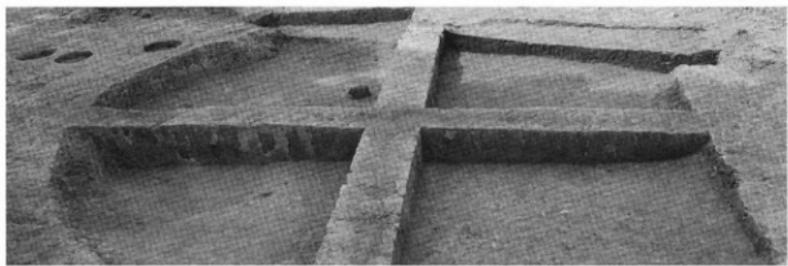
遺跡近景（直上から 下が北）



完掘（北東から）



断面（東から）



断面（南から）

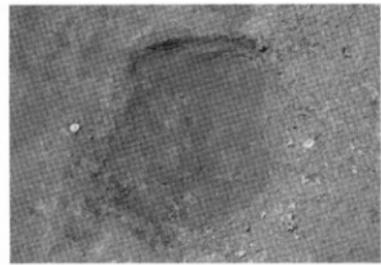
(9) 八幡遺跡



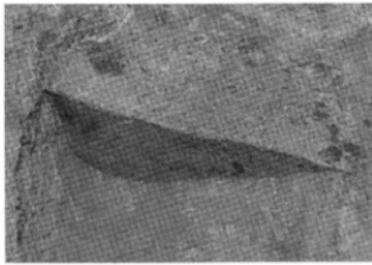
完掘（北東から）



断面（南から）

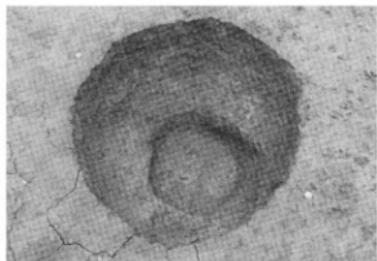


床面ピット1 完掘（北から）



床面ピット1 断面（南から）

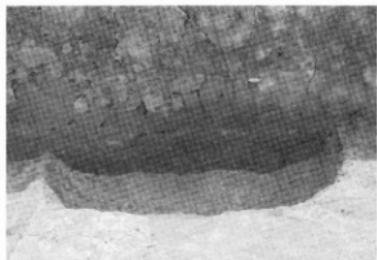
写真図版3 2号住居状遺構



1号土坑 完掘（南から）



2号土坑 完掘（北東から）



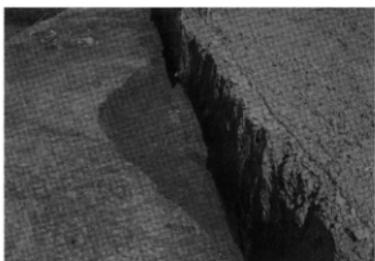
3号土坑 完掘（北から）



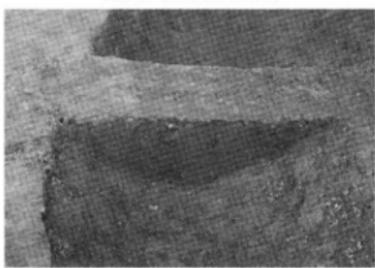
1号陥し穴状遺構 完掘（北から）



1号溝跡 西側完掘（東から）



1号溝跡 東側完掘（西から）



1号溝跡 断面 C-C'（西から）

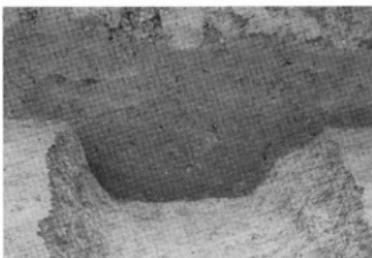
(9) 八幡遺跡



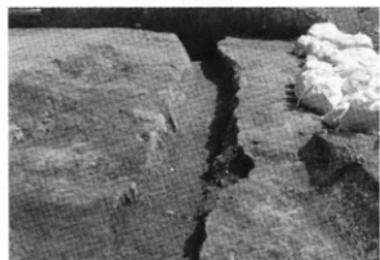
2号溝跡 完掘（北から）



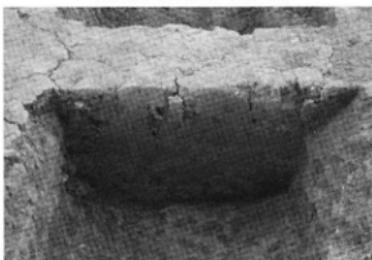
2号溝跡 断面 B-B'（南から）



2号溝跡 断面 C-C'（北から）



3号溝跡 完掘（北から）



3号溝跡 断面（南から）

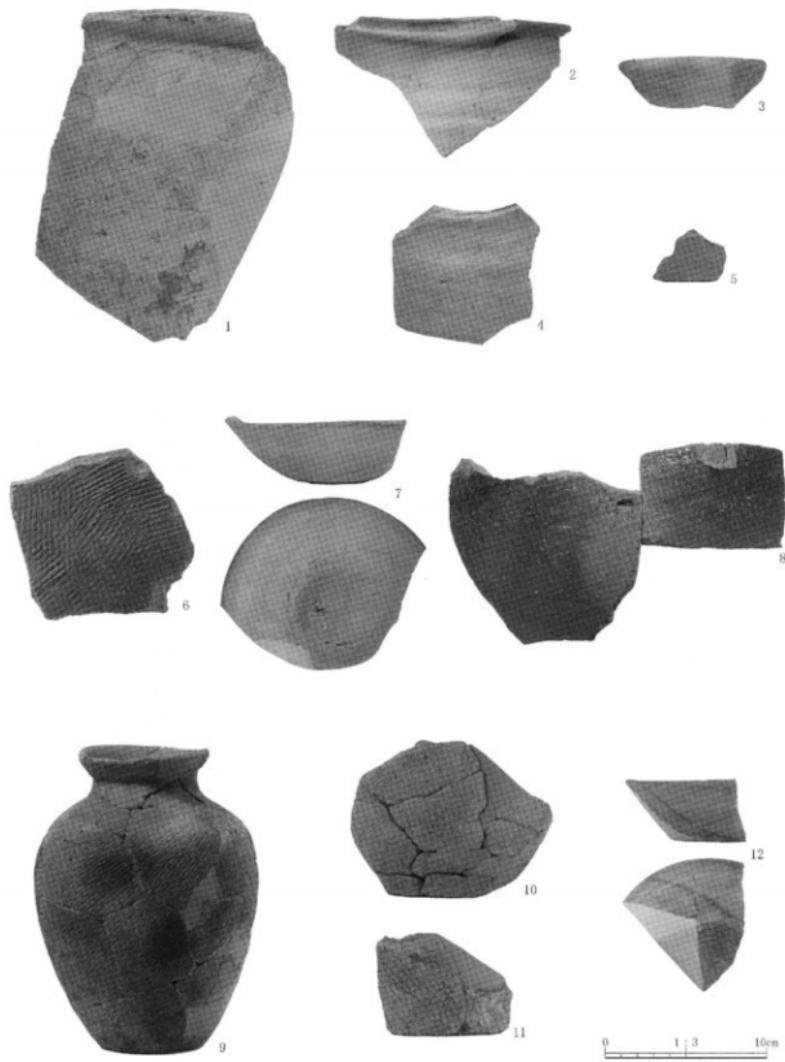


西区柱穴状ピット群 完掘（北から）



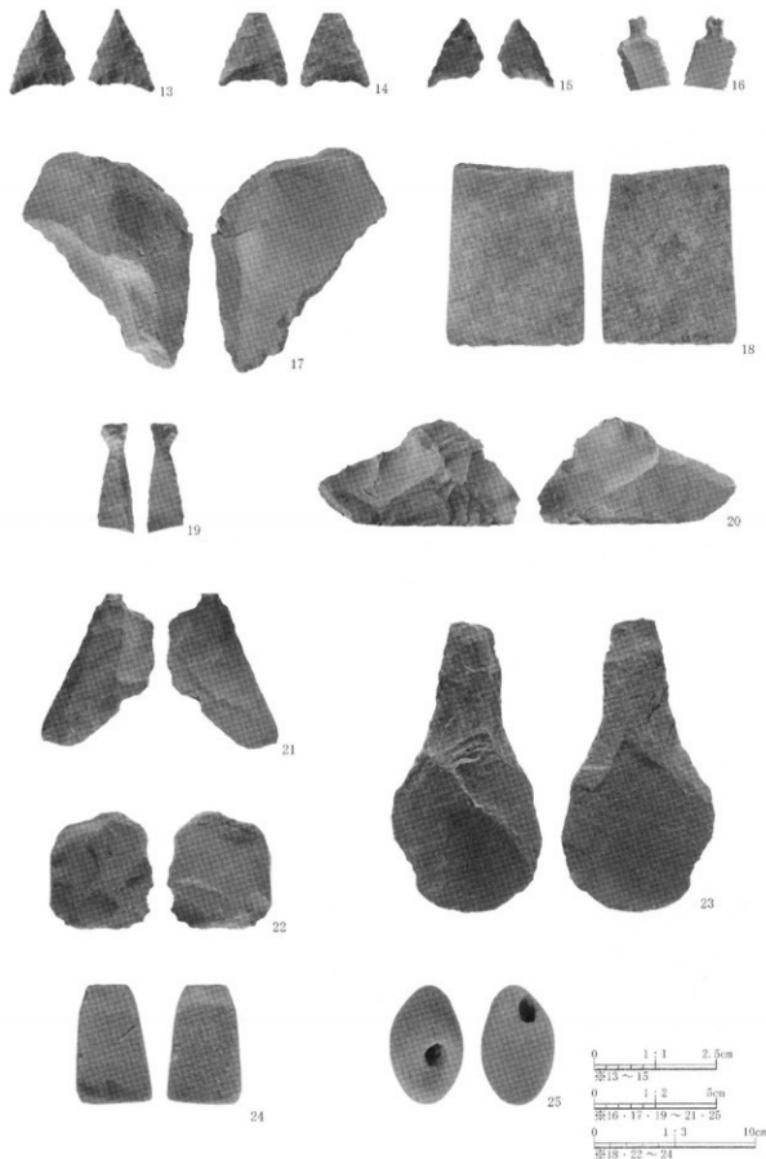
西区西端窪地（南から）

写真図版5 2・3号溝跡、柱穴状ピット群、西区西端窪地



写真図版 6 出土遺物（土器）

(9) 八幡遺跡



写真図版7 出土遺物（石器・石製品）

II 発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては下記のとおりである。

大コンテナ：42×32×30cm

中コンテナ：42×32×20cm

小コンテナ：42×32×10cm

(10) 滝ノ沢遺跡

所 在 地 北上市下鬼柳15地割31-3ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 一般国道4号北上拡幅
 発掘調査期間 平成21年4月9日～8月26日
 調査終了面積 1,252m²
 調査 担 当 者 金子昭彦・藤原大輔
 主要な時代 繩文・平安



遺跡の立地

遺跡は、北上市の南部、JR東北本線北上駅の南西約3kmにあり、和賀川によって形成された中位段丘上に立地している。段丘崖に沿って東西約1.2kmに広がり、今回の調査区は、その中央の北端段丘崖付近に相当する。標高は70～78m。これまでに10回を越える調査が行われ、縄文時代前期末～中期初頭を中心とした大規模集落跡、晚期の小規模集落跡、平安時代の集落跡であったことがわかっている。

調査の概要

調査区は、国道の西側と東側に分かれる（西、東区と仮称）（写真参照）。どちらからも縄文時代前期末～中期初頭の遺物が大量に出土し、特に西区は、遺物包含層が厚さ50cmを越える地点も多く、また住居跡の一部と考えられる焼土や柱穴状土坑が多数検出され、この時期の集落の中心であることがわかった。東区は、この遺物包含層の東限であるらしく、東端は、南北に伸びる雨裂が形成されている。ここから大量の砾石器（磨製石斧、石錘ほか）が出土しており、未成品も多い。

この雨裂は、平安時代にはほぼ埋没したらしいが、竪みの一部は後に中世の丸子館の堀として利用されていたようである。東区の検出遺構は、雨裂底に確認された、平安時代の円形土坑1基だけである。

平安時代の遺構は、この土坑の他には、西区で検出された堅穴住居跡1棟のみである。

調査で検出した遺構は、縄文時代炉跡1基、焼土29基、土坑2基、柱穴状土坑21個、整地層1箇所、平安時代堅穴住居跡（約1100年前）1棟、土坑1基である。

出土遺物は、縄文時代前期末～中期初頭土器大コンテナ228箱、石器中コンテナ298箱、土偶10点以上、块状耳飾り数点、石剣数点、勾玉1点、縄文時代晚期土器数点、平安時代土器（土師器・須恵器）小コンテナ2箱、鉄製品数点などである。



段丘崖に位置する調査範囲（南から）



厚い遺物包含層

(11) 芦田沢田Ⅳ遺跡

所 在 地 盛岡市玉山区芦田字沢田4-10ほか
 委 托 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 一般国道4号渋民バイパス
 発掘調査期間 平成21年4月9日～12月4日
 調査終了面積 1,250m²
 調査担当者 村上 拓・濱田 宏・杉沢昭太郎・北村忠昭
 村田 淳・佐藤あゆみ・首野 梢・高橋静歩
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡はIGRいわて銀河鉄道好摩駅の東方約1.0km、北上川左岸の河岸段丘上に立地する。北側を段丘崖、南側を北上川に下る沢に区切られ、調査区付近は西側に舌状に張り出す高台となっている。標高は214m前後。調査前は山林及び牧草地で、過去一部が畠地として利用されていた。調査対象は3,630m²で、うち今年度は1,250m²の調査を終了。未了区域は次年度継続して調査する予定である。

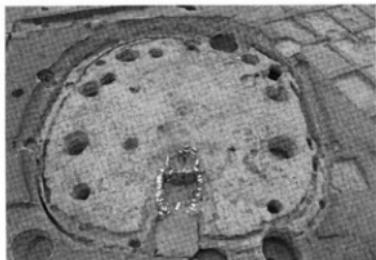
調査の概要

縄文時代早期及び中期末葉～後期前葉の竪穴住居32棟、配石造構2基、土坑32基、土器埋設遺構8基、炉跡32基、柱穴620個、平安時代住居1棟、近世の溝状遺構3条を検出、縄文土器（早期・中期末葉～後期前葉が主体）50箱、石器10箱、平安時代の土師器・須恵器數片などが出土した。

縄文時代早期の住居は調査区南部に集中して検出されたが、調査未了の北半部に分布が広がる可能性が高い。梢円形で底面中央にピット状に掘り込まれた炉をもつものと、不整形で炉を持たないものがある。土器には貝殻文のはか押型文・沈線文・表裏縄文等が含まれるなど時期幅を持っている。

中期末葉の住居は調査区西縁部に並列して分布する。このうち南西端部では他より圧抜けて規模の大きい住居が検出された。直径約11mの円形（角の丸い多角形）で、柱穴は直径、深さともに1m前後、西側の壁に接して全長3.3mの複式炉をもつ。柱穴・周溝の重複状況から改築・拡張を経ていることがわかった。床面直上には炭化材が多く出土。廃絶段階に焼失・倒壊したものとみられる。

このほか調査区中央からは、後期初頭～前葉のものとみられる環状の配石造構が検出された。直径約9mの円環をなす配石の南縁に、方型基調の張り出し部を持ち、いわゆる柄鏡形住居に類似する。次年度、下部構造を追加調査の予定。近接して長方形の配石に囲まれた6本柱遺構も検出されている。



大形竪穴住居（縄文時代中期末葉）



配石造構（縄文時代後期初頭～前葉）

(12) 川目A遺跡 第5次補足調査

所 在 地 盛岡市川目第5地割49-2ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 一般国道106号都南川目道路
 発掘調査期間 平成21年4月10日～10月15日
 調査終了面積 3,212m²
 調査担当者 高木 晃・須原 拓・八重畠ちか子
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

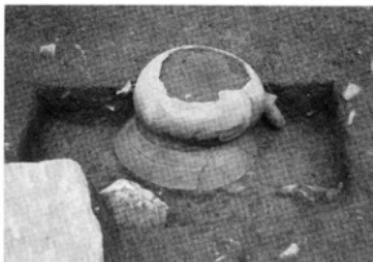
本遺跡はJR東北本線盛岡駅の南東約7.5kmに位置し、北上川の支流である築川左岸の河岸段丘上に立地する。標高は177m前後で、遺跡の南東側は小起伏山地の末端にあたる。今回の第5次調査は平成18年度より開始され、過去3年間の調査の末了区域436m²に加え、新規に2,776m²の追加調査区について実施した。このうち825m²は南側の山地急斜面にあたり確認用のトレンチ調査で終了とした。なお平坦面の東端区域には縄文時代の包含層下位に十和田中振火山灰の二次堆積層が広く分布する。

調査の概要

今年度新たに検出した遺構は縄文時代のものとして竪穴状遺構3基、配石遺構11基、土坑36基、土器埋設遺構5基、焼土遺構8基、中世～近世のものとして土坑墓3基である。他に縄文時代に形成された風倒木痕を11箇所確認した。なお、平成16年度から4年間の合計遺構数は竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構3基、配石遺構55基、土坑68基、土器埋設遺構16基、焼土遺構29基、炉跡1基、中世～近世の土坑墓6基、縄文時代の風倒木痕33箇所である。今年度調査区の平坦面には縄文時代後期主体の遺物包含層が広がるが、過年度までの調査区に比較し層厚は薄くなり平均0.5m程度となる。

遺物は土器が大コンテナ140箱、剥片石器類が約2200点、礫石器類が約4200点、土偶約70点、その他各種土製品、石製品、アスファルト塊、焼骨細片、炭化種実類、中世～近世の錢貨、鉄製品等がある。4年間の遺物総量は縄文土器732箱(10t強)、石器約60000点、土偶約700点、各種土製品・石製品約3000点ばかりで縄文時代後期初頭～中葉の遺物が主体である。

全体として見れば、築川と山地末端に挟まれた平坦面に形成された縄文時代後期の遺物包含層、配石遺構群からなる遺跡で、今回の第5次調査は南側半分を発掘したことになる。



埋設された注口土器



遺物包含層断面

(13) 向Ⅲ遺跡

所 在 地 遠野市綾織町下綾織第31地割20-1ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
発掘調査期間 平成21年7月13日～8月31日、
9月18日～10月31日
調査終了面積 8,750m²
調査担当者 晴山雅光・福島正和・北村忠昭
主要な時代 縄文・近世

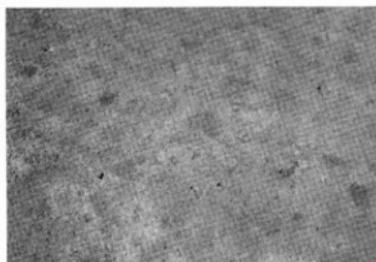


遺跡の立地

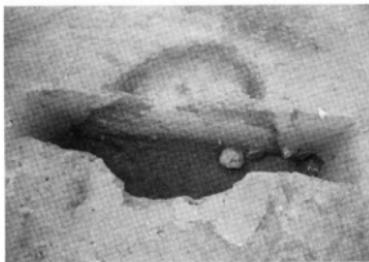
向Ⅲ遺跡は、JR釜石線岩手二日町駅の南約1.5kmに位置し、東から西へと流れる猿ヶ石川南岸の河岸段丘に立地する。調査前の状況は、南から北の傾斜方向に流れる水路を挟み、東西に2m幅の市道が通る水田地帯であった。今回調査区の東側には、本遺跡の同事業に関わる未調査部分を残している。

調査の概要

今回の調査は、9月1日～9月17日（落合2区I遺跡調査）の期間、休止を挟んで断続的に行われた。検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構15基、時期不明の焼土遺構4基、土坑25基、柱穴8個、溝1条である。また、掘立柱建物2棟（2×1間）が確認されている。出土した遺物は、縄文土器が小コンテナ1箱、剥片石器が64点、礫石器4点、陶磁器片が4点、寛永通宝1点である。



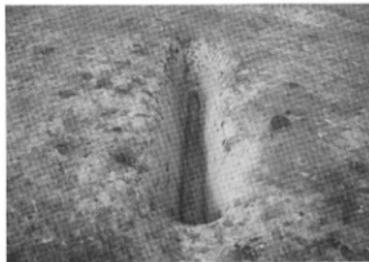
焼土遺構



フラスコ状土坑



掘立柱建物



陥し穴状遺構

(14) 新田 II 遺跡

所 在 地 遠野市綾織町下綾織第5地割49-2ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事 業 名 東北横断自動車道釜石秋田線新直轄事業
 発掘調査期間 平成21年4月10日～8月31日
 調査終了面積 2,800m²
 調査担当者 晴山雅光・福島正和・丸山浩治・北田 熊
 主要な時代 縄文・平安

遺跡の立地

新田 II 遺跡は、JR釜石線岩手二日町駅の南東約1.5kmに位置し、猿ヶ石川南岸の河岸段丘上に立地する。調査区は国指定史跡綾織新田遺跡の北東に近接し、綾織新田遺跡よりも低い場所である。調査区の標高は約260mであり、調査前の現況は北半が草地、南半が水田、北東端部が山林として利用されていた。

調査の概要

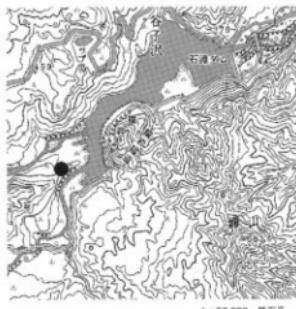
今回の調査では、縄文時代中期の竪穴住居26棟、掘立柱建物4棟、柱穴状土坑約70個、墓壙と考えられる土坑21基等を検出した。また、調査区南側では平安時代の土師器を伴う土坑6基を検出した。遺物は縄文土器が大コンテナ16箱、縄文時代の石器・土製品が合計中コンテナ8箱、土師器・須恵器が中コンテナ1箱出土した。遺跡は縄文時代中期の集落の中心城と考えられ、弧状に竪穴住居群が配置されている。また、この弧状に連なる竪穴住居群の内区では、掘立柱建物や墓壙群が検出されている。墓壙群も竪穴住居同様におおむね弧状に配置されており、当該期の集落形態を読み解く上で貴重な調査成果である。



航空写真（上が北）

(15) 下嵐江Ⅰ・Ⅱ遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字東下嵐江地内
委 託 者 国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
事 業 名 胆沢ダム建設事業
発掘調査期間 平成21年4月10日～10月30日
調査終了面積 5,690nf
調査担当者 村木 敬・濱田 宏・藤田 祐
主要な時代 旧石器時代・近世



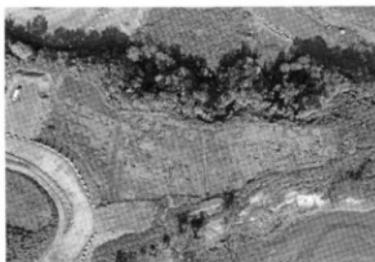
遺跡の立地

遺跡は石淵ダムの南西約2km、胆沢川と前川の合流地点に位置し、北東に細長く突き出た舌状地形の緩斜面上、標高345m前後の河岸段丘に立地する。段丘の内陸部側が下嵐江Ⅰ遺跡、先端部側が下嵐江Ⅱ遺跡と両遺跡は隣接している。

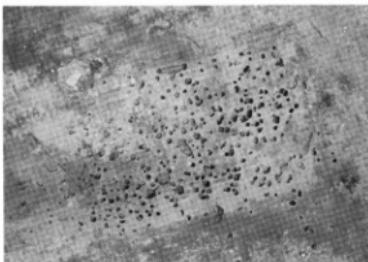
調査の概要

調査は昨年度より継続して行われており、今年度は主に下嵐江Ⅱ遺跡を調査している。旧石器時代と近世の遺構や遺物を検出したが、それらは段丘の尾根部を中心にはほぼ全域に及ぶ。

今回の調査では後期旧石器時代の石器集中区10箇所、近世の掘立柱建物跡20棟、土坑22基、溝跡3条、柱穴745個を検出した。出土遺物は旧石器7,859点、縄文土器20点、近世陶磁器大コンテナ4.5箱、錢貨55枚、鉄製品40点などである。



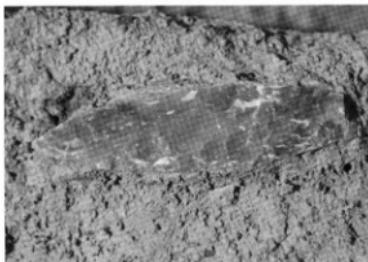
調査区全貌



掘立柱建物跡



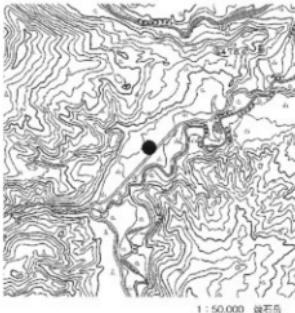
石器集中区



石器出土状況

おおだいら の
(16) 大平野II遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字大平野1-1ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
事 業 名 胆沢ダム建設事業
発掘調査期間 平成21年6月1日～6月30日
調査終了面積 600m²
調査担当者 濱田 宏・藤田 祐
主要な時代 繩文



遺跡の立地

遺跡は、奥州市胆沢総合支所の南南西約19km、石淵ダムの南西4km付近にあって、前川によって形成された河岸段丘上に立地する。調査区は南東向きの緩斜面となっており、その標高は358m～371mほどである。遺跡周辺は、かつてはレジャー施設などに利用された土地であったが、現在ではほぼ全域が原野化し、広大な荒地となっている。

調査の概要

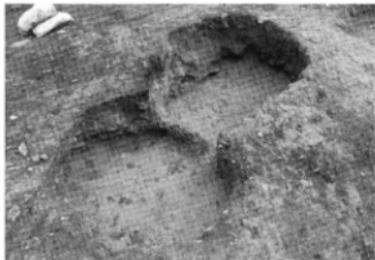
今年度は、昨年6月中旬に発生した「岩手・宮城内陸地震」の影響もあって未了となっていた600m²を対象に実施した。

調査では、縄文時代中期から後期に属すると思われる土坑5基、時期不明の柱穴28個、集石1箇所が確認され、その精査とともに沢の氾濫により形成された遺物包含層5箇所の掘削を行った。遺物は、縄文時代中期後葉から後期前葉を主体として、前期前葉、晚期後葉などの土器が大コンテナ1.5箱、石器類は中コンテナ1箱出土した。

今回の調査によって、遺跡を二分するように流れる小寒沢右岸の縄文集落の様相がさらに明らかとなった。ここには、縄文時代中期後葉から後期前葉の竪穴住居跡5棟のほか、土坑は30基あまりが検出され、特にその中に礫が環状に配される住居跡や墓壙に転用された土坑が認められていることは、何か祭祀的な様相も感じとられる。一方、左岸にはこれまで右岸では見つかっていない後期後葉以降の遺構・遺物が存在していることから、小寒沢両岸を主体とした時期別の占地についても本報告に向け検討を深めたいと思う。



小寒沢沿岸部の様子



重複する土坑

(17) 金浜 I 遺跡

所 在 地 宮古市大字金浜第2地割字古館16ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成21年4月14日～5月1日
 調査終了面積 101m²
 調査担当者 村田 淳
 主要な時代 繩文・平安



遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線津軽石駅から約2km北方、宮古湾の最奥部に位置している。西側の丘陵から派生する尾根とそれに付随する谷部（沢跡）からなり、尾根を境界として北側が金浜I遺跡、南側が金浜II遺跡である。平成20年度にも当センターで発掘調査を実施しており、今回は前年度未了部分の調査である。今年度の調査区は遺跡範囲の西側、高圧電線用鉄塔が建てられていた部分及びその周辺であり、谷状地形の中央付近に位置する。検出面標高は20m前後である。

調査の概要

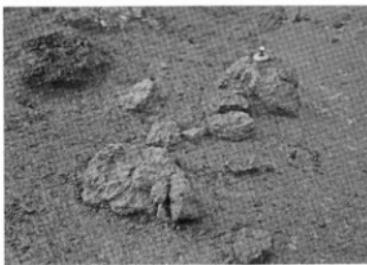
前年度の試掘により竪穴住居の存在を確認していたため、今年度の調査はこの住居跡の精査を中心に行った。竪穴住居は一辺約4mの方形で、石組のカマドを有する平安時代に属するものである。住居内からは比較的多量の遺物が出土しているが、特にカマド周辺から製塙土器や土製支脚の破片がまとまって出土していることが特徴である。隣接する金浜II遺跡でも竪穴住居内から土製支脚の破片が出土しており、これらの事例は本遺跡内及びその周辺で平安時代に土器製塙が行われていたことを示す資料といえる。

この他に検出した遺構としては、繩文時代のフ拉斯コピット1基、古代の焼土1基、繩文～古代の柱穴16個がある。遺物はほとんどが竪穴住居からの出土で、土師器・製塙土器・繩文土器が小コンテナ1箱、土製支脚・羽口小コンテナ1箱、その他礫石器、鉄滓等が少量出土している。

今年度調査区の北側で過去に宮古市教育委員会が実施した発掘調査では、古代の竪穴住居を中心とした集落の存在が確認されている。検出した竪穴住居がその集落の南端にあたる沢跡の縁に位置していること、これより南側では尾根の反対側斜面に位置する金浜II遺跡まで古代の遺構が存在しないことから、今回の調査では本遺跡における古代集落の南限を明らかにすることができたと思われる。



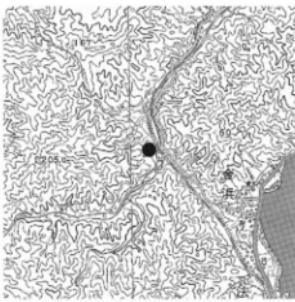
平安時代の竪穴住居



土製支脚出土状況

(18) 八木沢野来遺跡 第3次調査

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込121-2ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成21年4月8日～6月30日
 調査対象面積 1,770m²
 調査担当者 丸山直美・村田 淳・佐々木智久
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

本遺跡はJR山田線磯薙駅の南西約3.9kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川の西岸に形成された小起伏山地の先端部に立地する。標高は43～46mを測る。

調査の概要

調査は平成20年度からの継続である。検出された遺構は、縄文時代前期の竪穴住居2棟、焼上遺構21基、土坑7基、埋設上器1基、集石遺構1箇所、柱穴状小土坑39個、遺物包含層437m²、古代以降の可能性のある鍛冶炉1基である。遺物は縄文時代前期の土器を主体として、石器、陶磁器、鉄製品、鉄滓などが総量で大コンテナ35箱分出土した。調査の結果、調査区東半部を中心として縄文時代前期を主体とする集落跡、および遺物包含層が形成されていることが判明した。



調査区全景（北から）



縄文時代の竪穴住居(南東から)



遺物包含層掘削風景（南から）



出土した縄文土器

(19) 八木沢駒込Ⅰ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割駒込38-1ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業

発掘調査期間 平成21年4月8日～6月30日、
8月3日～8月12日

調査終了面積 2,535m²

調査担当者 杉沢昭太郎・菅野 桢

主要な時代 縄文・中世・近世



遺跡の立地

本遺跡はJR山田線磯駒駅の南西約3.6kmに位置し、宮古湾に向かい北流する八木沢川の西岸に立地している。調査地点は遺跡の南端部にあたる山地の斜面部と、そこから広がる緩斜面～平坦面からなる。標高は20～50mを測る。

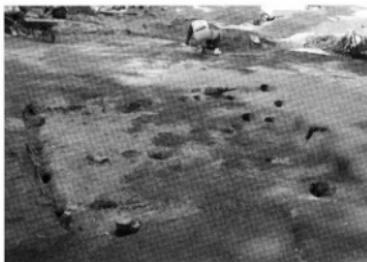
調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の住居跡2棟・焼土23基・陥し穴状遺構6基・集石1基、古代の炭窯跡1基、中世の竪穴建物跡2棟、近世の掘立柱建物跡4棟・溝跡2条・墓壙6基、時期不明土坑22基である。遺物は縄文上器が中コンテナ6箱、石器類が中コンテナ1箱、陶磁器・金属製品などが小コンテナ1箱出土している。

今年度調査区である遺跡南端部の斜面部並びに緩斜面～平坦面は、前年度の調査区並びに隣接する八木沢駒込Ⅱ遺跡とは小規模な沢によって隔てられており、この部分だけで独立した遺跡範囲として捉えることができる。上記した遺構・遺物が得られたことにより、縄文時代中期後半には小規模な集落であったことが明らかになった。縄文時代早期・前期・弥生時代の遺物も出土していることから、この時期も集落として利用されていたようである。陥し穴状遺構も点在しており、集落が営まれていなかった時期には狩猟場となっていたことが分かった。古代には斜面部に炭焼窯が築かれていた。中世後半にも竪穴建物跡を有する小規模な集落があり、これが近世の建物跡へ時期的に連続する可能性がある。建物跡には3段階の変遷があるほか、屋敷墓も6基検出している。



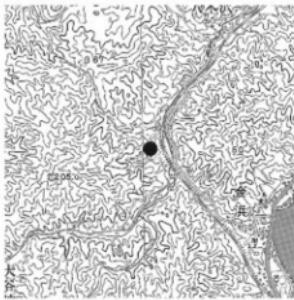
縄文時代中期住居の炉跡



中世後半の竪穴建物跡

(20) 八木沢駒込Ⅱ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第8地割字駒込75-1ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事 業 名 三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業
 発掘調査期間 平成20年5月25日～7月3日
 調査終了面積 3,600m²
 調査担当者 杉沢昭太郎・菅野 梢
 主要な時代 繩文・古代



遺跡の立地

本遺跡は、JR山田線磯駒駅の南西約3.8kmに位置しており、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地する。今回の調査区は遺跡中央部から西部にあたり、地形は尾根部と沢部、沢を下った所にある平坦部からなる。標高は33～65mで現況は山林であった。

調査の概要

今回の調査では、遺跡の中央から東側を調査したことになる。遺跡内では最も標高の高い尾根の頂部を調査し、そこから土坑を1基検出した。遺物は出土しなかったが、昨年度に出土した古代の和鏡や飾金具との関係が考えられる。東側の平坦面には遺構ではなく、八木沢川の旧河道であったようである。遺跡北部は一昨年の調査により小規模な縄文時代中期の集落、狩猟の場として利用されていたことが判明しているが、縄文時代の遺構は今年度調査区までは広がらなかった。

出土遺物は縄文土器・石器類が小コンテナ0.5箱である。



遺跡遠景

(21) 細谷地遺跡 第24次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原27-3ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成21年5月18日～6月19日
 調査終了面積 1,224m²
 調査担当者 羽柴直人・本多準一郎・田中美穂
 主要な時代 古代

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、半石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の南西隅部分に相当し、北側調査区と南側調査区の2地点に分かれる。両調査区は約25m離れており、両地点ともに標高は約122m、調査前は宅地として使用されていた。

調査の概要

北側調査区では平安時代前半の竪穴住居跡1棟、平安時代前半には埋没が完了していた沢跡1条が検出された。竪穴住居跡は一辺約2.3mの小規模な建物で、カマドは北壁に設置されている。住居に伴う遺物はロクロ不使用の土師器長胴甕、須恵器壺などがカマド周辺から出土している。沢跡は第14次調査で検出された沢跡に連続するものである。出土遺物、遺構の切り合いはなかったが、第14次調査等の知見から8世紀以前には埋没したものと判断されている。

南側調査区では果樹の植栽痕と推測される穴が等間隔で連続して検出されたが、出土遺物から20世紀中葉以降の所産と判断された。このように本調査次の遺構密度は非常に小さいことが明らかになった。これまでの遺跡全体の遺構配置の状況から、本調査区は平安時代の集落の南端部に相当すると予測されていたが、その予想に合致する調査結果であった。



竪穴住居跡（RA 180）



北側調査区全景



南側調査区全景

(22) 細谷地遺跡 第25次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原9-5ほか
 委 託 者 独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
 事 業 名 盛岡市新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成21年6月15日～9月11日
 調査終了面積 946m²
 調査担当者 羽柴直人・田中美穂
 主要な時代 古代

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、季石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の中央やや北寄りに相当する。標高は約122m、調査前は道路と自動車整備工場敷地として使用されていた。

調査の概要

検出遺構は平安時代前半の竪穴住居跡7棟（内1棟は20次調査で一部調査）、上坑2基、中世以降の掘立柱建物跡1棟、馬の埋葬墓1基が検出された。また、今次調査範囲内において、細谷地遺跡の北東部に接する向中野館遺跡を囲む堀跡の一部が検出されたが、この堀については、便宜的に向中野館遺跡に含まれるものとして扱い、ここでは検出遺構にカウントしないこととする。出土遺物は土師器、須恵器類が大コンテナ5箱、近世陶磁器類が大コンテナ1箱出土している。この他に埋葬されていた馬骨が一頭分出土している。骨の残存状況は不良である。

竪穴住居跡はいずれも出土遺物から9世紀以降に属するものである。道路敷や水道管、排水溝等で著しく搅乱を受けている住居が多く、カマド位置が不明のものもある。カマド位置が明らかなものは、北壁が1棟、西壁が2棟、東壁が1棟である。調査区最南端で検出された竪穴住居跡R A181は1辺8.1mの大規模な建物である。掘立柱建物跡R B025は竪穴住居R A185と重複しており、R B025が新しい。3間×5間で西側に庇が付く。形態等から中世以降の建物と判断されるが、確実に共伴する陶磁器がなく詳細な時期は不明である。馬の埋葬墓は時期不詳であるが、近世以降の所産と推測される。また、近世陶磁器が調査区北西隅の搅乱部分からまとまって出土した。この搅乱は用水路改良のヒューム管設置の際のもので、近世陶磁器は近世の用水路に起因する出土状況と推測される。



竪穴住居跡 (R A181)



掘立柱建物跡 (R B025)

(23) 向中野館遺跡 第12次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割133-2ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成21年6月16日～9月11日
 調査終了面積 633m²
 調査担当者 羽柴直人・田中美穂
 主要な時代 古代・中世

遺跡の立地

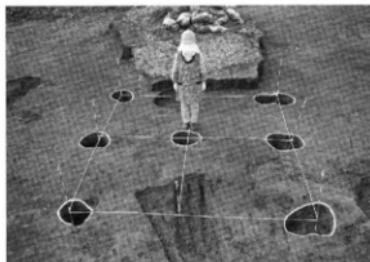
遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.2kmに位置し、宝石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の南北隅部分に相当する。標高は約122m、調査前は道路、神社境内として使用されていた。

調査の概要

古代の遺構は竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡1棟、土坑2基が検出された。中世以降と推測される遺構は堀1条、掘立柱建物跡2棟、溝3条が検出された。また、近代以降と推測される豚の頭骨を埋納した土坑が1基検出されている。出土遺物は土師器、須恵器が大コンテナ5箱、近世陶磁器中コンテナ1箱、永楽通寶（模鋳錢）4枚が重なって出土した。古代の竪穴住居のうち2棟が8世紀以前、5棟は9世紀以降に属するものである。古代の掘立柱建物（R B016）は2×2間の総柱建物である。形態から古代の建物と判断した。堀跡は第10次調査等で検出された堀に連続する同一のもの（RG 012）で、向中野館を囲む大規模な堀である。今次の調査範囲では堀の南辺が検出され、これにより向中野館の南北の内法幅が約50mであることが明らかになった。また、従前の調査では堀の西辺と北辺の内側に土塁の存在が確認されていたが、今次検出の南辺では土塁の痕跡は確認できなかった。調査範囲は道路範囲であり、その工事の際に完全に土塁が破壊された可能性も高い。中世以降と推測される2棟の掘立柱建物は堀内部に位置し、向中野館に伴う建物の可能性が考えられる。また、永楽通寶の模鋳錢は向中野館の年代を示す資料であるが、この他に中世に属する陶磁器類は1点も出土していない。このような中世遺物の寡少さが、向中野館の存続年代推定を困難にしている。



竪穴住居跡（R A037）



掘立柱建物跡（R B016）

むかいかの だく
(24) 向中野館遺跡 第13次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割133-2ほか
委 託 者 独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成21年6月16日～9月11日
調査終了面積 615m²
調査担当者 羽柴直人・田中美穂
主要な時代 古代・中世



遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.2kmに位置し、半石川右岸に形成された河岸段丘に立地している。調査区は遺跡範囲の南西端部に相当する。標高は約122m、調査前は道路として使用されていた。

調査の概要

検出構造は古代の竪穴住居跡3棟、時期不明の土坑1基、中世以降の堀1条、近世以降の溝1条、古代には埋没が完了していた低地1箇所が検出された。出土遺物は土師器、須恵器が中コンテナ1箱、近世陶磁器類が小コンテナ1箱出土した。

古代の竪穴住居は3棟いずれも9世紀以降のもので、カマド方位は2棟が西側、1棟が不明である。堀は向中野館を囲む大規模なもので、第10次調査や、今年度調査がおこなわれた第12次調査で検出された堀（R G012）と同一のものである。本調査次では南西隅のコーナー部分が検出された。向中野館の堀の南辺は近代に到るまで農業用水路として、堀のラインを踏襲して使用しており、今次調査区と東側に連続する12次調査区の堀埋土からは近世陶磁器や近代以降の廃棄物が多数出土している。堀の南西コーナー部分の西側に溝R G019が連結する形で位置しており、西側から延びる用水路と堀跡跡の用水路部分を連結する溝と判断される。低地は隣接する12次調査区で終息しており、沢ではなく低地とした。低地の堆積土最上部に十和田a降下火山灰が散布しており、平安時代前半にはすでに埋没していたと理解される状況であった。古代の竪穴住居R A042は低地の堆積土を掘り込んで構築しており、埋没時期を知る手がかりになる。低地堆積土からの出土遺物はなかった。



堀跡（R G012）



竪穴住居跡（R A042）

(25) 矢盛遺跡 第23次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原49-3ほか

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課

事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査期間 平成21年7月1日～7月30日、

10月16日～11月26日

調査終了面積 5,720m²

調査担当者 高木 晃・須原 拓・北田 純・小林弘卓

主要な時代 繩文・近世



遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西に約1.6kmに位置し、零石川によって形成された沖積段丘上に位置する。標高は123m～124mで、隣接する第18次調査区（平成20年度）よりも約1m高い。

調査の概要

検出遺構は、繩文時代に帰属すると思われる陥し穴4基、近世に帰属する掘立柱建物跡15棟、土坑34基、墓坑16基、井戸5基、溝9条、柱穴状土坑375基である。

繩文時代の陥し穴は調査区北端と、飛地の南側調査区からみつかった。遺物を伴わず、具体的な時期は不明であるが、遺構の形態から繩文時代のものと判断した。陥し穴は過去の調査でもみつかっており、それらに統く一連の遺構と思われる。

近世の遺構は調査区北側に集中する。特に調査区北東側では5時期にわたると推定される掘立柱建物群が重複しながら分布する。また墓坑や井戸は掘立柱建物跡を避けた場所に位置し、掘立柱建物跡群と墓、井戸は一連の遺構群と想定する。近世墓は重複しており、形態が定かでないものも見受けられたが、人骨、副葬品はほぼ良好な状態で出土した。

出土遺物は掘立柱建物跡の柱穴内から陶磁器片数点と銭貨（古寛永）が、また近世墓坑の副葬品として陶磁器類11点、鏡（柄鏡・ガラス製）7面、銭貨（古・新寛永、洪武通宝）48枚、袋状製品（布か皮製）5点、簪1点、釘2点、煙管吸い口1点。他に井戸の底から木枠が出土した。遺構・遺物の時期は、出土した陶磁器片から17世紀後半～18世紀中頃に比定されるものと思われる。



掘立柱建物跡群



井戸

(26) 矢盛遺跡 第24次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原49-3ほか
 委 託 者 独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成21年7月1日～7月30日、
 10月16日～11月26日
 調査終了面積 425m²
 調査担当者 高木 晃・須原 拓・北田 熊・小林弘卓
 主要な時代 近世



遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約3km、仙北町駅から南西に約1.6kmに位置し、零石川によって形成された沖積段丘上に位置する。標高は123m～124mで、隣接する第18次調査区（平成20年度）よりも約1m高い。

調査の概要

検出遺構は、近世に帰属する掘立柱建物跡6棟、土坑5基、墓坑8基、溝3条、焼土遺構2基、柱穴状土坑43基である。隣接する第23次調査区と同様の性格の遺構群であり、両方の調査区をまたいでいる遺構も多い。掘立柱建物跡群は重複関係と各建物の長軸方向のあり方から、5時期の変遷がたどれるものと思われる。また掘立柱建物跡群の北側に位置する近世墓は重複が激しいものの、人骨と副葬品の残存状態は、ほぼ良好であった。

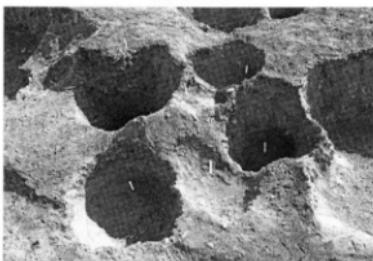
出土遺物は主に近世墓からの副葬品であり、錢貨33枚、陶磁器8点、鏡（柄鏡、ガラス製）4面、簪1点、袋状製品（布か皮製）3点がみつかっている。遺物の時期は出土した陶磁器から17世紀後半～18世紀中頃に比定される。遺構もその頃に帰属するものと思われる。



調査区全景



掘立柱建物跡



近世墓

(27) 台太郎遺跡 第66次調査

所 在 地 盛岡市向中野字向中野40-25ほか

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課

事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査期間 平成21年6月1日～11月27日

調査終了面積 11,911m²

調査担当者 羽柴直人・本多準一郎・中村絵美・田中美徳

主要な時代 古代・中世～近世



遺跡の立地

台太郎遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約900mに位置する。零石川によって形成された河岸段丘上に立地し、標高は120m程度である。台太郎遺跡は昭和60年から調査が開始され、今回はその66次目にあたり、調査区は遺跡範囲の南西部に位置している。

調査の概要

検出された遺構は、奈良時代以前の堅穴住居跡5棟、中世から近世の掘立柱建物跡72棟・堅穴建物3棟・カマド状遺構7棟・柱穴約2300個、古代以降の土坑84基（うち墓壙2基）・溝跡51条である。堅穴住居跡はお互いある程度距離を持って点在するが、掘立柱建物跡は調査区内でも比較的標高の高い場所に複数軒重複して建てられており、その集中箇所は3つに分かれている。遺物は中コンテナで5箱、大半が奈良時代以前の土器で、これ以外に中世～近世の陶磁器・銭貨・時期不明の刀子などが出土している。



調査区全景

いきかきいかわ
(28) 飯岡才川遺跡 第16次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割39-3ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成21年9月1日～12月4日
 調査終了面積 5,921m²
 調査担当者 金子昭彦・藤原大輔
 主要な時代 繩文・平安

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南に約2kmにあり、零石川によって形成された沖積段丘上および周囲の旧河道に立地する。遺跡の南を画する才川は、縄文時代には幅数十mもあったようで、西から東に向かって流れ、遺跡は、才川に沿って東西方向に600m以上延びる。推定面積は約62,000m²で、既に推定範囲の2/3以上を調査している。標高は120～124mである。

調査の概要

今回の調査区は、二か所に分かれるが、ともに遺跡の南端に位置する。南限東端に相当する東側調査区(1,369m²)は、予想通り平安時代(約1,100年前)の村の中心の一つで、南限中央付近に位置する西側調査区(4,552m²)は、その村の西のはずれであることがわかった。また、遺跡の南限である才川に沿って、縄文時代の陥し穴状遺構(溝状)が40基以上掘られており、今回も検出された。

東側調査区では、縄文時代陥し穴状遺構4基、平安時代堅穴住居跡9棟(周囲の調査区からの続き2棟含む)、掘立柱建物跡2棟(周囲の調査区からの続き1棟含む)、住居状遺構2基、土坑19基、溝跡1条(周囲の調査区からの続き)が検出された。特筆されるのは、一辺7mを越える大形住居跡、柱間2間×2間の総柱掘立柱建物跡、土師器焼成坑と推測される上坑2基などで、大形堅穴住居跡を区画するかのような大溝跡(幅約1m、最深)が注目される(写真参照)。

西側調査区では、縄文時代陥し穴状遺構6基、平安時代掘立柱建物跡1棟、溝跡1条検出された。

出土遺物は、東側調査区では、平安時代土器大コンテナ3箱、斐ゴ羽口1点、石器(砥石)約30点、鉄製品4点、鉄滓1点、西側調査区では、平安時代土器小片1点のみである。



1:50,000 地図



7mを越える大形住居跡



大形往居を区画する？大溝跡

(29) 佐原 II 遺跡

所 在 地 宮古市佐原三丁目10番1ほか

委 託 者 宮古市

事 業 名 北部環状線道路改良事業

発掘調査期間 平成21年7月6日～10月9日

調査終了面積 1,300m²

調査担当者 杉沢昭太郎・肯野 梢

主要な時代 繩文・弥生



遺跡の立地

本遺跡はJR山田線宮古駅の北北東約2kmに位置している。西から東に延びる二つの尾根に挟まれた傾斜地と平坦面からなり、調査前の現況は杉林と雜種地であった。遺跡の標高100～110mを測る。

調査の概要

調査区は三つに分かれている。北側調査区からは上幅約9mの沢跡が見つかり鉄滓・羽口などが出上しており、周辺に鉄生産（鍛冶施設）遺構が想定される。西側調査区は尾根先端部にあたり、弥生時代の堅穴住居跡が1棟検出された。この時期の小規模な集落が西側にも広がっている可能性が高い。繩文時代の落とし穴も1基検出されている。南側調査区は最も標高が高く堆積土の状態も良好であつたものの、遺物は少なく焼土を6基検出したのみであった。

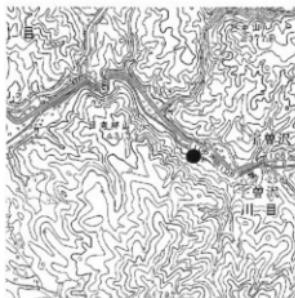
出土遺物は繩文土器が中コンテナ1箱、弥生土器が中コンテナ1箱、石器類が小コンテナ1箱、鉄滓・羽口が中コンテナ2箱、陶磁器類が小コンテナ1箱である。



弥生時代の住居跡

(30) 小屋野遺跡

所 在 地 盛岡市川目第5地割122-82ほか
 委 託 者 盛岡地方振興局土木部梁川ダム建設事務所
 事 業 名 築川ダム建設事業
 発掘調査期間 平成21年8月3日～11月13日
 調査終了面積 2,780m²
 調査担当者 丸山浩治・鳥居達人・北村忠昭・小林弘卓
 主要な時代 繩文



遺跡の立地

本遺跡は、JR盛岡駅の南東約9.2kmに位置し、梁川左岸の河岸段丘上及び南西丘陵からのびる小規模な扇状地に立地する。標高は190～215mである。崖錐性堆積層が幾重にも重なり、地点により内容や層厚が異なるため土層堆積様相は極めて複雑である。現況は山林である。なお、今年度調査予定面積は5,700m²であったが、北東部2,920m²が未了となり、次年度以降の調査となつた。さらにその北東側の周知遺跡範囲およびその隣接地について新たに試掘調査が実施され、縄文時代の遺構・遺物が確認されている。

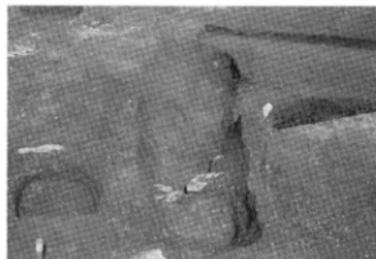
調査の概要

遺構・遺物は、調査区北東側の低位部緩斜面上で検出された。検出面は、縄文時代中期後半から平安時代以降までの5面が存在する。検出遺構は、縄文時代の堅穴住居1棟(晚期)、土器埋設遺構1基(後期)、土坑1基、柱穴状土坑4個、縄文時代晩期～弥生時代の土坑5基、焼上遺構14基、炭化物集中4箇所、中世のカマド状遺構2基、時期不明の土坑1基、烟跡1箇所、溝5条、柱穴状土坑3個である。このほか、未精査であるが、縄文時代中期後半の焼上遺構2基、後期の堅穴住居2棟、堅穴住居状遺構1棟を検出している。これらについては、次年度以降の精査となる。

出土遺物は縄文期のものが主体で、土器(中～晩期)大コンテナ6.5箱、石器大コンテナ4箱、土偶1点、円盤状土器1点、石棒類2点、炭化種実(オニグルミ等)が出上している。このほかには、弥生土器大コンテナ0.5箱、銭貨1点(元豐通寶)、近世～近代の鉄製品2点(蹄鉄・釘各1点)、陶磁器6片がある。



縄文時代晩期の堅穴住居



縄文時代晩期～弥生時代の土坑

(31) 鶴ノ木南台地遺跡

所 在 地 奥州市水沢区黒石町字鶴ノ木50-3ほか
 委 託 者 県南広域振興局土木部
 事 業 名 緊急地方道路整備事業
 発掘調査期間 平成21年8月3日～10月30日
 調査終了面積 1,736m²
 調査担当者 北田 純・小林弘卓
 主要な時代 縄文・平安



遺跡の立地

鶴ノ木南台地遺跡はJR東北本線水沢駅の南東約4kmに位置し、大田代川左岸の河岸段丘上に立地している。現況は宅地で、標高は34m前後。

調査の概要

検出した遺構は、縄文時代後期～晩期の遺物包含層（捨て場）590m²、竪穴住居跡1棟、土坑5基、配石造構2基、焼土造構13基、土器埋設遺構9基、柱穴状土坑21個、平安時代の竪穴住居跡2棟、平安時代以降の堀跡1条である。

縄文時代の遺物包含層（捨て場）は、Ⅲa層・疊混黑色土（層厚20cm）縄文時代晩期中～後葉、Ⅲb層・疊混黑褐色土（層厚60～90cm）後期中～後葉、Ⅲc層・褐色土（層厚10～20cm）後期前葉、Ⅲd層・疊混黑褐色粘土（層厚30～50cm）後期初頭から構成され、多量の遺物が層位的に出土した。



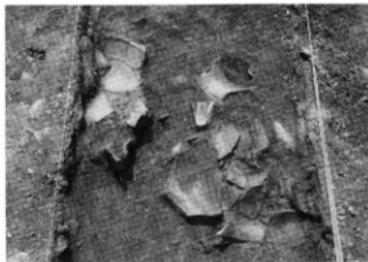
遺物包含層断面



北区旧沢跡断面



土器埋設遺構



遺物出土状況

(32) 境遺跡

所 在 地 北上市稻瀬町地蔵堂190ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局土木部
 事 業 名 緊急地方道整備事業下門岡工区
 発掘調査期間 平成21年4月8日～7月14日
 調査終了面積 1,240m²
 調査担当者 烏居達人・北村忠昭・菅 常久・小林弘卓
 主要な時代 繩文・弥生・中世

遺跡の立地

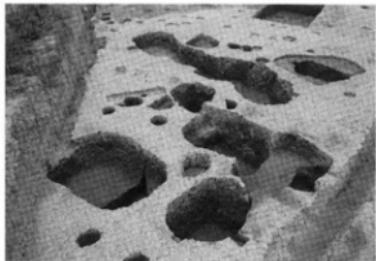
境遺跡は、北上川の東岸に所在し、JR東北本線北上駅から南に約4.5km、奥州市江刺区稻瀬と隣り合う北上市稻瀬町地蔵堂に位置する。現況は水田及び更地となっている。

遺跡周辺の地形は谷底平野及び氾濫平野を主とし、その中に自然堤防が点々と形成されている。遺跡は、その自然堤防上に立地し、平成18年度から開始された3年間の調査において、縄文時代晩期末葉から弥生時代前葉にかけての堅穴住居跡、弥生時代中後期の土坑、平安時代の堅穴住居跡、古代から中世にかけての配石遺構や堀跡・溝跡、中世の土葬墓などが検出されている。

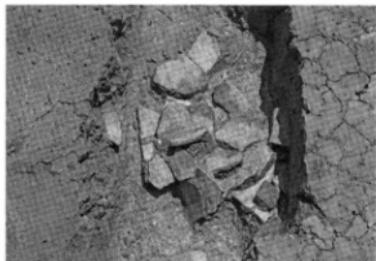
調査の概要

今回調査の検出遺構は、堅穴住居跡1棟、堅穴住居状遺構2基、土坑50基、焼土遺構2基、溝跡12条、柱穴状土坑314個、炭化物集中区2ヶ所である。縄文時代から弥生時代にかけての遺構には、堅穴住居跡と土坑がある。古代から中世には、堅穴住居状遺構2基、火葬跡と思われる2基の焼成土坑と墓壙と思われる土坑群、溝跡や柱穴状土坑群があり、当期に置いて集落があった可能性を示す。

遺物は、縄文～弥生土器が大コンテナで5箱出土している。縄文土器は、大半が縄文時代中期末葉の土器で、他には少量であるが後期前葉、晩期中後葉のもの、弥生土器がある。古代・中世土器では土師器3点、須恵器15点、かわらけ1点、陶磁器は8点の出土である。陶磁器には、中国産の青白磁や渥美産の陶器などがある。石器は中コンテナ3箱で、黒曜石製の石鏃や頁岩製のスクレーパーなどがあるが、磨石状の不明な礫が多い。その他では鉄製品が32点、鉄滓は1535g、羽口と思われる破片が15点、古銭1点が出土している。



中世の土坑群



縄文土器出土状況

(33) 五輪堂遺跡

所 在 地 一関市花泉町字五輪堂14-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局一関総合支局土木部
 事 業 名 一般国道342号花泉バイパス建設事業
 発掘調査期間 平成21年7月1日～10月9日
 調査終了面積 4,680m²
 調査担当者 村田 淳・高橋静歩・佐々木智久
 主要な時代 繩文・古代・中世・近世



遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線花泉駅から南東へ約2.5km、金流川右岸の河岸段丘上に位置する。今回は、遺跡範囲の西端及び一部その外側に続く範囲の調査を行った。調査前は休耕田であったが、昭和30年代以降に行われた圃場整備により調査区全域が大幅に削平されていた。検出面の標高は17.5～21.0mである。

調査の概要

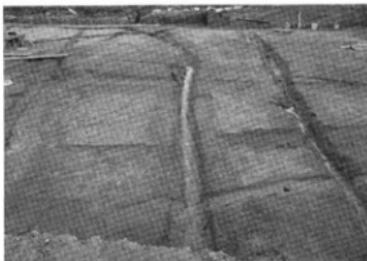
検出した遺構は、土坑10基、堀1条、溝49条、柱穴66個である。出土遺物及び遺構の重複関係から、土坑2基と溝16条が古代、土坑1基と堀1条が中世に属すると考えられ、その他は近世もしくは時期不明のものである。遺物は、土師器・須恵器小コンテナ25箱、かわらけ3点、常滑産陶器甕片1点、伊豆沼産の可能性がある陶器口鉢片1点、近世陶磁器小コンテナ1箱、石鎚4点、石臼1点、鐵鎚1点、木製品（下駄・杭など）大コンテナ2箱分などが出土している。

中世の堀は、北西～南東方向に走る長大なもので調査区内では約47m検出しているが、北西側・南東側ともさらに延びるものと考えられる。遺存状況の良かった地点の観察によると、断面形は箱形で、本来の上面幅は2.5m以上あったと考えられる。また、堆積土の状況から本遺構が一定期間滞水していたこと、近世に一度掘り返しが行われていることも確認した。この他、調査区南側では東西方向に平行して掘削されている古代の溝、調査区中央では常滑産陶器片が出土した中世の土坑などを検出している。

本遺跡の位置する涌津五輪堂地内は、過去に地名の由来にもなった国の重要指定文化財である鉄製五輪塔地輪が出土したと伝えられる場所である。今回の調査でもこの直接的関連は不明ながら中世に属する遺構（堀跡）や遺物（国産陶器）が検出されており、鉄五輪塔が造立された時期に近接する時期の資料を追加できたことが成果といえる。



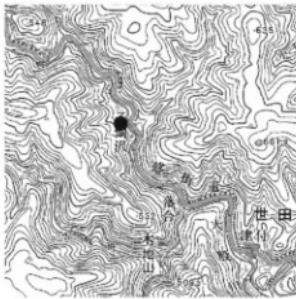
中世の堀跡



古代の溝跡

(34) 子飼沢 I 遺跡

所 在 地 気仙郡住田町世田米字子飼沢2ほか
 委 託 者 大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所
 事 業 名 津付ダム建設事業
 発掘調査期間 平成21年6月1日～9月30日
 調査終了面積 7,500m²
 調査担当者 星 雅之・佐藤里恵・高橋静歩
 主要な時代 縄文・古代・近世



遺跡の立地

本遺跡は、住田町役場の西約15km、種山高原の東約5kmに位置し、大股川右岸の河岸段丘上に立地する。平成20年度・21年度の2カ年に亘り調査が行われた子飼沢II遺跡の南側にあり、沢を挟んで近接する。標高336-362mで、現況は山林であった。

調査の概要

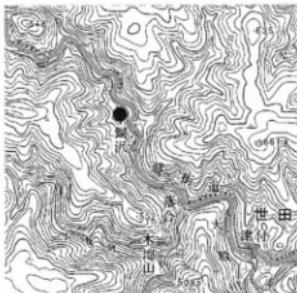
検出遺構は、縄文時代の土坑5基、古代の土坑1基、近世の鍛冶炉1基・焼土遺構4基、炭窯3基・土坑1基である。遺物は、縄文土器大コンテナ15箱、須恵器片1点、石器類大コンテナ1箱、鉄滓大コンテナ1箱が出上した。土器の主体は、縄文時代後期初頭で門前式に相当する。



遺跡全景（上が西）

(35) 子飼沢 II 遺跡

所 在 地 気仙郡住田町世田米字子飼沢1-3ほか
委 託 者 大船渡地方振興局土木部津付ダム建設事務所
事 業 名 津付ダム建設事業
発掘調査期間 平成21年4月9日～8月31日
調査終了面積 2,200m²
調査担当者 星 雅之・佐藤里恵・高橋静歩
主要な時代 縄文・近世



1:50,000 南北大半

遺跡の立地

本遺跡は、住田町役場の西約15km、種山高原の東約5kmに位置し、大股川右岸の河岸段丘に立地する。今回の調査は、平成20年度からの継続調査で、未了であった2,200m²を対象に実施した。本遺跡の南側にある子飼沢I遺跡とは沢を挟んで近接する関係にある。標高337～370mで現況は休耕田であった。

調査の概要

今年度の検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡6棟・土坑19基・粘土探掘坑1箇所、近世の製鉄炉とその上層建物（掘立柱建物跡）、鍛冶工房跡1棟（鍛冶炉・カマド状遺構・土坑など）、溝跡1条、焼上遺構1基、土坑2基、粘土探掘坑4ヶ所、性格不明遺構1基、排溝場1ヶ所である。遺物は、縄文土器大コンテナ35箱、石器類大コンテナ3箱、鉄製品中コンテナ2箱、鉄滓・炉壁・羽口など大コンテナ約500箱が出土した。



製鉄炉跡（西から）

みなみ ひづめしょうじぐら
(36) 南日詰小路口 I 遺跡

所 在 地 紫波郡紫波町南日詰字小路口26-2ほか
委 託 者 盛岡地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業
発掘調査期間 平成21年4月8日～11月17日
調査終了面積 5,825m²
調査担当者 阿部勝則・川又晋・中村絵美・八重畠ちか子
主要な時代 繩文・古代・近世



遺跡の立地

南日詰小路口 I 遺跡は、JR東北本線日詰駅の南東約1km、北上川西岸の河岸段丘に立地する。調査前の現況は、水田・宅地で、標高92～93mである。遺跡の北西側には、12世紀の樋爪（比爪）氏の居館と推定される比爪館跡が位置している。東北新幹線を挟んで西側に同II遺跡が位置する。

調査の概要

検出遺構は、平安時代の溝跡40条、道路状遺構1箇所、井戸跡6基、土坑35基、近世の溝跡5条、土坑5基などである。部分的な調査ながら、溝跡には区画を意識した溝跡や、幅8mの大溝跡も確認されている。主な出土遺物は、12世紀のかわらけ大コンテナ20箱、陶磁器大コンテナ3箱、木製品大コンテナ3箱である。比爪館周辺に位置する遺跡として、樋爪氏に密接に関連する遺跡であると考えられる。



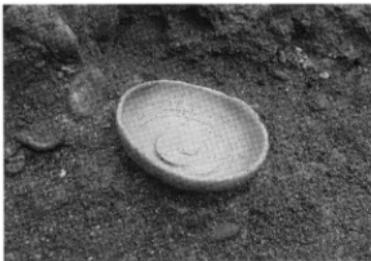
大溝跡（北から）



柱根出土状況



区画溝と道路状遺構（南から）



遺物出土状況

(37) 南日詰小路口Ⅱ遺跡

所 在 地 紫波郡紫波町南日詰字小路口54-1ほか

委 託 者 盛岡地方振興局農政部農村整備室

事 業 名 経営体育成基盤整備事業南日詰地区

発掘調査期間 平成21年4月8日～11月17日

調査終了面積 6.461m²

調査担当者 阿部勝則・川又 晋・中村絵美・八重畠ちか子

主要な時代 繩文・古代・近世



遺跡の立地

南日詰小路口Ⅱ遺跡は、JR東北本線日詰駅の南東約1km、北上川西岸の河岸段丘に立地する。調査前の現況は、水田・宅地などで、標高は92～93mである。遺跡の北西側には、12世紀の樋爪（比爪）氏の居館と推定される比爪館跡が位置している。東北新幹線を挟んで東側に同I遺跡が位置する。

調査の概要

検出遺構は、平安時代の竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡3棟、溝跡23条、井戸跡7基、土坑13基、近世の溝跡4条、掘立柱建物跡3棟、土坑8基などである。平安時代の溝跡や掘立柱建物跡、井戸跡は、出土遺物から12世紀と推定される。主な出土遺物は、土師器・須恵器大コンテナ2箱、12世紀のかわらけ大コンテナ2箱、陶磁器大コンテナ2箱、木製品大コンテナ7箱、近世の陶磁器大コンテナ3箱である。比爪館周辺に位置する遺跡として、樋爪氏に密接に関連する遺跡であると考えられる。



古代の竪穴住居跡（西から）



12世紀の区画溝と掘立柱建物跡（南から）



部材と陶磁器が出土した井戸跡



近世の屋敷地跡（北から）

(38) 水尻遺跡
みずしき

所 在 地 奥州市前沢区古城字水尻135ほか
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤事業古城2期地区
 発掘調査期間 平成21年10月1日～11月27日
 調査終了面積 1,496m²
 調査担当者 米田 寛・高橋静歩
 主要な時代 旧石器・縄文・古代



遺跡の立地

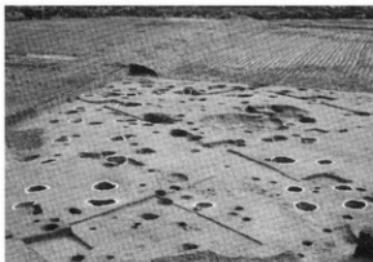
本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅より南へ約2km、北上川西岸の水沢高位段丘面上に形成された微高地に立地する。標高は35～40mで調査前の現況は水田、畑地である。

調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、石器集中部6箇所、掘立柱建物4棟、竪穴住居状遺構1基、土坑7基、柱穴列4条、柱穴状土坑218個、周溝1条、溝10条、不明遺構4基である。遺物は旧石器305点、縄文土器47点、土師器、須恵器片大コンテナ15箱、綠釉陶器1点、土錘7点、石錘・石錐・剥片などの剥片石器4号1袋、敲石などの鍛石器数点が出土した。



周溝（南から）



掘立柱建物（西から）



土坑内遺物出土状況（南から）



旧石器出土状況（南から）

(39) 古城方八丁遺跡

所 在 地 奥州市前沢区古城字宿ノ前140-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業古城2期地区
 発掘調査期間 平成21年10月1日～11月27日
 調査終了面積 1,285m²
 調査担当者 村田 淳・星 雅之・佐藤里恵
 主要な時代 縄文・古代・中世・近世

遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅から南東へ約2.2km、北上川西岸低位段丘の微高地上に位置する。調査前は畠地・水田として利用されており、過去の圃場整備により調査区全域が大幅に削平されていた。検出面の標高は31～32mである。

調査の概要

調査区は道路・水田を挟んで4つに分かれており、それぞれの調査区で遺構・遺物を検出した。検出した遺構は、縄文時代の陥し穴2基・土坑2基、古代の竪穴住居3棟・土坑25基・溝8条・焼土2基、平安時代末の陶器埋設遺構1基、中世の井戸3基、近世の堀2条・溝1条、近世及び時期不明の掘立柱建物5棟、時期不明の土坑17基、柱穴399個などである。遺物は、土師器・須恵器中コンテナ4箱、縄文・弥生土器十数片、渥美産陶器大甕中コンテナ1箱、常滑産陶器片2点、剥片石器（石礫2・石匙1・剥片数点）、砥石2点、礫石器中コンテナ4箱、石帶（丸綱）1点、鉄製品（鎌2・馬具1）、鉄滓少量、寛永通宝1点、木製品（杭？）4点などがある。

本遺跡では古代に属する遺構・遺物が最も多い。竪穴住居のうち1棟は、燃焼部が住居外側へ張り出す形態のカマドを有するもので、岩手県内でも検出例の少ないタイプである。土坑は焼土や土器を意図的に廃棄したと考えられるものが多く、そのうちの1基からは石帶（丸綱）が出土している。

陶器埋設遺構は渥美産の大甕を埋設したもので、後世の擾乱により大部分は失われていたが、陶器の上面に積まれていたと思われる礫が遺構内に多量に落ち込んでいたことから本来的には礫を使用した塚状の遺構であった可能性がある。この他、常滑産陶器が出土した中世の井戸、近世の環濠屋敷に関わる可能性がある堀など、多岐にわたる時代の遺構・遺物が検出されている。



1:50,000 水沢



竪穴住居のカマド



陶器埋設遺構

(40) 四反田 I 遺跡

所 在 地 奥州市前沢区古城字四反田154-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育基盤整備事業古城2期地区
 発掘調査期間 平成21年10月1日～11月16日
 調査終了面積 471m²
 調査担当者 丸山直美・佐々木智久
 主要な時代 平安・近世以降

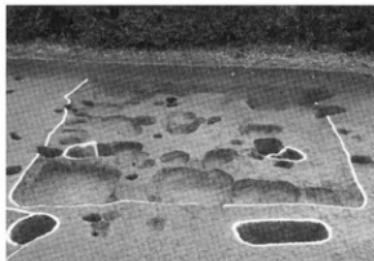
遺跡の立地

本遺跡はJR東北本線陸中折居駅の南東約2.1kmに位置し、北上川西岸に形成された低位段丘の微高地に立地する。標高は31m前後で、調査前の現況は畑地および水田である。

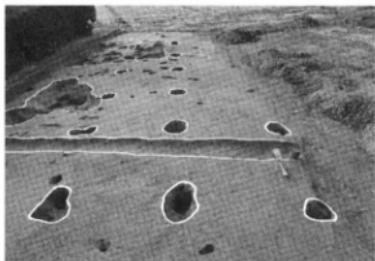
調査の概要

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑14基、時期不明（一部は平安時代に属する可能性有り）の溝跡6条、小柱穴36個、近世以降の性格不明土坑1基、煙跡1箇所である。

遺物は土師器を主体として、須恵器、土製品（土錘1）、炭化種子などが合わせて中コンテナ4箱分出土している。調査の結果、本遺跡が平安時代の集落跡であることが判明した。また、近世末以降には畑が作られるなど、周囲より微妙に高い地形を生かした土地利用が断続的になされていたことが判明した。



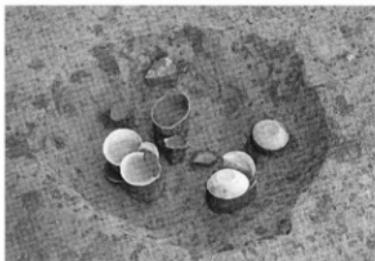
平安時代の竪穴住居（北から）



平安時代の掘立柱建物（東から）



土坑内火山灰堆積状況（南東から）



土坑内遺物出土状況（東から）

(41) 四反田Ⅱ遺跡

所 在 地 奥州市前沢区古城字四反田6
 委 託 者 県南広域振興局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業古城2期地区
 発掘調査期間 平成21年10月1日～11月16日
 調査終了面積 60m²
 調査担当者 丸山直美・佐々木智久
 主要な時代 平安・近世以降

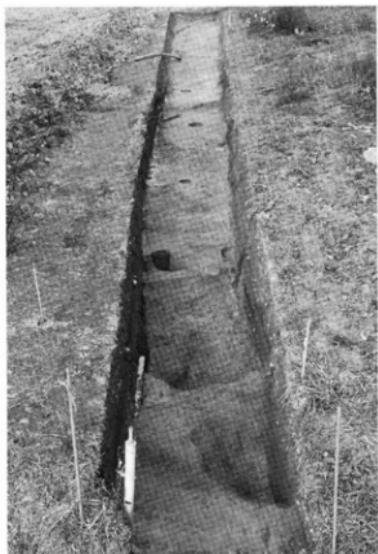


遺跡の立地

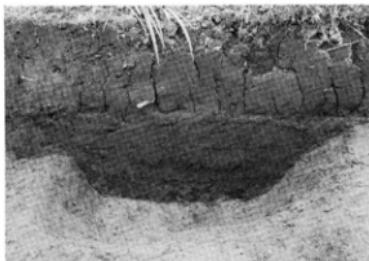
本遺跡はJR東北本線陸中折居駅の南東約2kmに位置し、北上川西岸に形成された低位段丘上の微高地に立地する。標高は約32mで、調査前の現況は水田である。

調査の概要

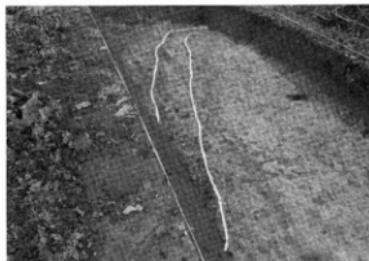
検出された遺構は、近世の土坑1基、時期不明の土坑2基、溝跡5条、小柱穴5個である。遺物としては木製品を中心に小コンテナ1箱分が出土している。内訳は土器類（壺片）、須恵器（壺壺類片）、陶磁器（皿・鉢片）が各数点と、木製品（下駄2点・加工痕のある木片3点）である。



調査区全景（南から）



土坑（西から）



溝跡（南西から）

(42) 西部遺跡

所 在 地 花巻市大迫町外川目第27地割144ほか
 委 託 者 県南広域振興局花巻総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業中居地区
 発掘調査期間 平成21年9月1日～11月19日
 調査終了面積 1,450m²
 調査担当者 杉沢昭太郎・菅野 梢
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

本遺跡は稗貫川の支流である中居川を1.5km程遡った東岸の中位段丘に立地している。現況はその多くが水田となっており、段丘面の北半部（約16,000m²）が遺跡の範囲とみられている。

調査の概要

遺跡の西～南西側と中央部の一部を調査し、縄文時代前期の住居跡6棟、縄文時代の土坑6基、焼土・炉跡21基、集石1基、中世の掘立柱建物跡2棟、近世以降の溝跡1条、時期不明の上坑3基、時期不明の採掘坑約20箇所が検出された。縄文時代の住居跡では上幅3mの円形を呈する小形の住居や、長軸方向で20mに達するであろう大形住居の一端を検出している。また、3棟の住居跡が重複して検出された地点もある。住居跡は遺跡中央から北側に展開する傾向が窺える。

遺物は縄文土器が中コンテナ8箱、石器類が中コンテナ2箱、銭貨2点、石製品3点ほかが出土した。



大形住居跡の一部



大形住居跡出土土器



小形住居跡

(43) 舟渡 I・II 遺跡

所 在 地 北上市更木6地割36-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育成基盤整備事業更木新田地区
 発掘調査期間 平成21年5月11日～11月13日
 調査終了面積 11,847m²
 調査担当者 菅 常久・瀬 浩二郎・山田めぐみ
 主要な時代 弥生・古代・近世



遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線村崎野駅の北東方向約6.0km、北上市の北東部に位置し、北上川左岸に形成された自然堤防上に立地している。北方向から東方向へ屈曲するかのように、北上川が遺跡の南側を流れている。遺跡の標高は64～66mを測り、現況は主に水田、畑地である。当該事業に係る記録保存目的の発掘調査は、平成18年度から実施され今年度で終了する。

調査の概要

今回の調査面積は、本発掘調査区5,331m²、確認調査区6,516m²の計11,847m²が対象である。検出された遺構は、竪穴住居跡5棟（古代）、焼成遺構1基（古代）、焼土1基（時期不明）、土坑23基（弥生3、時期不明20）、溝跡31条（弥生1、時期不明30）、柱穴状土坑65個（近世以降）、墓壙16基（近世）である。出土遺物は、弥生土器、古代の土師器を主体として、縄文・弥生土器（大コンテナ35箱）、土師器・須恵器（大コンテナ35箱）、石器（小コンテナ1箱）、近世陶磁器14点、金属遺物（鎌1点、銅鏡22点、鉄鏡10点以上、煙管5点、板状鉄製品1点、その他1点）である。

古代の集落の所在を物語る竪穴住居跡は5棟しか検出されなかったが、遺物の出土状況等から、調査区外にも所在しているものと思われる。また、隣接する野沢II遺跡と類似するような遺物も出土している。



調査区 (黒道より東側: 上が北)



調査区 (県道より西側: 上が北)



古代の竪穴住居跡 (土器出土状況)

(44) 野沢Ⅱ遺跡

所 在 地 北上市更木19地割143-1ほか
 委 託 者 県南広域振興局北上総合支局農林部農村整備室
 事 業 名 経営体育基盤整備事業更木新田地区
 発掘調査期間 平成21年4月10日～8月5日
 調査終了面積 4,500m²
 調査担当者 菅 常久・溜 浩二郎・山田めぐみ
 主要な時代 繩文・弥生・古代・近世



遺跡の立地

遺跡は北上市役所の北東約6.5kmに位置し、北上川左岸の沖積段丘の微高地に立地する。遺跡の標高は63～64m前後で、調査前の現況は水田・畑地である。当遺跡の調査は昨年も実施されているが、今回の調査はその南側に隣接した箇所である。全体面積のうち2,290m²は検出のみの確認調査区である。

調査の概要

今回の調査で見つかった遺構は、竪穴住居跡5棟（弥生1・古代4）、土坑3基（弥生1・近世2）、井戸跡1基（近世）、掘立柱建物跡1棟（近世）、柱穴状土坑137個（近世以降）、溝跡9条（古代1、近世8）、性格不明遺構1基（近世）である。

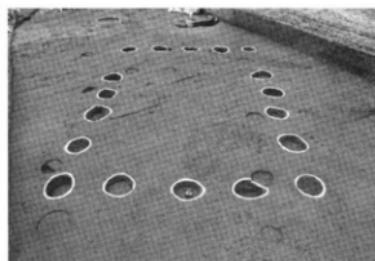
遺物は土器が大コンテナ3箱、石器が小コンテナで1箱、石製品1点、陶磁器19点である。土器は縄文・弥生土器が遺構外、土師器・須恵器は竪穴住居跡およびその周辺から出土している。



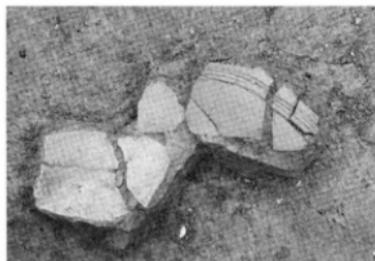
遺跡全景（上が北）



竪穴住居跡



掘立柱建物跡



弥生土器出土状況

報告書抄録

ふりがな	へいせいにじゅういちねんどはつくちょうさはうこくしょ							
名	平成21年度発掘調査報告書							
画 面 名								
卷 次								
シ リ ーズ 名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリ ーズ 番 号	第571集							
組 者 否 名								
画 集 施 開	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下巻町11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
実 行 年 月 日	西暦 2010年3月18日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所 取 遺 跡 名	所在地	市町村	遺跡番号	
武治V遺跡	岩手県奥州市東山字 山川字学水道 58-15ほか	03201	KE57-1125	39度 51分 21秒	141度 10分 32秒	2009.04.09 ~ 2009.06.15	3,741m ²	国道1号沿線ハイバ ス建設事業
所 取 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項	
武治V遺跡	狩り場	縄文時代 不明	陥し穴状遺構6基 灰土塗構1基	織文土器	土器は遺構外から出土	
要 約	縄文時代の陥し穴状遺構が甚多出され、縄文時代の特異場所であることが明らかになった。遺物は縄文時代後期の土器が1片のみの出土である。この土器片の存在から、調査区周辺に集落の存在が予想される。							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所 取 遺 跡 名	所在地	市町村	遺跡番号	
落合2区1遺跡	岩手県花巻市京和 町落合2区1地内	03205	ME38-0293	39度 22分 02秒	141度 13分 53秒	2009.09.01 ~ 2009.09.17	1,515m ²	東北横断自転車道落 合川緑新直轄事業
所 取 遺 跡 名	種 别	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項	
落合2区1遺跡	集落・ 生糸遺跡	縄文時代 近世	土坑5基 石切場	織文土器・台器 陶器	近世と考えられる石切場	
要 約	縄文時代後期の土器片を含む上坑を検出した。また、調査区内には多量の花崗岩転石が認められ、これらの中に矢穴を残すものが存在する。このことから、ここで石切り作業がおこなわれたと考えられる。調査所見から時期を特定することは困難であるが、花巻市の石垣の石材がこの周辺からもたらされたという史料もあり、近世初頭の石切場であった可能性が考えられる。							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所 取 遺 跡 名	所在地	市町村	遺跡番号	
立花前遺跡	岩手県北上市立花 第5地割108-4 ほか	03206	ME66-1263	39度 05分 05秒	140度 08分 07秒	2009.09.01 ~ 2009.09.30	1,250m ²	北上川中流域治水対 策事業
所 取 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項	
立花前遺跡	集落跡	縄文～ 弥生	土坑1基 井戸 古代	織文土器・弥生土器・石器 土器		
要 約	弥生時代の土器・石器が出土した。時代の特定できる遺構は弥生時代前半の土坑1基のみである。今後の調査区に隣接する栗側に、縄文時代～古代の集落の中心が存在する可能性が高い。							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所 取 遺 跡 名	所在地	市町村	遺跡番号	
平根原1遺跡	岩手県奥州市平根 沢区役所前字平根 原5-1	03215	NE31-1090	39度 05分 34秒	140度 52分 31秒	2009.09.01 ~ 2009.09.30	12,000m ²	利根ダム建設事業
所 取 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項	
平根原1遺跡	敷地面	縄文時代	なし	なし		
要 約	今回の調査区では遺構・遺物は確認されず。							

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
天盛道跡 第25次調査	吉手原益岡市益岡 新山1地割47-1ほか	市町村	LE26-0139	39度 40分 27秒	141度 08分 05秒	2009.09.15 ~ 2009.09.17	盛岡南新都市地区 細整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
矢筋道跡 第25次調査	集落跡	平安時代 中近世	なし	なし			
要約	矢筋道跡は、繩文時代の狩獵・採集の場、平安時代の集落跡、中近世の居館・集落跡である。今回の調査箇所は、遺跡推定範囲の南東側に当たる。トレンチを入れたが、表土直下に地山砂層が検出され、遺構・遺物の出土はなく、今後の調査箇所は、既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
矢筋道跡 第26次調査	吉手原益岡市益岡 新田1地割49-1ほか	市町村	LE26-0139	39度 40分 27秒	141度 08分 05秒	2009.09.15 ~ 2009.09.17	盛岡南新都市地区 細整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
矢筋道跡 第26次調査	集落跡	平安時代 中近世	なし	なし			
要約	矢筋道跡は、萬葉時代の狩獵・採集の場、平安時代の集落跡、中近世の居館・集落跡である。今回の調査箇所は、遺跡推定範囲の南東側に当たる。トレンチを入れたが、表土直下に地山砂層が検出され、遺構・遺物の出土はなく、今後の調査箇所は、既に遺跡範囲から外れている可能性が高い。						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
人吉北遺跡 第15次調査	吉手原龍岡市本吉 字小瀬3-3	市町村	JR16-2036	39度 41分 08秒	141度 07分 04秒	2009.06.01 ~ 2009.06.30	主要地方道優美和西 線飯岡地区道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
大谷北遺跡 第15次調査	古墳時代 平安時代	穴六住居跡1棟 溝跡1条					
要約	今回の調査において、7世紀後半の穴六住居跡1棟と10世紀代の溝跡1条が確認された。古墳時代終末には墓葬が認められ、平安時代後半には区画溝によって囲まれた建物跡が存在したことが明らかとなった。遺跡北側は旧河道に落ち込む地形であることことが確認された。						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
高尾城II遺跡	吉手原氣仙郡住田 町世田木字高尾 町36-1ほか	市町村	NF13-1389	39度 08分 43秒	141度 28分 41秒	2009.07.01 ~ 2009.08.24	一般国道397号線高 岸段地区道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
高尾城II遺跡	集落	縄文時代 時期不明	豊穴住居跡1棟 土坑1基、焼土遺構1基 性格不明遺構2基 土坑1基、焼土遺構1基				
要約	縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。今回の調査は、遺跡範囲の北部を対象とし、結果、集落の先端部の移軸を明らかにした。縄文集落の土体は、調査区南側に広がる宅地や畠地開拓に生存する可能性が高い。						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号
八幡遺跡	吉手原龍岡市山前 武区片山字八幡 91ほか	市町村	NE46-2317	39度 09分 51秒	141度 08分 00秒	2009.05.01 ~ 2009.05.29	経営体育成基盤整備 事業白山地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
八幡遺跡	畠地	縄文時代 平安時代 近現代	住居状遺構1棟 隣し穴状遺構1基 住居状遺構1棟 土坑2基、溝跡2条 柱穴状ピット1個 溝跡1条 土坑1基 柱穴状ピット29個	調査土器・石器・石器品 土解剖・須恵器 石器・土製川盛			
要約	今回の調査から縄文時代後期前葉、平安時代中期の遺構・遺物が出土し、明後沢川の河岸に立地する縄文時代・平安時代の複合遺跡であることが確認された。遺跡の範囲は調査区北側及び明後沢川河畔まで抵がると考えられる。						

赤緯度・緯度は日界断線系における数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第571集
平成21年度発掘調査報告書

印 刷 平成22年3月15日
発 行 平成22年3月18日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話 (019) 638-9001
F A X (019) 638-8563

発 行 (財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電 話 (019) 654-2235
F A X (019) 625-3595

印 刷 有限会社 内海印刷 盛岡営業所
〒020-0875 岩手県盛岡市清水町8-8-108
電 話 (019) 622-0288

